# 宮崎県・大分県のウミガメの民俗

## ―利用・信仰習俗と保護をめぐる地域的差異と時代的変化―

藤井弘章

### はじめに

宮崎県では、宮崎野生動物研究会を中心に、四〇年以上、ウミガメの調査・保護活動がおこなわれている。その結果、宮崎県におけるアカウミガメの産卵データが経年的に蓄積されてきた。また、日本国内におけるウミガメ保護活動を牽引するような運動となっている。研究会のメンバーなどがまとめた報告には、ウミガメの卵が「盗掘」されていたことや、卵が薬として食べられていたことなども記録されている〔宮崎野生動物研究会　一九七七、清水　一九七八、清水・中島　一九七八、中島　一九八九、岩本　一九九四、竹下　二〇〇九など〕[1]。ただし、ウミガメの産卵データが集積されてきたのとは対照的に、卵採取の実態や、卵の食習俗の具体例については、ほとんど情報がない。一方、宮崎県における民俗研究は山間部における芸能・狩猟・食などを対象としたものが多く、沿岸部における生業や食文化などに関する研究は限られている〔宮崎県　一九九九〕[2]。わずかに、民俗学者の田中熊雄氏や川崎晃稔氏により、宮崎県でもウミガメの肉が食べられていたという報告がみられる程度である〔田中　一九八一、川崎　一九八五など〕。このような断片的な報告を合わせると、宮崎県ではウミガメの卵や肉を食べる習俗が広がっていたことが予想されるが、こうした習俗についての全体像は不明である。

一方、大分県では、臼杵市にウミガメの供養塔が存在することが知られている。この事例は多くの報告や一覧表

に引用されてきた〔松崎　一九九六、小島　二〇〇三、宮脇　二〇〇八、田口　二〇一一、藤井　二〇一四ａなど〕。しかし、大分県における他地域の供養習俗や、卵の食用習俗など、ウミガメの民俗全体については明らかになっていない。

筆者はウミガメの民俗を全国的に調査しているが、宮崎県から大分県にかけての九州東海岸におけるウミガメの民俗は、これまで大分県臼杵市と大分市の一部で調査しただけであった。そこで、今回は、宮崎県の宮崎市・新富町、大分県の佐伯市・大分市・日出町を中心に調査をおこなった。宮崎市・新富町はウミガメの肉や卵の利用習俗、大分市・日出町は供養習俗が存在したという文献や情報を得たために選定した。ただし、佐伯市についてはウミガメの民俗に関する特徴的な情報があったわけではない。地域的な差異を比較検討するために調査をおこなった。[3]

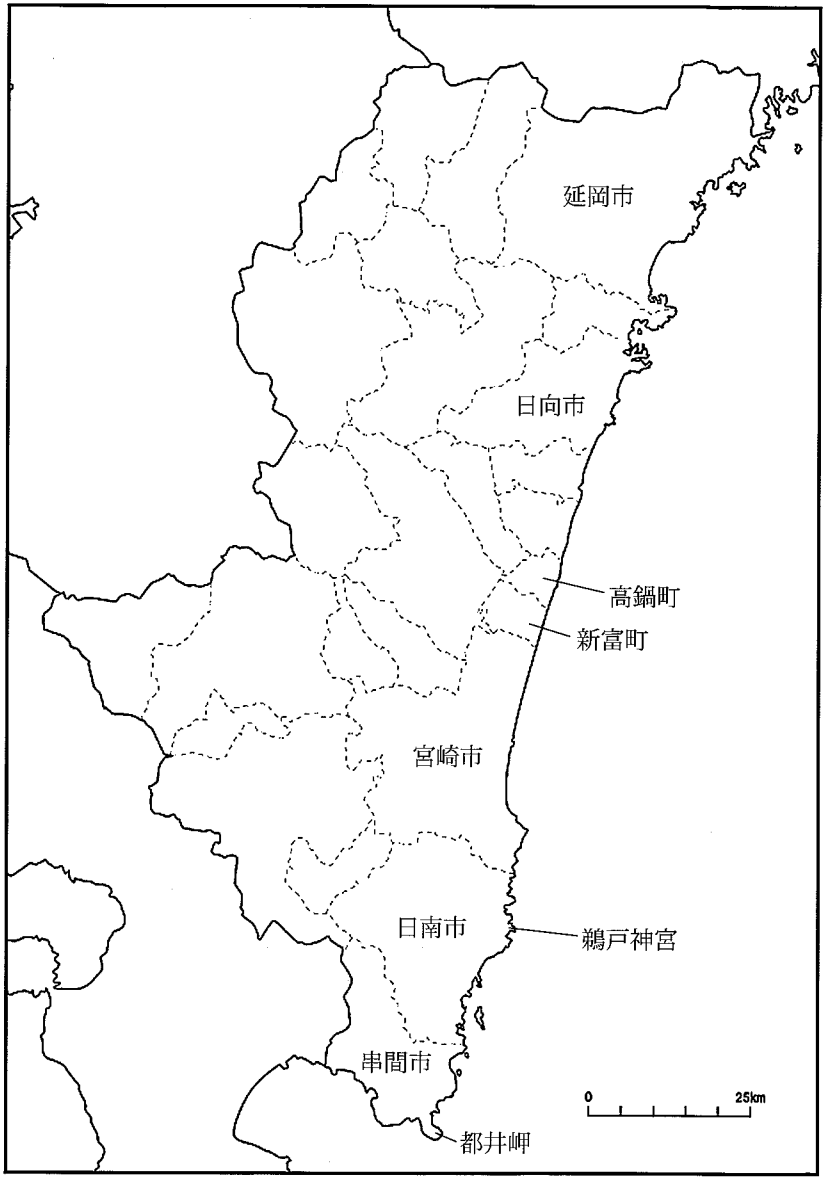
## 一　ウミガメの生態と調査・保護活動

### 1　宮崎県の状況

#### a　調査・保護活動開始以前

宮崎県の日向灘沿いには、砂浜が発達した海岸が続いている。現在、宮崎県の海岸は日本有数のアカウミガメの産卵地として知られている。調査・保護活動が開始されたあとの文献には、宮崎県のウミガメは昔から有名であった、などと記されているが〔清水　一九七八、中島　一九八九、岩本　一九九四など〕、どのようなことが知られていたのかは不明である。[4]

筆者が確認した限りではあるが、[5]宮崎県のウミガメについて記した文献として早い段階のものとしては、昭和五年（一九三〇）に檍（あおき）小学校が発行した『阿をき史』の「郷土の理科教材」の記述がある。「爬虫類・両生類」の




地図１　宮崎県関連地図

「亀類」の中に、「いしがめ」、「すっぽん」とともに、「うみがめ」という項目がある。ここには、「時々、江田新別府川口等に上つて卵を産む」と書かれている〔檍小学校　一九三〇〕。檍村（現在、宮崎市）は、大淀川河口部の北岸に位置する。江田川と新別府川の河口部付近には一ッ葉入り江があり、宮崎港改修までは広い砂浜が広がっていた。

その他、昭和一〇年（一九三五）に住吉尋常高等小学校が発行した『住吉郷土誌』にも、第六章「動物」(三)「爬虫類」3「亀類」に「いしがめ」と「あをうみがめ」と出ている〔住吉尋常高等小学校　一九三五〕。その後の研究で明らかになっているように、宮崎の海岸に上陸・産卵するのはアカウミガメであるため、アオウミガメという記載は間違いである。ただし、第六章の冒頭には、「本村に棲息する重要動物としては吾人の日常克く知り盡くしてゐるもののみにして、特に注目するに價あるものはない。動物分類に従ひ、吾人の関係深きもののみ列記する事とする。」とある。住吉村（現在、宮崎市）は、檍村の北に位置する地区である。昭和初期の住吉村の人々にとって、ウミガメは日常的によく知っている動物であったようである。

その後、昭和二三年（一九四八）発行の『暖地の動物学』には生物学の知見を踏まえた記述がある〔中島・清水　一九四八〕。この本は、宮崎農林専門学校の教員であった中島茂氏と清水薫氏の共著で、昭和初期からの採集記や研究誌をもとに宮崎県の動物についてまとめたものである。[6] 宮崎の野生動物を最初に紹介した文献であるという〔清水　一九七八〕。この中に、「アカウミガメ」という項目がある。ここには、九州東南海域に時々現れて地曳網に入ること、とくに宮崎県では一ッ葉海岸の砂浜に六月ごろの夜に上陸・産卵することが記されている。また、アオウミガメは小笠原に生息し、宮崎県では少ないとしている。このようなウミガメの記録はあるものの、宮崎県においてウミガメの生態が把握されてきたのは昭和四〇年代後半からであった。

b　調査・保護活動の開始

宮崎県において、昭和三〇年代からウミガメの生態に注目したのは石井正敏氏であった。石井氏がウミガメと出会ったのは昭和三八年（一九六三）であったという。石井氏は、写真仲間とともに、宮崎の野生動物の撮影について切磋琢磨したというが、当初は、ウミガメに関する詳しい情報がなく、いつ、どこに、どんなふうに来るのか、まったく分からなかったと述べている〔石井　一九九四〕。石井氏は、高鍋町の出身で、昭和三八年（一九六三）から、宮崎交通株式会社「こどものくに」写真室に勤務した〔石井　一九八四〕。ウミガメの写真撮影をするうちに、ウミガメの産卵を観察するようになった[7]。石井氏の活動は次第に注目を集めるようになったようで、昭和四〇年代の新聞記事ではしばしば紹介されている（『西日本新聞』昭和四六年一〇月二六日・二七日・二八日・一一月三日・昭和五〇年五月五日）[8]。石井氏は、ウミガメが減少していることに不安をおぼえ、保護活動をおこなうようになったという。石井氏が観察を始めた昭和四二年（一九六七）ごろには、一晩に三回も産卵を目撃したが、昭和四六年（一九七一）には六月から八月までの三か月に産卵に出会ったのは二〇回ほどであったという（『西日本新聞』昭和四六年一〇月二八日）。

その後、宮崎市の一ツ葉海岸にフェニックス自然動物園を建設した竹下完氏は、昭和四六年（一九七一）五月、一ツ葉海岸を歩いているときに偶然アカウミガメの足跡を発見した〔竹下　二〇〇九〕[9]。動物園建設のために宮崎県にやってきた竹下氏は、ウミガメの卵がほとんど「盗掘」されていることに驚いて調査・保護活動を開始したが、当初は、竹下氏など動物園の職員数名が調査していただけであったという。

一方、昭和四〇年代後半には、宮崎市周辺でウミガメの死体が打ち上げられることがしばしばあった。当時、原因としては、海洋汚染や定置網での死亡などが想定された。当時の新聞には、宮崎大学の中島義人氏の話として、昭和四六年から四九年までに、約二〇頭のウミガメの死体が打ち上げられた、と紹介されている（『宮崎日日新聞』

昭和四九年六月二九日)。「ウミガメの胃袋からビニール袋が見つかったむごたらしい事実は新聞、テレビで報道され、人々に大きなショックを与えた。」という記事も見られる(『西日本新聞』昭和五〇年五月一〇日)。青島海岸などにおいてウミガメが減少している原因として、海岸の観光開発、乱獲、海洋汚染をあげている新聞記事もある(『読売新聞』昭和四九年六月二一日)。

このような時期に、宮崎大学農学部の清水薫氏などの提案によって宮崎野生動物研究会が発足する。昭和四八年(一九七三)のことであった。現在、宮崎野生動物研究会の会長をしている岩本俊孝氏によると、この時期、野生動物に興味のある人たち数名が連携し始めたという。また、列島改造の開発に対して、次第に公害訴訟や自然保護の活動が活発になっていた時期であった、という。[10]

ついで、昭和四九年(一九七四)三月六日には、石井正敏氏・中島義人氏・竹下完氏が宮崎市内で集まり、宮崎野生動物研究会の一部会としてアカウミガメを守る会(会長は清水薫氏)を発足させた。同年五月から守る会は活動を開始し、ウミガメの産卵、「盗掘」の調査をおこなっていく(『西日本新聞』昭和五〇年五月一〇日)。行政を動かし、保護活動を展開していくための基礎資料を集めることが目的であったようである。

最初の本格的な報告書である『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』には、昭和四九年の調査は、宮崎市の依頼を受け、宮崎野生動物研究会がおこなったと記されている。この報告書によると、調査をおこなったのは、清水薫氏(宮崎大学農学部)・中島義人氏(宮崎大学農学部)・竹下完氏(フェニックス自然動物園)・石井正敏氏(こどものくに)・西野三郎氏(穆佐中学校)らであった。その結果、宮崎市の青島から佐土原町の石崎川河口までの海岸に、五月一五日から八月二四日にかけて上陸したウミガメは推定約八八〇頭に達することが分かり、日本でも有数のアカウミガメの産卵地であることが確実になったという。また、ウミガメの卵は大半が「盗掘」されているという実態が明らかになった(宮崎野生動物研究会　一九七七)。[11]

c　調査・保護活動の本格化

昭和四九年の報告書などをもとにして、昭和五〇年（一九七五）六月一二日、アカウミガメ繁殖地は宮崎市指定の天然記念物となった。[12] 指定範囲は、こどものくにの南端より松崎海岸、および、一ッ葉海岸より住吉海岸であり、毎年六月一日より一〇月三一日の期間指定であった。指定後の昭和五一年（一九七六）から、宮崎市教育委員会の委託を受けて、宮崎野生動物研究会が本格的なウミガメ調査を開始することになる。[13]

昭和五一年（一九七六）以来、こどものくに海岸（一・五km）・木花運動公園海岸（一・〇km）・松崎海岸（四・〇km）、大淀川と宮崎港を隔てた北側の一ッ葉海岸（四・〇km）・住吉海岸（二・六km）および、宮崎市北隣の旧佐土原町の明神山海岸（二・八km）という六つの海岸で調査がおこなわれてきた。[14]

天然記念物指定直後の昭和五一年七月一五日には、産卵地の砂浜に、「市指定天然記念物アカウミガメ繁殖地」、「卵の採取を禁じます」と書かれた標柱が二一本立てられた（『西日本新聞』昭和五〇年七月一六日・『宮崎日日新聞』昭和五〇年七月一六日）。[15] 標柱以外にも、看板を立て、町内会にポスターを貼ることなどもおこなわれた（『西日本新聞』昭和五四年一二月二三日）。宮崎市教育委員会から関係学校に対して「アカウミガメ繁殖地保護について（お願い）」の通達が出されたようである（宮崎野生動物研究会　一九七七）。野生動物研究会では、上陸・産卵調査をおこなうだけではなく、ウミガメ保護の必要性を啓発し、環境教育としてアカウミガメの観察会や子ガメの放流を実施していた。[16]

竹下氏によると、ウミガメの調査・保護活動開始当初は、卵の「盗掘」をなくすのが大きな目標であったというが（竹下　二〇〇九）、天然記念物指定後も、「盗掘」には罰則がなかった。「法的な罰則はないので、頭を下げて説得するしかない」という状態であった（『西日本新聞』昭和五四年一二月二三日）。それでも、野生動物研究会の努力と、行政の後押し、マスコミの報道などもあって、ウミガメ保護の意識が高まっていったようである。

このような活動によって、「盗掘」は次第に減少していったが、市の天然記念物指定後も「盗掘」は続いていた。そこで、野生動物研究会では、宮崎大学に委託してウミガメの卵の成分を分析し、昭和五九年（一九八四）にウミガメ卵は鶏卵よりも栄養価値が低いというデータを発表した〔山内　一九八四〕[17]。竹下氏によると、データを発表した結果、「盗掘」は激減したという〔竹下　二〇〇九〕。しなしながら、後述するように、昭和五九年にはすでに「盗掘」は相当少なくなっていたため、データ発表によって「盗掘」が激減したことは認められない。その後、平成六年（一九九四）ごろには、シーズン中に二、三例になっており〔紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会　一九九四〕、平成八年ごろ（一九九六）から盗掘は確認されていない[18]。

d　調査・保護活動の拡大

当初、宮崎市から出発したウミガメの調査・保護活動であったが、次第に宮崎市周辺の海岸にも活動が広まっていった。調査・保護に従事する人たちが、県外出身者や研究者・教育関係者から、地元出身者などに広がっていった時期でもある。その結果、昭和五五年（一九八〇）六月二四日、宮崎市・佐土原町（現在、宮崎市）・新富町・高鍋町のアカウミガメ繁殖地が宮崎県指定の天然記念物となった。これにともなって、旧佐土原町の大炊田海岸（三・三km）、新富町の新富海岸（四・三km）、高鍋町の堀之内海岸（三・〇km）において、調査が開始された。その後、平成八年（一九九六）三月二五日には、日南市の梅ヶ浜海岸～風田・平山海岸、延岡市の長浜海岸も県指定天然記念物に追加された[19]。県指定の天然記念物になったことで、宮崎県文化財保護条例により、ウミガメの補殺、卵の盗掘は罰金が科せられることになった（『宮崎日日新聞』昭和五五年六月二〇日・『読売新聞』昭和五五年六月二〇日）。その後、平成一五年（二〇〇三）九月二九日、日向市でも市内のウミガメ産卵地を市の天然記念物に指定している。

このように、宮崎県におけるウミガメの調査・保護活動は、宮崎市から開始され、次第に宮崎県全域に広がっていった。宮崎市以外におけるウミガメの調査・保護活動の経緯を把握するため、筆者は、平成二七年（二〇一五）一二月、新富町において新富町ウミガメ保存協議会の会長・根井武俊氏や新富町教育委員会の樋渡将太郎氏に話をうかがった。新富町では、富田浜全域の調査がおこなわれるようになった一〇年ほど前から、ウミガメの保護活動が活発になったという。平成一七年（二〇〇五）から、広報で呼びかける形で、ウミガメ保護を前面に出し、浜の清掃活動を実施している。二年前から、町として金銭面での補助をおこなうため、新富町ウミガメ保存協議会を立ち上げた。根井氏は富田浜南の調査をおこなうようになった人である。仕事を退職してから、人に勧められて海岸を歩くようになり、さらにウミガメの観察を勧められて、産卵を確認するようになった。次第に、積極的にウミガメの調査を始めるようになったという。県が野生動物研究会に調査を委託しているので、会員か会員の立ち合いでないと卵を移植できない。したがって、調査にかかわる人は野生動物研究会の会員になったうえで調査をおこなっている。協力する人も徐々に増えてきており、年二回、浜を清掃する際には、八〇〇～九〇〇人来ている。ウミガメに関する関心が高くなっているという。

旧佐土原町におけるウミガメ保護の経緯については、旧佐土原町発行の冊子に紹介されているため、簡単に紹介しておく。小豆野次則氏は昭和五一年（一九七六）五月に、石崎浜で民謡の練習をしていたとき、ウゥーウゥーと低い声を出す巨大な黒い生き物に出会ったが、驚いてその場を離れたという。ところが、海沿いに住む知人は、アカウミガメが上陸することは知っていたという。小豆野氏はウミガメのことが気になって、夏になると毎朝海岸に行ってウミガメの調査をするようになったという〔佐土原町編　一九九八、佐土原町閉町記念誌編集委員会　二〇〇五〕。

e　調査方法と上陸・産卵頭数の概要

宮崎野生動物研究会によるウミガメの上陸・産卵の確認調査は以下のような方法をとっている。毎年五月から八月までの産卵期間に、宮崎市・新富町・高鍋町ののべ約二〇キロの海岸を宮崎野生動物研究会の会員が手分けして、夜の九時から一二時まで巡回し、ウミガメの上陸・産卵を確認する。地域によっては、毎朝海岸を巡回し、砂浜に残された上陸痕跡を調べ、上陸・産卵数を確認する。

このような地道な調査の結果、宮崎市から高鍋町においては、おおよそ以下のような上陸頭数が把握されている。昭和五〇年（一九七五）から一〇年間は、年間三〇〇から五〇〇の上陸が確認され、ほぼ三年の周期で変動することが分かってきた。昭和六〇年（一九八五）から平成六年（一九九四）には、八〇〇から一二〇〇の上陸・産卵頭数がみられた。平成三年（一九九一）は、上陸頭数一二七四、産卵頭数九四三にのぼっている。平成七年（一九九五）から平成一一年（一九九九）には、三〇〇から四〇〇と減少したが、平成一二年（二〇〇〇）から平成一六年（二〇〇四）には七〇〇から一二〇〇に回復した。平成一八年（二〇〇六）から再び減少して五〇〇となったが、平成二〇年（二〇〇八）には二五〇〇という過去最高の上陸数がみられた〔竹下　二〇〇九〕。詳細については、野生動物研究会が昭和五一年度（一九七六）以降、毎年、報告している〔宮崎野生動物研究会　一九七七など〕[20]。

f　「盗掘」の実態

宮崎県において、ウミガメの調査・保護活動を開始する直前には、大半の卵が「盗掘」にあっていたという。民俗学的には、「盗掘」の具体的な内容を把握することが重要であるため、当時の新聞記事から、「盗掘」の実態を紹介しておく。

精力剤として、食用にされたり、家畜のえさにもされる。最近は県外業者の依頼で、わざわざ徹夜で掘り上げる人も多いという。（『宮崎日日新聞』昭和四四年六月二七日）

アカウミガメの卵は、精力剤や高血圧の特効薬として重宝がられるほか、中華料理や菓子の材料としても欠かせない。また、ふ化したばかりの子ガメをペットとして売る商人もいてカメたちはご難続き。卵をこっそり持ち去る者があとを絶たない。それだけならまだしも産卵に上がってきた親ガメにまたがったり、ひっくり返したり、あげくのはてには車に積み込んで持ち去る者さえいる。（『西日本新聞』昭和四六年一〇月二八日）

最近は住吉海岸から青島一帯にかけて卵の乱獲が目立っている。

産卵場所にジープを乗りつけた跡があり、卵はほとんど盗まれていた。（筆者注：竹下完氏の話）（『宮崎日日新聞』昭和四九年六月二九日）

確認した百二十の産卵箇所のうち百カ所以上で卵が取り放題となっていた。

宮崎地方では、卵を生のまま飲むと精力がつくというわさが流れ、卵を勝手に取る者が後を絶たない。（『宮崎日日新聞』昭和四九年七月一四日）

カメにいたずらをする人、産卵の時に、砂浜に車を乗り入れて騒ぐ人、卵を持ち帰る人などが、あとを断たないそうだ。（『朝日新聞』昭和四九年九月三日）

卵が持ち去られる。高級料理店などが高値で引き取るためで、（以下略）（『読売新聞』昭和四九年一一月一日）

赤江海岸には毎朝決まってジープの輪だちが残されていた。（『西日本新聞』昭和五〇年五月九日）

ふ化し「ウミガメの子」として夜店、露店で売るため、関西から業者が盗掘に来たり「強精剤になる」「オムレツにするとうまい」などと盗んだり、土産物業者が、甲らを飾りものにするため、親ガメを殺したり。観光客が、面白がって、産卵の邪魔をしたり、卵をつぶしたり。（『朝日新聞』昭和五一年四月二四日）

地元では、昔からアカウミガメの卵は、精力剤になるし、結核や高血圧の特効薬といわれ、小遣いかせぎに掘っては、農村部へ売り歩くものまでいた。いまは、ペットブームにのり、子ガメはデパートで、一匹数百円の値がついている。これを商売にする大がかりな盗掘グループまでいる。（『朝日新聞』昭和五一年五月一九日）

現場からはジープのタイヤ跡が見つかるなど二、三人組による〝計画的な盗掘〟らしい

掘り起こされた産卵場所には二、三人のくつ跡がいずれもハッキリ残されていた。竹下副園長は昨年の夏、ジープを浜辺に乗り入れ大量にカメの卵を持ち去る盗掘者を目撃している。二十一日に荒らされた産卵場所近くにはジープを乗り入れた跡があり、このタイヤ跡は昨年のものと酷似しており宮崎市内に専門の盗掘者がいるものと同研究会（筆者注：宮崎野生動物研究会）ではみている。盗まれた卵の行方だが、同研究会が追跡調査をした結果によると、姫路市など関西方面で体長十数センチのアカウミガメの子が〝宮崎産〟として一匹千円前後でペットとして売られており、一般の動物飼育家の中でも根強い人気があるという。このため、計画的に大量盗掘

したうえ、宮崎市内で人工的にふ化させ、関西方面に輸送して売り出しているとみられている。（『西日本新聞』昭和五一年五月二三日）

ふ化してまもない子ガメを乾燥させ、ニスで固めて、壁掛けにして売っている。子ガメを三匹貼り付けて、小さな貝殻などをちりばめ、一個一五〇〇円で売っている。（筆者要約）（『朝日新聞』昭和五一年六月二〇日）

同会（筆者注：宮崎野生動物研究会）の追跡調査でも盗まれた卵は関西方面で強壮剤という触れ込みで一個千円程度で売られている事実も突き止められている。（『西日本新聞』昭和五一年一〇月一六日）

これらの新聞記事から、昭和四〇年代の「盗掘」の特徴が見えてくる。宮崎では、昔からウミガメの卵は薬として重宝されており、小遣い稼ぎで売る人もいたようである。しかし、昭和四〇年代の「盗掘」は、車で乗り付け、大規模に「盗掘」し、関西方面まで販売するものが横行していたようである。食用のみならず、子ガメをペットや壁掛けにして販売することもあったことがうかがえる。

g「盗掘率」の推移

次に、調査・保護活動の展開とともに、卵の「盗掘」がどのように推移したのかについてみておきたい。

先述したように、宮崎市において、最初の本格的なウミガメの報告書は『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』である。これは、昭和五一年度の報告となっている。この報告書には、ウミガメの特徴や、上陸数・産卵数のほか、「盗掘数」・「盗掘率」なども地区別・月別に詳細に記されている。このなかから、上陸数・産卵

表1　昭和51年（1976）の上陸・産卵頭数と卵の「盗掘数」・「盗掘率」

| 月 | 子どもの国海岸 | | | | 木花海岸 | | | | 松崎海岸 | | | | 一ッ葉海岸 | | | | 山崎海岸 | | | | 住吉海岸 | | | | 明神山海岸 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 5 | 6 | 7 | 8 | 計 | 6 | 7 | 8 | 9 | 計 | 6 | 7 | 8 | 計 | 6 | 7 | 計 | 6 | 7 | 計 | 5 | 6 | 7 | 8 | 計 | 5 | 6 | 7 | 8 | 計 |
| 上陸数 | 2 | 10 | 15 | 5 | 32 | 15 | 45 | 10 | 2 | 72 | 48 | 71 | 9 | 128 | 34 | 42 | 76 | 25 | 17 | 42 | 9 | 21 | 33 | 4 | 67 | 12 | 45 | 41 | 17 | 115 |
| 産卵数 | 2 | 6 | 13 | 4 | 25 | 3 | 9 | 0 | 0 | 12 | 29 | 40 | 4 | 73 | 31 | 37 | 68 | 23 | 6 | 29 | 6 | 16 | 17 | 4 | 43 | 9 | 35 | 28 | 14 | 86 |
| 「盗掘数」 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 0 | 0 | 17 | 4 | 21 | 3 | 0 | 3 | 6 | 3 | 5 | 0 | 14 | 5 | 9 | 3 | 0 | 17 |
| 「盗掘率」 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 67 | 33 | 0 | 0 | 42 | 0 | 0 | 0 | 0 | 55 | 10 | 31 | 13 | 0 | 10 | 100 | 19 | 29 | 0 | 33 | 55 | 26 | 11 | 0 | 20 |

数・「盗掘数」・「盗掘率」のみをまとめたものが表1である。地区別にみると、「盗掘率」が高かったのは、木花海岸、住吉海岸、一ッ葉海岸、明神山海岸、山崎海岸の順番であった。ただし、一覧表に出ている「盗掘数」を見ると、一ッ葉海岸が最も多く、明神山海岸、住吉海岸、木花海岸、山崎海岸の順となる。産卵頭数が少なければ、わずかな「盗掘数」であっても「盗掘率」は高くなってしまうのである。なお、昭和五一年度全体の調査地区すべての「盗掘率」は一七・九％となっている〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕[21]。

昭和五一年（一九七六）以前の記録については、報告書が確認できないため、断片的な数字しか残されていない。昭和四九年（一九七四）の「盗掘率」は、昭和五一年度の報告書〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕、および清水薫氏・中島義人氏の文章によると〔清水・中島　一九七八〕、六八・三％となっている。

昭和四九年は、野生動物研究会がウミガメの調査を開始した年であるため、当時の新聞記事にも「盗掘率」は紹介されている。新聞記事には、地区別の「盗掘率」が紹介されている。赤江では一〇〇％、一ッ葉では七五％、住吉では九八％であったという（『西日本新聞』昭和四九年一〇月六日・昭和五〇年五月九日、『宮崎日日新聞』昭和四九年一〇月二二日・昭和五〇年六月一三日、『朝日新聞』昭和四九年一一月一二日・昭和五〇年六月一三日・昭和五一年五月一九日）。各紙において数字が同じであるため、昭和四九年の調査にもとづき、発表された数字であ

ると思われる。

しかしながら、昭和五一年度の報告書〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕、および清水薫氏・中島義人氏の文章〔清水・中島　一九七八〕の六八・三％という数字とは異なっている。この原因については、こどものくに海岸など、「盗掘率」が低かった地区の数字を含めると、全体としては「盗掘率」が下がる、ということを表しているのではないかと思われる。『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』の「まえがき」では、昭和四九年（一九七四）には、こどものくに海岸を除き、赤江地区（松崎海岸）、一ッ葉、住吉において、九〇％が「盗掘」されていたとある〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。これらの表記を総合すると、昭和四九年の「盗掘率」は、地区別でみると赤江で一〇〇％、一ッ葉で七五％、住吉で九八％であり、この三地区でみると九〇％であり、調査地全体でみると六八・三％ということになるのではないかと考えられる。

ただし、この「盗掘率」が九〇％という数字は、その後もしばしば使用されている。たとえば、宮崎市教育委員会が昭和五四年（一九七九）七月三日に作成した「県指定文化財指定申請書」には、昭和四九年（一九七四）には「産卵後の盗掘率が90％を越えて、アカウミガメの絶滅の危機にひんしていた」とある。[22] 市の天然記念物指定直後の新聞記事にも九〇％などという数字は見かける。昭和四九年、五〇年の「盗掘率」は九〇％（『宮崎日日新聞』昭和五一年一〇月一六日）、昭和五一年までの「盗掘率」は八〇％以上（『宮崎日日新聞』昭和五五年六月二〇日）であったという記事がある。「県指定文化財指定申請書」は、ウミガメ保護の緊急性・重要性を宮崎市から宮崎県に訴える文書であるため、高い「盗掘率」が表記されたと考えられる。また、当時の新聞記事はウミガメの繁殖地を市の天然記念物に指定するという内容のものである。したがって、「盗掘」の現状を市民に訴え、保護の機運を盛り上げるために、より高い「盗掘率」を記したという可能性があると思われる。

さらに、竹下完氏から教えていただいた「盗掘率」も数字が異なっている。竹下氏によると、昭和四八年（一九

七三）が八五％、昭和四九年（一九七四）が八〇％、昭和五〇年（一九七五）が五五％、昭和五一年（一九七六）が三六％、昭和五二年（一九七七）が一七・九％という。しかし、昭和五一年度の報告書や〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕、清水氏・中島氏の文章によると〔清水・中島　一九七八〕、昭和五一年（一九七六）の「盗掘率」が一七・九％であるため、竹下氏の数字は一年ずれている可能性がある。そうすると、昭和四七年（一九七二）が八五％、昭和四八年（一九七三）が八〇％、昭和四九年（一九七四）が五五％、昭和五〇年（一九七五）が三六％であったということになる。なお、竹下氏の文章でも、「活動開始当初、ウミガメの卵の盗掘率が85％ということが明らかになり」とある〔竹下　二〇〇九〕[23]。昭和四七年、ないしは、昭和四八年の「盗掘率」が八五％であった可能性がある。このほか、昭和五〇年度が約六八％という数字も残っている〔山内ほか　一九八四〕。

以上のように、昭和五〇年以前の報告書が確認できないため、昭和五〇年以前の「盗掘率」については正確なところは判断できず、さまざまな数字が記録されているのが現状である。ただし、「県指定文化財指定申請書」や当時の新聞記事で取り上げられたことがあるように、調査地全体の「盗掘率」が九〇％を越えることはなかったのではなかろうか。いずれにしても、宮崎市指定の天然記念物になったことで、昭和五一年以降の「盗掘」は大幅に減少したようである。『読売新聞』昭和五一年七月八日には、「卵の盗掘激減　保護運動の成果」というタイトルの記事が掲載されている。

昭和五二年（一九七七）以降は、野生動物研究会が作成した報告書が残されている。以下、昭和五二年から平成八年まで、野生動物研究会がまとめた報告書により、できるだけ正確で詳細な情報を提示しておく[24]。

昭和五二年度（一九七七）には、こどものくに海岸で六月に一件、一ッ葉海岸で七月に一件、山崎海岸で七月に二件、住吉海岸で六月に二件、七月に三件、明神山海岸で七月に二件であった。全体の「盗掘率」は一七・五％となっている。

昭和五三年度（一九七八）には、こどものくに海岸で七月に二件、松崎海岸で六月に二件、七月に五件、一ッ葉海岸で六月に五件、七月に二件、八月に一件、住吉海岸で六月に二件、七月に一件、明神山海岸で六月に一件、七月に三件であった。六月から八月にかけて「盗掘」がほぼ一定していることについて、報告書では「上陸初期に最高で、次第に減少していくという好奇心的な盗掘傾向がなくなってきたことを意味する」としている。全体の「盗掘率」は八％となっている。

昭和五四年度（一九七九）には、松崎海岸で六月に五件、七月に二件、一ッ葉海岸で六月に七件、七月に三件、住吉海岸で六月に四件、七月に一件、明神山海岸で六月に三件、七月に六件であった。全体の「盗掘率」は一三％となっている。

昭和五五年（一九八〇）には、運動公園海岸で六月に一件、七月に二件、松崎海岸で七月に一件、明神山海岸で六月に一件であった。全体の「盗掘率」は四％となっている。

昭和五六年（一九八一）には、こどものくに海岸で七月に一件、運動公園海岸で七月に一件、八月に一件、松崎海岸で六月に一件、七月に一件、一ッ葉海岸で六月に一件、住吉海岸で六月に一件、七月に二件、明神山海岸で六月に一件、七月に二件であった。報告書には、「ウミガメの保護運動がまだ軌道にのっていない頃には、めずらしさのためかシーズンの初期にどっと盗掘が起るという現象があったが、その傾向は全く消えている」という記述がある。全体の「盗掘率」は五・三％となっている。

昭和五七年度（一九八二）には、松崎海岸で七月に一件、一ッ葉海岸で六月に三件、七月に一一件、住吉海岸で六月に二件、七月に二件、明神山海岸で六月に一件、七月に二件であった。全体の「盗掘率」は九％となっている。地域的には一ッ葉海岸が多い。「再び釣り客による盗掘がはじまったのであろうか」という記述がある。

昭和五八年度（一九八三）には、松崎海岸で六月に一件、一ッ葉海岸で六月に一件、七月に一件、住吉海岸で六

月に三件、七月に一件であった。全体の「盗掘率」は四％となっている。

昭和五九年（一九八四）には、こどものくに海岸で七月に一件、運動公園海岸で六月に二件、七月に二件、松崎海岸で六月に一件、七月に四件、一ッ葉海岸で六月に一件、七月に二件、住吉海岸で六月に一件、明神山海岸で六月に五件、七月に四件であった。全体の「盗掘率」は六％となっている。ただし、明神山海岸が「飛びぬけて高い」のは、「定期的に海岸を回っている特定の盗掘者のせいである」とし、「調査中この人を数回みかけている」としている。

昭和六〇年度（一九八五）には、松崎海岸で六月に二件、七月に一件、明神山海岸で七月に二件であった。全体の「盗掘率」は一％となっている。さらに、佐土原以北の状況が初めて記されている。佐土原海岸で七月に二件、高鍋海岸で七月に二件であった。新富町では「盗掘」は確認されなかった。新富町の「盗掘」がなかったことについて、「新富町ではカメの保護活動の歴史が古く、うなづける結果である」としている。(25)

昭和六一年（一九八六）には、松崎海岸で六月に九件、一ッ葉海岸で六月に一件、住吉海岸で六月に一件、明神山海岸で七月に一件であった。従来調査地全体の「盗掘率」は四％となっている。佐土原海岸で七月に一件、高鍋海岸で七月に一件、八月に一件であった。

昭和六二年（一九八七）には、松崎海岸で六月に一件、七月に二件、一ッ葉海岸で六月に一件、住吉海岸で六月に一件、七月に一件、明神山海岸で七月に一件であった。従来調査地全体の「盗掘率」は二％となっている。佐土原海岸で六月に一件、七月に二件、高鍋海岸で六月に一件であった。

昭和六三年（一九八八）には、従来の調査地では一ッ葉海岸で五月に一件のみであった。ただし、孵化調査用に杭を立てた卵塊のうちいくつかは盗掘されていた。従来調査地全体の「盗掘率」は〇・三％となっている。佐土原以北では、佐土原海岸で六月に三件、七月に一件、新富海岸で五月に一件、高鍋海岸で七月に二件であった。

平成元年度（一九八九）には、盗掘は一件もなかった。

平成二年度（一九九〇）には、盗掘は全地域で三件であった。運動公園海岸で七月に一件、松崎海岸で五月に一件、佐土原海岸で六月に一件となっている。従来調査地全体の「盗掘率」は〇％となっている。

平成三年度（一九九一）には、全地域で一件であった。住吉海岸で七月に一件となっている。従来調査地全体の「盗掘率」は一％となっている。

平成四年度（一九九二）には、全地域で八件であった。運動公園海岸で七月に六件、松崎海岸で七月に一件、明神山海岸で六月に一件となっている。従来調査地全体の「盗掘率」は二％となっている。報告書では、運動公園の「盗掘」が多かったことについて、サーファーや釣り客が興味本位で掘り起こしたものであろう、としている。

平成五年度（一九九三）には、「盗掘」はまったくなかった。

平成六年度（一九九四）には、「盗掘」はまったくなかった。

平成七年度（一九九五）には、住吉海岸で五月に一件のみであった。「一昨年は八件」とあるが、平成六年報告書にも同じ言葉がみられる。おそらく、この言葉が残ったものであり、誤記と思われる。

平成八年度（一九九六）には二件となっている。しかし、「平成八年度の各調査地域に於ける月別上陸・産卵調査のまとめ」には、「盗掘数」・「盗掘率」ともに〇となっている。

平成九年度（一九九七）以降は、「盗掘」はまったく確認されていない。

以上の報告をまとめると、以下のようなことがいえる。昭和五二年から平成八年にかけては、保護活動が活発になっている時期であるために「盗掘」は盛んではない。松崎海岸、一ッ葉海岸、住吉海岸、明神山海岸などで、一時的に「盗掘」が増えている程度である。釣り客やサーファーなどが珍しさで採っている可能性が高いようである。ただし、昭和五九年（一九八四）の明神山海岸のように、特定の人が回って「盗掘」している場合もあった。

昭和五九年一二月に発表された、ウミガメの卵の成分分析の結果については、卵を購入したいと思う人や、明神山海岸の特定の「盗掘者」には効果があった可能性はある。あるいは、依然として活発な卵の「盗掘」が続いていた鹿児島県などに対する影響はあったかもしれない。しかしながら、昭和五九年の全体の「盗掘率」は六％であったため、成分分析の結果によって、宮崎市における「盗掘」が激減したとはいえないようである。

h　宮崎市・新富町の砂浜環境と上陸・産卵の概要

筆者が聞き取り調査をおこなった宮崎市の赤江地区・檍（あおき）地区・住吉地区および、新富町における砂浜の状況と上陸・産卵回数について、野生動物研究会の報告書のデータを中心に引用しておく。砂浜の状況に関する記述は、平成一五年（二〇〇三）以降の報告書にみられる。

宮崎市赤江地区の海岸は松崎海岸と呼ばれている。昭和四〇年代後半から調査がおこなわれており、昭和五〇年（一九七五）に宮崎市指定、昭和五五年（一九八〇）に宮崎県指定の天然記念物に指定されている。松崎海岸のウミガメ調査設定区域は

写真１　松崎海岸（南側）(2015 年 12 月撮影)

写真２　松崎海岸（北側）(2015 年 12 月撮影)

清武川河口左岸から空港敷地南端までの四kmである。調査区のうち、北側一kmには産卵適地の砂浜が存在する。中央部は緩傾斜護岸で、砂浜は満潮時に冠水するため、産卵しないで海に戻る「戻り回数」が多い。南側の地域にはブロック突堤と人工リーフが設置されているが、高波による砂浜の浸食が続いている。松崎海岸では、平成二〇年（二〇〇八）に、調査開始以来で最大の上陸・産卵回数を記録した。この年の上陸は二九〇回、産卵は一四五回であった。年によって上陸・産卵回数には差があるものの、一〇〇前後から二〇〇前後の上陸回数がみられる。

宮崎市の檍（あおき）地区の海岸は一ッ葉海岸と呼ばれる。昭和四〇年代後半から調査がおこなわれており、昭和五〇年（一九七五）に宮崎市指定、昭和五五年（一九八〇）に宮崎県指定の天然記念物に指定されている。調査設定区域は、宮崎サンビーチ海浜公園からシーガイアホテルの前の浜までの四kmであったが、産卵が確認されるのは海浜公園内のサンビーチ一ッ葉（人工ビーチ）から北へ約二kmの区間となっている。それより北側は、緩傾斜護岸設置地区となっており、砂浜が消滅している。産卵地内も北側は改良緩傾斜護岸、南側は自然海岸、南端は二つの人工ビーチとなっている。南側の自然砂

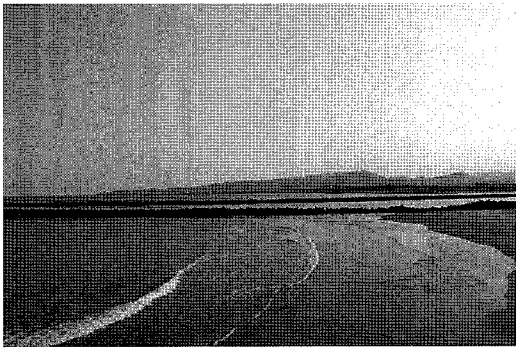


写真３　大淀川北岸より松崎海岸を望む（2016年３月撮影）

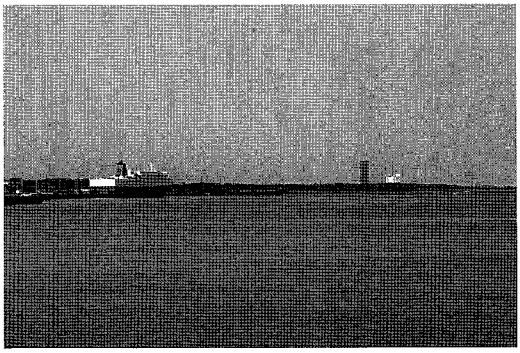


写真４　宮崎港から一ッ葉海岸を望む（2016年３月撮影）

浜地帯には沖合五〇～一〇〇m地点にテトラポッド積み上げによる離岸堤が設置されており、ウミガメは離岸堤の間をぬって上陸・産卵している。一ッ葉海岸では、平成三年（一九九一）に、調査開始以来で最大の上陸・産卵回数を記録した。上陸は一七三回、産卵は一三〇回であった。その後、平成二〇年（二〇〇八）に上陸一〇二回、産卵七九回を数えたが、それ以外の上陸回数は五〇前後となっている。

宮崎市住吉地区の海岸は住吉海岸と呼ばれている。昭和四〇年代後半から調査がおこなわれており、昭和五〇年（一九七五）に宮崎市指定、昭和五五年（一九八〇）に宮崎県指定の天然記念物に指定されている。住吉海岸のウミガメ調査設定区域はフェニックス自然動物園入口浜付近から南のシーガイア前浜までの二・六kmである。調査区

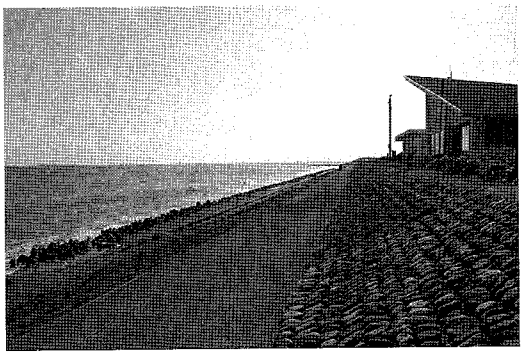


写真５　一ッ葉パーキングエリアより住吉海岸南側を望む（2015年12月撮影）

写真６　一ッ葉パーキングエリアより住吉海岸北側を望む（2015年12月撮影）

写真７　一ッ葉パーキングエリアのウミガメ説明版（2015年12月撮影）

のうち、南側は緩傾斜護岸で、一ッ葉海岸にかけて砂浜が完全に消滅しているため、ウミガメの産卵はみられなくなっている。現在、住吉海岸でウミガメの産卵がみられるのは、北側の八〇〇mの区間となっている。八〇〇mのうち北側の三〇〇mは高い浜崖が残る砂浜で、その南の五〇〇mは垂直護岸下にテトラが設置された砂浜である。住吉海岸では、平成二四年（二〇一二）に、調査開始以来で最大の上陸回数を記録した。この年の上陸は一八九回で、産卵は七五回であった。一方、産卵頭数が最も多かったのは、平成二年（一九九〇）の一一二回であった。年によって上陸・産卵回数には差があるものの、数十頭前後から百数十頭前後の上陸がみられる。

新富町の海岸は富田浜と呼ばれる。新富町教育委員会や新富町ウミガメ保存協議会によると、昭和五五年（一九

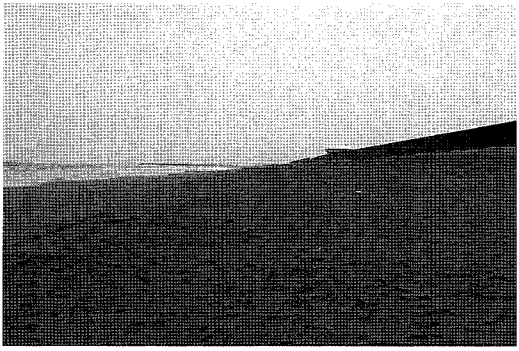


写真８　新富海岸（南側）(2015 年 12 月撮影)

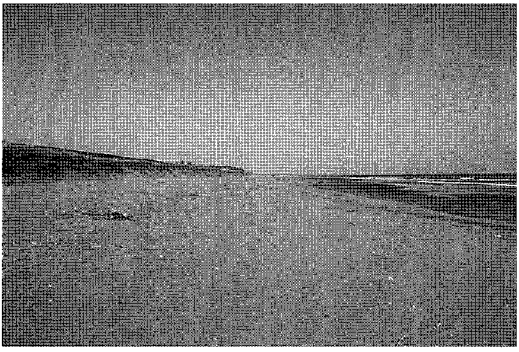


写真９　新富海岸（北側）(2015 年 12 月撮影)

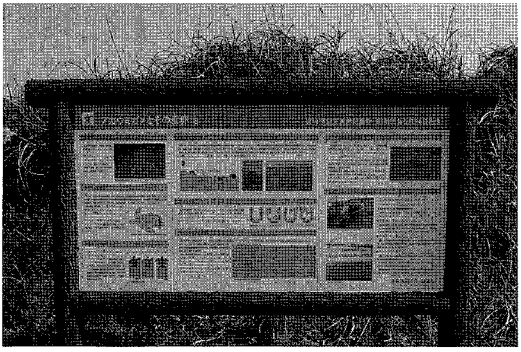


写真 10　新富海岸のウミガメ説明版（2015 年 12 月撮影）

八〇）に県指定の天然記念物指定を受けて以来、富田浜においても産卵調査が開始された。指定を受けているのは、北半分の四・三kmであり、当初は北半分のみが調査されていた。南半分は県指定を受けていないが、産卵があることが分かっていたため、平成一九年（二〇〇七）から富田浜南も調査を開始し、平成二〇年（二〇〇八）より、富田浜南でも専任の調査員が本格的に調査するようになった。調査開始以来、最大の上陸・産卵回数を記録したのは平成二四年（二〇一二）である。富田浜北では上陸が三八九回、産卵は三〇二回、富田浜南では上陸が四九三回、産卵が四〇三回であった。富田浜全体での上陸は八八二回であった。その他の年も毎年二〇〇頭前後の上陸がみられる。

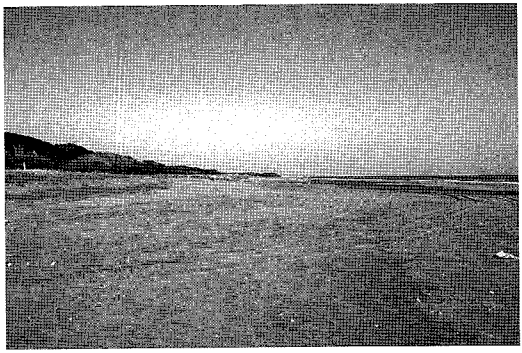


写真 11　堀之内海岸（2015 年 12 月撮影）

写真 12　堀之内海岸のウミガメ説明版（2015 年 12 月撮影）

写真 13　蚊口浦海岸（2015 年 12 月撮影）

富田浜南の調査区南側の一ツ瀬川河口左岸は、五〇～一〇〇mの幅広い安定した砂浜となっている。富田浜南の北側には富田浜入江最奥部まで一六〇〇mの防潮堤があり、三〇～五〇m幅の砂浜が続き、良好な産卵場所となっている。富田浜北は富田浜入江最奥部から北側に三五〇mの護岸がある。台風などの影響により浜崖が形成されることもあるが、北側の堀之内海岸にかけて産卵適地となっている。

## 2　大分県の状況

大分県沿岸に回遊するウミガメとしては、アカウミガメ・アオウミガメ・タイマイ・オサガメがみられる〔今井二〇一四〕。このうち、上陸・産卵するのはアカウミガメである。しかし、宮崎県のような頭数ではなく、限られた砂浜に、わずかな頭数が上陸・産卵してきたようである。アカウミガメの産卵は、佐伯市蒲江（旧蒲江町）の波当津海岸・高山海岸、大分市の大在海岸でみられ、かつては杵築市の奈多海岸でもみられたという〔大分放送大分百科事典刊行本部　一九八〇〕。このほか、佐伯市蒲江の高山海岸・波当津・深島、佐伯市の大入島でもアカウミガメの産卵がみられるという報告がある〔森山ほか　一九八五〕。また、県南部の自治体史には、ウミガメの産卵に関する記述がみられる。佐伯市米水津（旧米水津村）では芳ケ浦・間越（はざと）・間浦などでアカウミガメの産卵が古老に記憶されている〔米水津村誌編さん委員会　一九九〇〕。佐伯市蒲江では、屋形島・波当津浦・元猿の海岸に産卵が多くみられた〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕。また、ＮＰＯ法人おおいた環境保全フォーラム理事長の内田桂氏によると、元猿・高山・のうさかの海岸では、かつては一年で二〇～三〇回ぐらいの産卵があったという。[26]

上陸・産卵が多かった県南部の地域では、調査・保護活動がおこなわれてきた。旧蒲江町では、平成五年（一九九三）に産卵が確認され、海亀連絡協議会を設置、平成六年（一九九四）には波当津浦・葛原浦・屋形島・高山・

地図２　大分県関連地図

元猿の海岸に指定監視員を置いた。その後は、平成八年（一九九六）に元猿海岸で、平成一五年（二〇〇三）に波当津海岸で産卵が確認されている〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕。平成八年（一九九六）には、佐伯市蒲江のマリンカルチャーセンターが人工孵化をおこなっている。

以上のように、上陸・産卵に関する断片的な情報や報告があり、平成初期ごろから県南部では保護活動が開始されていた。しかし、体系的なウミガメ調査はまだ開始されていなかった。現在、大分県でウミガメ調査をおこなっている内田桂氏によると、大分県でウミガメ調査が本格化するのは平成一〇年（一九九八）であったという。これは、環境庁の委託を受けて、株式会社西日本科学技術研究所大分分室の工藤勝宏氏が、平成一〇年（一九九八）六月から九月にかけて、日向灘に面する旧蒲江町から豊後水道に面する津久見市までの九調査区を設定して実施したものであった。[27]

九地区とは、日向灘に面する旧蒲江町（現、佐伯市）の波当津海岸・葛原海岸・高山海岸・元猿海岸・のうさかの浜、旧米水津村（現、佐伯市）の間越海岸、豊後水道に面する旧上浦町（現、佐伯市）の浦戸海岸・大浜海岸、津久見市の高浜海岸である。これらの海岸は二五〇m～一一〇〇mの範囲であり、一kmを越えているのは、高山海岸（一一〇〇m）と間越海岸（一一〇〇m）の二か所だけである。このように、日向灘北部から豊後水道の沿岸はリアス式海岸を形成しているため、小規模な砂浜が点在している。したがって、地形的にみても、大分県では宮崎県のように多くのウミガメが上陸・産卵することはない。工藤氏が最初に調査をおこなった平成一〇年は、上陸、および漂着死体を確認できなかったが、内田氏によると、工藤氏はその後も

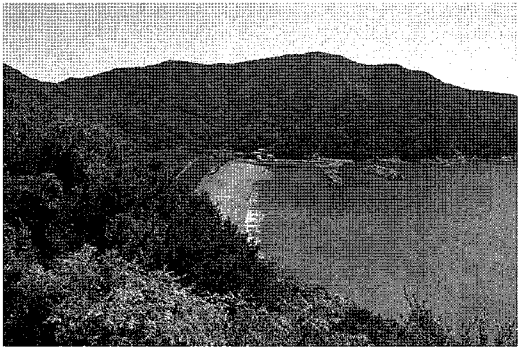


写真14　間越の海岸（2015年8月撮影）

平成一七年（二〇〇五）ごろまでウミガメの調査をおこなっている。

「海棲動物調査（ウミガメ生息調査）平成一〇年度（一九九八）大分県」には、昭和六三年（一九八八）から平成九年（一九九七）における旧蒲江町の定置網に入ったウミガメの数も示されている。それによると、アカウミガメが五八～二一七頭、アオウミガメが八～一一八頭となっている。報告書では、日向灘北部から豊後水道南部にかけての沿岸域は、アオウミガメおよびアカウミガメの索餌回遊域の一部である可能性が高いと指摘している。大分県の水族館である「うみたまご」でも、ウミガメの混獲情報を持っているが、県南部の佐伯市方面での混獲が多いようである。

その後、平成二一年（二〇〇九）より、ＮＰＯ法人おおいた環境保全フォーラムがウミガメ調査を開始した。ＮＰＯは産卵調査だけではなく混獲調査、漂着調査も実施するようになった。ＮＰＯの内田氏によると、ウミガメ調査を始めたきっかけは、産卵海岸の激減と産卵数減少を評価するための系統的な調査の必要性を感じたためであるという。[28] ただし、県内全域の海岸を対象としていることからＮＰＯ単独での調査は不可能といい、県内各地域の自治体や自治会（住民）、市民団体と調査協力のネットワークを組み円滑で効果的な調査体制を構築している。とくに産卵情報や漂着情報は、一刻を争う場合が多々あり迅速な対応が求められるため、ネットワーク形成が欠かせないという。ＮＰＯでは、ウミガメ調査を開始して一年ほどをかけ、大分うみがめネットワークを形成し、実地調査と聞き取り調査を進めつつ、大分県内の産卵情報、ストランディング情報を集め、ウミガメ情報の集積を図っている。

ＮＰＯでは、佐伯市米水津浦代浦の間越海岸で「はざこネイチャーセンター」を運営している。[29] ＮＰＯの内田氏が四、五年前から、間越海岸にウミガメの産卵調査に入り、平成二六年（二〇一四）から展示施設を作った。地元の定置網に入ったアオウミガメなどを水槽で飼っており、タグをつけてから、地元の色宮小学校の生徒とともに放

流している。また、屋久島うみがめ館から届けられるウミガメの卵を人工孵化させている。このほか、ネイチャーセンターでは、ウミガメの研究・保護のみならず、定置網見学などの漁村体験、ダイビングなどの自然体験などもおこなっている。

以上のように、大分県のウミガメ調査や保護活動は、宮崎県に比べると新しく、情報量もまだ多くはない。しかし、宮崎県に接する県南部では、アカウミガメが上陸・産卵が多く、アカウミガメ・アオウミガメの回遊も頻繁におこなわれている様子が分かってきている。

二　ウミガメに関する民俗知識

1　宮崎県の事例

a　文献にみられる民俗知識

先述のように、宮崎県では古くからアカウミガメが産卵することが知られていたというが、沿岸部に居住する人々はウミガメに対してどの程度の知識を持っていたのであろうか。民俗学や生物学・保護関連の文献には、ウミガメの保護開始以前に人々が有していた民俗知識についての記述はほとんどみられない。ただし、宮崎県のウミガメについて述べた文章の中に、地域の人々が持っていたウミガメに対する知識をうかがい知ることのできるものがある。のちに、延岡市の小学校・中学校・高校において生物学の教員をした根岸幹雄氏は、大正一四年（一九二五）八月、中学五年生の夏休みに、延岡市の長浜海岸においてウミガメの産卵を見ている〔根岸　一九七九〕。近所の友だちと午前三時ごろから出かけ、日の出を見ようと砂浜で待っていたとき、ウミガメが産卵のために上陸し

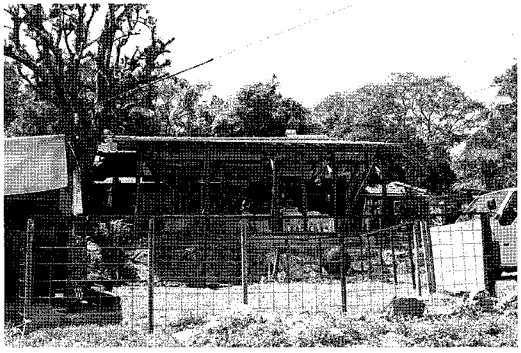


写真15　はざこネイチャーセンター（2015年8月撮影）

てきた。産卵後、根岸らはウミガメを捕えて、海の中へ送ってやったという。根岸氏は、昭和五年（一九三〇）に宮崎師範学校に入学して以来、中島茂氏からも教えを受けたという。ただし、大正一四年のできごとは、ウミガメに関する教えを受ける以前のことであり、延岡における沿岸部の人々のウミガメとの出合い方があらわれているといえよう。夏の早朝、砂浜で遊んでいるときに、ウミガメが産卵に上がってくることがあり、ウミガメが産卵するという事実を認識している、ということが分かる。[30]

石井正敏氏は、都井岬の漁師から聞いたという次のような話を紹介している〔石井　一九八四〕。昭和二六（一九五一）年ごろ、大きなカメが上陸し、「たたみ三畳もあるようなカメで、たしかにおしりに毛がはえていた」、「そのカメは、二～三日して、大きなしけにあい、死んでうちあげられたが、あんなに大きなカメは見たことがない」、「浦島太郎はあんなカメにのって、竜宮城へ行ったにちがいない」などと、四～五人の漁師で語っていたという。当時、撮影されたウミガメの写真が残されており、石井氏は著書にその写真を掲載している。これを見ると、漁師たちが騒いだ大きなカメとはオサガメのことであったことが分かる。これは、オサガメという珍しいウミガメに対する驚きをともなった反応であり、珍しいカメとの出会いが人々の記憶に残ったものと思われる。

文献では、ウミガメに関する民俗知識は、これ以上見つけることができなかった。以下、筆者の聞き取り調査から把握できた各地の民俗知識を紹介する。

b　宮崎市の事例

宮崎市の赤江地区の海岸はアカウミガメの産卵が多くみられた地域である。この地域は、昭和一八年（一九四三）に宮崎市に合併するまでは赤江町であった。したがって、赤江地区と呼んでおく。聞き取り調査をおこなった田吉は赤江町の大字であった。田吉の海岸に、南から蠣原・松崎・浜畑という集落がある。

地図３　宮崎市海岸部（５万分の１地形図「宮崎」、国土地理院、平成13年（2001）測量）に加筆

田吉（松崎）出身の前田博仁氏（昭和一七年生まれ）は以下のように語る。

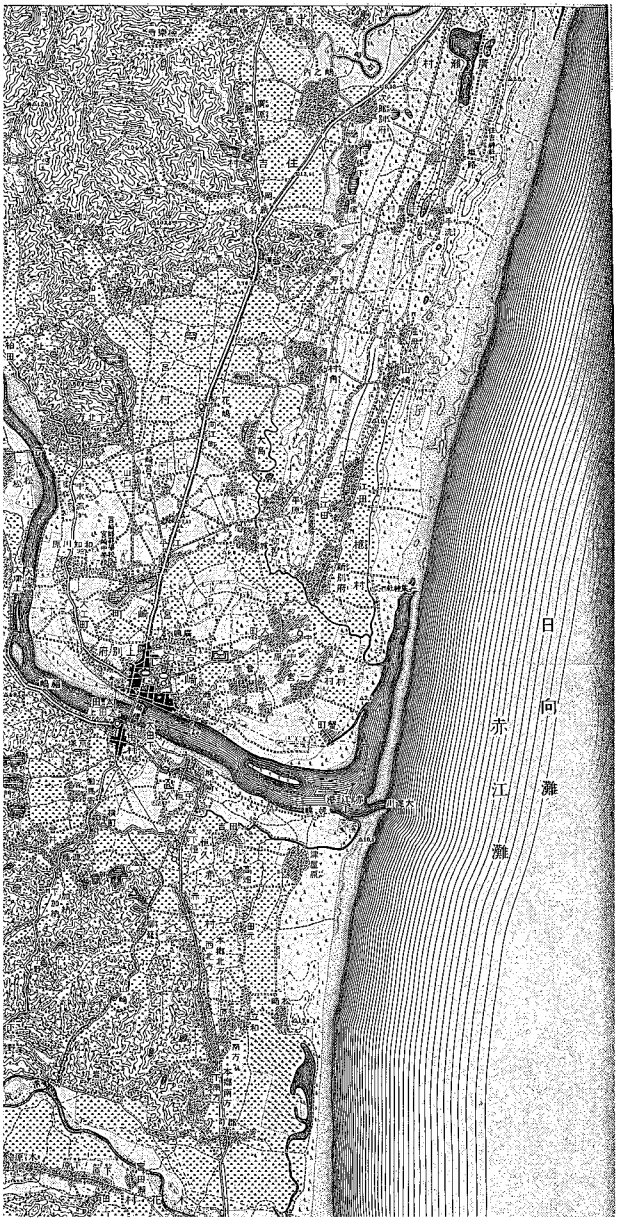
カメが上陸したのはすぐに分かる。上の方に産んでいる。あんまり関心を示さなかった。

田吉（浜畑）出身の八八歳の男性も、カメは砂浜を掘って卵を産むのは知っている。しかし、あまり関心はなかったという。

大淀川北側に伸びる一ッ葉海岸も、赤江とともにアカウミガメの産卵が多くみられた地域である。この地域は、昭和七年（一九三二）に宮崎市に合併するまで檍（あおき）村と呼ばれた。檍村の大字は吉村・新別府・江田・山崎であった。このうち、江田は昭和八年（一九三三）に阿波岐原（あわきがはら）町に改名している。また、大淀川河口部には大字吉村の中に蟹町という字があったが、現在では蟹町は小戸町となっている。なお、現在でも、宮崎市の行政組織においては旧檍村付近を檍地区と呼ぶことがある。したがって、本稿では旧檍村の範囲のことを檍地区と呼んでおく。

小戸町の黒木健史氏（昭和一八年生まれ）・小戸町の日高章氏（昭和一九年生まれ）・吉村町の児玉輝夫氏（昭和二三年生まれ）・新別府町の金丸文章氏（昭和一六年生まれ）・新別府町の金丸正広氏（昭和二二年生まれ）・阿波岐原町の菊池喜継氏（昭和一三年生まれ）に海岸の変遷について話をうかがったところ、ウミガメの話が出てきた。[31]

カメは砂浜一帯に上がった。数が多かった。砂丘が一〇メートルぐらいの高さがあった。それを越して行った。カメが上陸してものすごかった。卵を採っても個体数は減らんかった。カメが上がると、戦車みたいな足跡がついている。黒木氏は中学生のころ、カメ乗りに行こや、と遊びに行った。カメは鳴く。かわいそーと思っ




地図４　明治時代の宮崎市海岸部（５万分の１地形図「宮崎」、大日本帝国陸地測量部、明治35年（1902）測量）

た。乗って遊んだ。カメと遊んだ。黒木氏は産むところを見た。何匹も上がる。観察した。卵を採るためではなかった。後ろ足で砂を掘る。けっこう深い。一〇〇個ぐらい産む。ピンポン玉みたい。今はほとんど上がらない。砂浜がなくなった。年に一回か二回ぐらい上がっている。昔は砂浜一帯に上がった。港ができてだめになった。

小戸町・吉村町・新別府町・阿波岐原町ともに、一ッ葉海岸近くに立地する集落である。小戸町は大淀川河口に位置し、吉村町はその後背地になる。新別府川をはさんで北側には新別府町、さらにその北側の砂丘に阿波岐原町が位置している。檍地区の広い範囲の方々に話をうかがったため、ウミガメに関する知識には差異が認められた。このうち、もっともウミガメの産卵を見たり、ウミガメと遊んだという黒木氏は、小戸町に暮らしてきた方である。小戸町の海岸には宮崎港がある。宮崎港が改修されるまでは、一ッ葉入り江が北側に長く伸びていた。小戸町からは川のような入り江を渡って、砂浜に行っていたという。

市街地出身の方にも話をうかがった。大西敏夫氏（昭和三一年生まれ）は、宮崎市江平に住んでいた方である。江平は明治時代には宮崎町、大正一三年（一九二四）から宮崎市になっている。大西氏は、昭和四二年（一九六七）ごろ、勉強を習っていた宮崎大学の学生に連れられて、松崎海岸よりも南に位置する木花の海岸辺りにウミガメの産卵の見学に行ったことがあるという。この学生は木花の比較的近くに住んでいたという。このときは、産卵は見られなかったというが、野生動物研究会の調査・保護活動が始まる以前に、市内の人々がウミガメに出会う機会として捉えることができる。宮崎市内の江平付近からは一ッ葉海岸まで約三・五kmある。ウミガメは日常生活の中で出会うことはない。海岸近くの知り合いに誘われて、ウミガメの産卵を見に行く、ということがあったことが分かる。

檍地区の北に隣接する住吉地区（旧住吉村、昭和三二年（一九五七）に宮崎市に合併）の方にも話をうかがった。海岸から約二・五km内陸の島之内に住んでいた斉田健氏（昭和三年生まれ）は以下のように語る。[32]

カメのことはカメという。川のカメは意識になかった。カメといえばウミガメのことをいった。カメは大きいものと思っていた。たまに、川のカメを見たことがある。

卵を産むのは五月末から七月ぐらい。卵を産みに上がる時期を何かに結び付けて語ることはない。（カメが卵を産むのは見たことがあるかという問いに対して）見たような気がするが、はっきりしない。カメに触ったことはある。地曳網に入ってくる。触ったり、裏返しにしたりした。長さは一メートルぐらいある。みんなと一緒に見た。

産卵場所で波の高さなどをいうことはなかった。産卵場所は今よりも海に近かったと思う。当時は砂丘がたくさんあった。一番目の砂丘の盛り上がりのとこぐらいに産んでいたと思う。今は、カメも少なくなったと思う。

斉田氏は四章で述べるように、父親が地曳網に参加したり、カメの卵を採取していた。海岸近くの塩路に友達がおり、浜に遊びに行くことがあったという。また、父親に連れられてカメの卵を採りに行ったこともある。二・五kmほど内陸の集落であっても、浜へ行く機会がある人は、ウミガメに関する知識も有していたことが分かる。

c　新富町の事例

新富町の砂浜にはアカウミガメの産卵が多くみられる。海岸近くの日置（日之出）に暮らしてきた梶原憲明氏（昭和二二年生まれ）は以下のように語る。

地図５　新富町・高鍋町海岸部（５万分の１地形図「妻」・「高鍋」、国土地理院、平成４年（1992）測量）

ウミガメのことはカメといっていた。大きくなってからアカウミガメというようになった。何回か卵を産むところを見た。産みだしたらライトをつけても逃げない。子どもを連れて行って見た。懐中電灯をつけて見た。一回、このカメはアオじゃ、というのは聞いた。カメは昔の方が多かったと思う。今、けっこう上がっちょるというけど。卵を産むとき、砂をきれいに丸く掘る。珍しいから見たことある。二〇歳前ぐらいか。そのころ、懐中電灯があったので、懐中電灯で見た。きれいに掘っていた。砂浜は今よりも長かった。浜で野球ができよった。

五〇年も前、六月ごろ、海でグチ釣りをしていた。仕事があるので、夕方から釣りをしていた。投げ釣りが多かった。ガスを焚いて、カーバイトで釣りをしていた。一〇メートル、二〇メートルの間隔で釣りをしていた。釣りをしている人の間をカメが上がった。カメは満潮にかけて上がってきた。八時、九時に満潮があると、七時ごろから上がった。満潮が二時、三時ごろだと遅くに上がった。海が荒れたときはきよらんかった。八月半ばごろまで上がった。遅くまではなかった。

海から離れたところに産むと、海が荒れるといった。大きい台風が来るといった。

日置（野中）の出口弘敏氏（昭和九年生まれ）は以下のように語る。

ただ、カメといった。オカのカメは知らない。スッポンはスッポン。

朝、海岸に行くとカメが卵を産みに上がっていた。けっこう上がりよった。砂地だから。カメの数は昔と同じぐらいか。地曳にかかることはない。地曳にカメが上がったのは一回も見たことがない。魚捕りに行きよったとき、カメが上がってきた。懐中電灯を当てると、卵を産まずに沖に帰った。カメは昼に上がるのはなかったと思う。夜によう見よった。

卵は一つに一〇〇個ぐらい産んでいる。ハネできれいに掘る。カメが上がったのはすぐに分かる。形がついていると、カメが上がってると分かる。まっすぐ下には産卵してない。卵は横にあった。卵を産むときには涙を流す。見たことある。遊びに行って見た。ひっくり返して遊んだらもとに戻した。

陸のほうに長く行ったときは台風が来るといった。台風が来るから上の方に産むといった。カメが上の方に上がってるから、今年は台風が来るといった。

同じ日置地区の中でも、野中は日之出よりも砂丘と松林を越えて内陸に位置する。その分、ウミガメに関する知識はわずかに減少するようである。梶原氏は昔の方がカメは多かったと思う、というが、出口氏によると、カメの数は昔と変わらない、という。宮崎市の海岸に比べて、浸食が少なく、現在も幅広い砂浜が残っている。したがって、正確な上陸・産卵頭数は減少しているかもしれないが、ウミガメの数の変化はないという認識も生まれているようである。

また、新富町ウミガメ保存協議会会長の根井武俊氏によると、カメはどこに産んでいたか、と地域の人から聞かれるという。人々が、カメの産卵の場所で台風などの判断をしようという意識が今でも続いていることを示している。

d　高鍋町の事例

高鍋町蚊口浦出身の大木隆幸氏（昭和一九年生まれ）は以下のように語る。

カメは高鍋も上がる。新富ほどは上がらん。堀之内のほうに上がる。新富はどこでも上がる。高鍋は堀之内が

ほとんど。蚊口は砂利。堀之内は砂。新富は砂。子どものころは産卵を見たことはない。新富で住むようになってから、散歩していると、卵を産むところに遭遇することがある。

高鍋町でも、小丸川河口の蚊口浦は砂利のため産卵が少なく、砂浜がある南高鍋の堀之内に産卵があるという。したがって、蚊口浦のほうの方は、ウミガメの産卵は知っているが、見る機会は少なかったようである。

2　大分県の事例

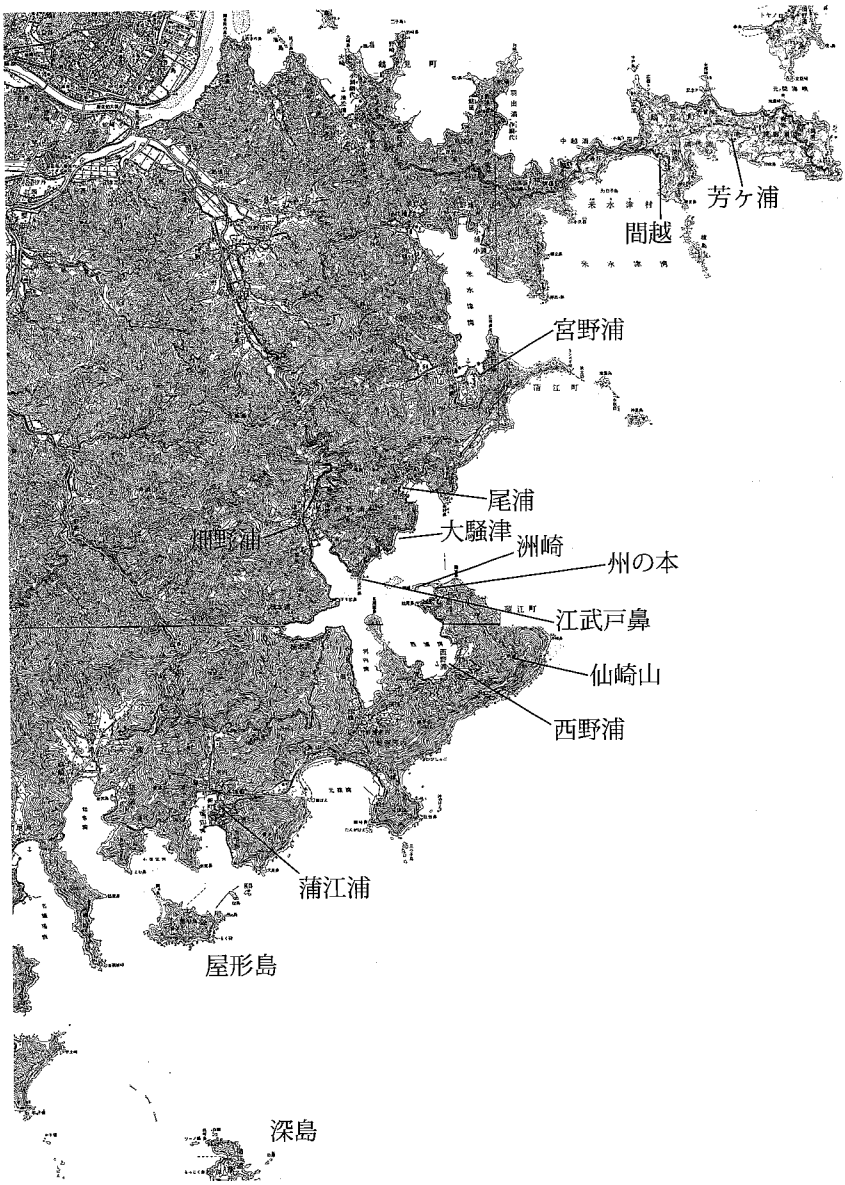
a　佐伯市の事例

旧蒲江町では、屋形島・波当津浦・元猿の海岸に産卵が多くみられ〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕、旧米水津村では芳ヶ浦・間越・間浦などでアカウミガメの産卵が古老に記憶されていたという報告があるものの〔米水津村誌編さん委員会　一九九〇〕、具体的に地元の方々がウミガメに関するどのような民俗知識を有していたのかということは分からない。

そこで、筆者の調査では、大分県南部の旧蒲江町・旧米水津村、および中部の臼杵市・日出町において、ウミガメの民俗知識について聞き取りをおこなった。

佐伯市蒲江西野浦の久寿米木大作氏（昭和一二年生まれ）は以下のように語る。

ウミガメのことはカメという。西野浦の仙崎に砂浜があった。小浜という。仙崎のこっち側。相当砂があった。いい砂があった。子どものころ遠足に行った。ここにカメが産卵していた。戦後、コンクリを作るのに砂をごっそり取った。今は砂がなくなった。今は産卵がない。今は人が行かん。テングサ採りに行ったときだけでな




地図6　佐伯市南部の海岸部（5万分の1地形図「蒲江」・「佐伯」・「鶴見崎」、「蒲江」・「佐伯」は平成14年（2002）測量、「鶴見崎」は平成13年（2001）測量）

く、自分は山で間伐をするときにもここに降りた。産卵場所は素人が行っても分からん。足跡があるからこの上じゃろうというぐらい。ここの周りに産卵しとるというぐらい分かる。産卵したところは足跡もない。産むのを見たこともない。浜へ行ったときに足跡を見るぐらい。海水のいかんところに上がっている。潜っていて会ったことはない。泳いでいるのは見た。缶詰の缶が浮いてるみたい。カメは頭を出している。甲羅を出して泳いでいることはない。

西野浦は、旧蒲江町北部の入津湾内の西野浦湾内に位置する集落である。漁業と農業に好適な立地条件を持ち、早くから開かれた集落と思われる。旧蒲江町では、蒲江浦を除くと、畑野浦とともに人口が多い集落で、昭和四〇年（一九六五）には五〇一戸、二一四三人であった〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕。

西野浦湾は入津湾口に近く、湾口には仙崎山がある。仙崎山の麓の湾口は洲の本と呼ばれている。湾口対岸の江武戸鼻に向かって、長さ約五〇〇m、幅二〇～三〇mの砂州が伸びている。久寿米木氏が語る砂浜は、この砂州周辺のことと思われる。集落から離れた、湾口に位置する洲の本などの砂浜にウミガメが産卵していたということになる。西野浦の人がこの砂浜に行く機会は限られていたが、久寿米木氏はテングサ採り、および山仕事の際にここに立ち寄ることがあった。こうしたカメに対する民俗知識は、多くの西野浦の人たちが有するものではなく、しばしば砂浜に行く機会があった人だけが有する知識であったと思われる。久寿米木氏は潜水漁に従事していた方であ

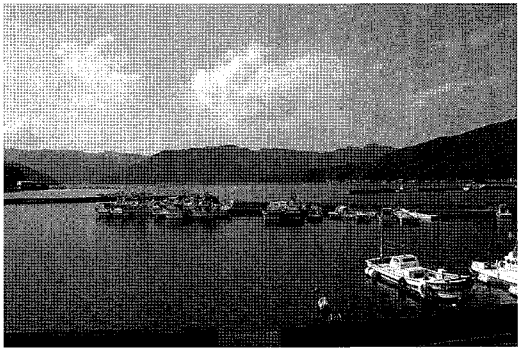


写真16　西野浦の集落と港（2015年8月撮影）

るが、海中ではウミガメに出会ったことはないという。

入津湾内の西奥には畑野浦という集落がある。畑野浦も古くから開かれた集落と思われる。旧蒲江町では大字蒲江浦を除くと、西野浦戸ともに人口が多い地区で、昭和四〇年（一九六五）には四〇八戸、一八六七人であった（蒲江町史編さん委員会　二〇〇五）。

佐伯市蒲江畑野浦の冨高晃氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

ウミガメのことはカメという。キンチャク網にときどきかかる。夏だった。夏から秋。卵を産んで帰るときにかかるのか、近所にいるのか、分からない。

二四、五年ぐらい前、漁協に筏をしていた。友達が佐伯から来ていて、アジを釣りよった。友達がそこにカメがおるというので見に行った。ふーっと息をしたので、その人はたまがった。ここまで入ってきていた。その後はここでは見らん。鼻（筆者注：江部戸鼻）まではときどき来ている。

大騒津には砂がかなりある。今でも上がっているか。三〇年ぐらい前までは上がったのは見た。砂を採るころ、カメの足跡があるのを見た。大騒津は尾浦のほうが近い。尾浦から歩いて一五分ぐらい。畑野浦からは歩いて四〇分ぐらいかかる。今は大騒津に行かない。

洲の本の対岸にあたる江武戸鼻まではカメがときどき来るというが、入津湾内の畑野浦湾の奥に位置する畑野浦の港までカメがやってくるのはめったにないようである。カメが産卵する大騒津というのは、畑野浦から尾浦へ行く途中の砂浜である。

尾浦は、住所表示としては佐伯市畑野浦に属するが、地理的にも歴史的にも独自性が強い。江戸時代に開発され

たが、旧蒲江町の中で最北端に位置し、近年まで陸上交通が不便であり、離島のような集落であった。昭和四〇年（一九六五）には一〇七戸、五六八人であった〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕。尾浦の山田朝子氏（昭和二七年生まれ）は以下のように語る。

カメは大騒津に上がっていると思う。カメは子を産むとき涙を流す。大騒津でカメが涙を流すのを見たことがある。カメが上がったのを見た。卵も見た。砂がいっぱいあった。今は浸食されてごろごろ石になっている。すごいきれいな長い砂浜だった。大騒津には小学校の遠足で行った。テントを張ってキャンプをした。砂の中に物を埋めて、宝探しをした。そういうときにカメを見た。小学校五、六年のころだった。谷があったので、水があった。飯盒を炊いた。

真浦の人が金色のカメを捕って剥製にしたという。見たかったが、自分は見ていない。金色のカメというのはベッコウか。珍しい。マリンパレス（現、うみたまご）が取りに来たという。マリンパレスは蒲江の森崎にいけすを持っていた。珍しいものが捕れるとそこに

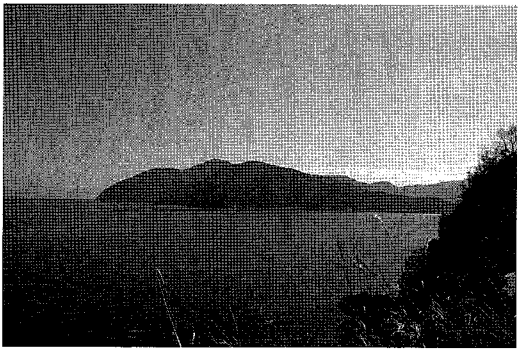


写真 17　大騒津付近から仙崎を望む（2015 年 11 月撮影）

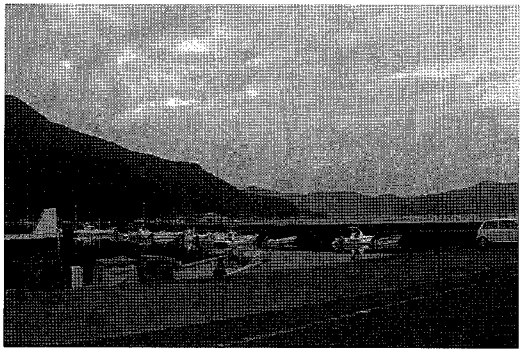


写真 18　畑野浦の集落と港（2015 年 11 月撮影）

集めておくと、マリンパレスが取りに来た。

平成九年（一九九七）に尾浦トンネルが開通したことにより、尾浦から畑野浦および佐伯市の市街地へは容易に車で走ることができるが、それまでは海岸沿いの細い道を畑野浦まで車が通っていた。この道の途中に大騒津がある。現在は、大騒津を経由する道は、山手の崖が崩落しているため、車の通行はできなくなっている。なお、尾浦の中心部はカマス網代と真浦に分かれており、山田氏の家はカマス網代になる。カマス網代から大騒津までは歩いて一五分程度である。山田氏のころは、尾浦に小学校があった。尾浦の小学校の遠足として大騒津へ行ったということになる。山田氏の息子の時期には、大騒津には畑野浦の学校に行く途中に通る程度であった。金色のカメとは、タイマイのことと思われる。特にきれいで珍しいカメが捕れたということで、集落の中で話題になったのであろう。

尾浦の鳴海吉三郎氏（昭和三年生まれ）は以下のように語る。

キンチャクに入ったことはない。私たちは小型底曳をやってきた。底曳にはカメがときどき入った。死ん

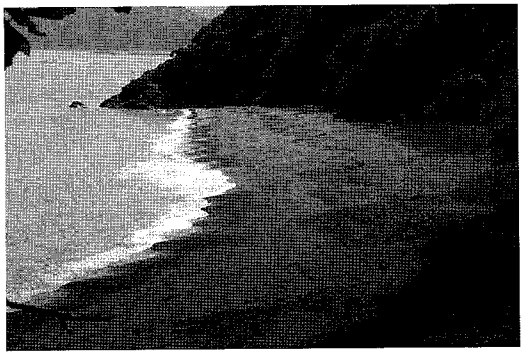


写真 19　大騒津の浜（2015 年 11 月撮影）

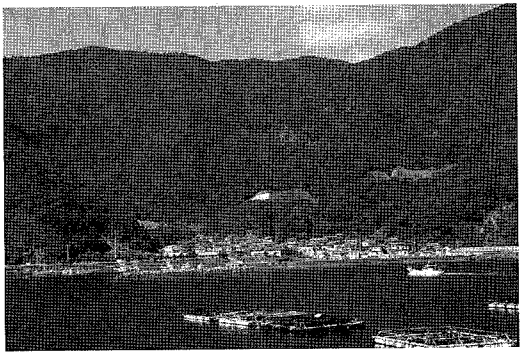


写真 20　尾浦の集落と港（2015 年 11 月撮影）

でいるカメは見たことがない。カメの墓は聞いたことがない。カメが泳いでいるのはめったに見ない。

鳴海氏は尾浦の真浦の出身である。四章で述べるが、大騒津にカメが上がることは、鳴海氏も知っていた。漁業をしていた方なので、産卵のみならず、網に入るカメについても知識があった。

旧蒲江町の聞き取り調査は、北部の入津湾周辺でおこなったため、ウミガメの産卵する砂浜は集落から離れたところに位置している場合が多かった。それでも、ウミガメの産卵に関する知識をある程度有している人は多い。ただし、海上や海中のウミガメについては、漁民の中でも、従事する漁法などによって知識は異なっている。

旧蒲江町の北に隣接する旧米水津村でも聞き取りをおこなった。米水津宮野浦の濱田平士氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

間越の砂浜にはカメがものすごい来る。小学校のころ、七、八〇年前、濱田さんの家の網が間越にあった。当時は湾にカツオが入った。マガツオではなく、ソーダガツオ。出汁専門のカツオ。夏休みのころ、間越で網を曳くときに乗って行った。一〇人ぐらいで行った。当時は米の飯の弁当が楽しみだった。朝早く行くと、夜が明けたときに、カメが上がっちょった。穴を掘って、尻をすえて、卵をぽんぽんと落としよったのを見た。産み終わると、自分で砂をかぶせて、ならして、あとずさりして水のほうに逃げた。うまいことする。いたずらはしなかった。カメは今でも定置には入ると思う。

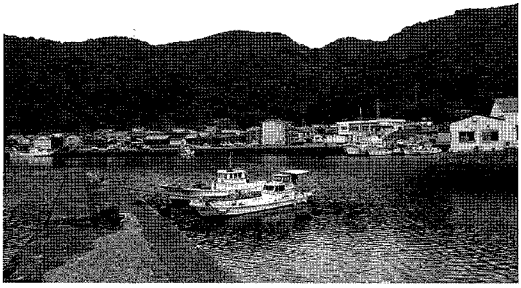


写真 21　宮野浦の集落と港（2015 年 8 月撮影）

宮野浦は米水津湾の南側、最も湾口に近い集落である。江戸時代から漁業が盛んで、網元も多く、現在も水産加工業従事する家が多い。濱田氏の家も網元であった。昭和六〇年（一九八五）には一七六戸、六三五人であり、同年の統計によると戸数・人口ともに、浦代浦・色利浦についで、米水津村で三番目に多かった〔米水津村誌編さん委員会　一九九〇〕。集落の近くに砂浜はないが、米水津湾口の間浦に砂浜があるという。間浦もいい漁場であるというが、濱田氏の語りからは間浦のウミガメのことは出てこなかった。

濱田氏がウミガメに出会った間越（はざこ）というのは鶴見半島の南側に位置する集落である。宮野浦からは米水津湾をはさんで対岸になる。米水津湾奥に位置する浦代浦という集落の飛び地になる。先述したように、間越には一一〇〇mの砂浜があり、現在、ウミガメの保護活動の拠点がある。浦代浦（間越）の成松多哲氏（昭和一〇年生まれ）にも話をうかがった。

ウミガメがよう産卵に上がりよった。一年で一〇何頭も上がったと思う。今年はずっと上の方に産卵するから大波がつくぞ、と昔の人は言っていた。産卵が下の場合は、波があんまりつかんじゃろう、といった。梅雨時期に来る。五月終わりから六月いっぱい。カメは畑までは上がらなかった。

集落の前はずっと砂浜だった。全体が砂浜だった。広かった。二〇歳前後のころ野球もした。ここの砂浜は砂がいっぱいあった。今は小石になっている。そんなんじゃなかった。きれいな砂浜だった。砂の粒子が粗い。足についてもはらい落とすだけで、洗わんでもいいような砂だった。砂は動く。コチナミ（東からの風の波）、ジマジ（南西の風の波）によって、浜の形が変わりよった。昔の浜の様子を知っているのは自分ぐらいしかないだろう。ここから浜が見えた。今の家は畑だった。畑の下まで波が上がった。

浜の真ん中に大松があった。今、休憩所になっているあたりにあった。こうもり傘みたいになっていた。泳い

でからそこまで行くのが熱くかった。前はなだらかで長かった。今は傾斜がある。

子どもたちは昭和四〇年代前半の生まれ。子どもたちが小学校低学年のころ、朝、夜が明けたばっかりのとき、産卵を終えて海へ出ていくカメがまだ浜におるとき、子どもたちを起こして、カメの背中に乗せたことがある。

その後、大きな台風で砂が引き出されたので、テトラを置いた。昭和四〇年代までは砂浜だった。カメが上がっても産卵できないので引き返した。そのあと、離岸堤ができた。それで上がらんようになった。浜が狭くなった。テトラを置いたのは、今から考えるとようなかった。カメは三、四〇年ぐらいで戻ってくるという。四、五年前、四頭産卵した。昭和四〇年代にここで生まれた子ガメたちが帰ってきたと思う。そのときからカメで有名になった。その後は上がらん。四、五年前までは、上がっても産卵場所がないので引き返した。テトラまで上がって産卵できんで戻ったのを何回も見た。いろんな工作物をしたからじゃろうな。工作物をすると自然は壊れる。米水津でも水泳ができるのは今ではここだけ。生活はようなったけど、自然は壊された。

写真22　宮野浦背後の山から鶴見半島を望む（2015年8月撮影）

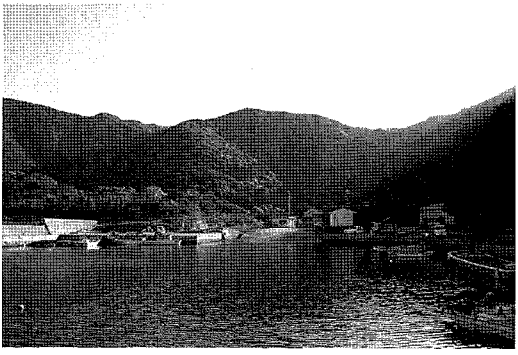


写真23　間越の港（2015年8月撮影）

間越には、東西に伸びる一一〇〇mの砂浜がある。砂浜を取り囲むように、家々が点在していた。昭和二〇年代には三〇数軒の家があったが、現在は一三軒になっている。成松氏の家は、浜の東の端に位置している。浜が目の前になるため、成松氏は浜のことをよく観察しており、浜の景観やウミガメがどのように変化してきたのか、ということをよく知っている。産卵時期についての知識もある。また、産卵場所で波の高さを知る、という民俗知識もみられた。

b 臼杵市・日出町の事例

さらに北に位置する臼杵市などでもウミガメに関する民俗知識について聞き取りをしたが、産卵が限られるため、具体的な語りはあまりなかった。臼杵市におけるウミガメの供養塔をまとめた斉藤行雄氏によると、半島の先の方では何か所か産卵する場所があるという。ただし、年に一回あるかどうかという程度という。臼杵市中津浦の板井覚氏（昭和一一年生まれ）は、七章で述べるようにウミガメの供養塔を建てた方である。板井氏は以下のように語る。

砂浜がないので、カメが子を産みに上がることはない。バラスばっかり。

板井氏はウミガメに対して供養している方であるが、産卵についての知識はなかった。

日出町の阿部大蔵氏（昭和一〇年生まれ）は、七章で述べるようにウミガメの供養を提案した方である。阿部氏は以下のように語る。

カメには何回も出会っている。首を出してる。カメおらー（カメがおる）、ということはある。自分にかかわりがあったのは二回。針をはずしてやったときと、この前埋めたとき。

一章で述べたように、別府湾周辺でも産卵はみられる。しかし、数が限られているため、出会うことはほとんどないようである。別府湾内でも漁の最中にウミガメに出会うことはめったにないということのようである。

## 三　神話・伝説

記紀神話には、日向（宮崎県）を舞台にした場面においてカメが登場する。『日本書紀』巻第二　神代下第一〇段の一書（第三）に、「豊玉姫、自らに大亀に馭りて、女弟玉依姫を将ゐて、海を光して来到る。」と出ている〔坂本ほか　一九九四〕。これは、海幸・山幸の神話の一部である。海神の宮で彦火火出見尊（山幸）の妻となった豊玉姫が、子を出産するために浜辺にやってくる場面である。彦火火出見尊が一足先に海辺に到着し、鵜の羽で産屋を作っていたが、屋根を葺き終わらないうちに豊玉姫がやってきて出産した。豊玉姫がカメに乗ってきたという内容は一書のみの記載ではあるが、この神話の舞台である日向国でみられるウミガメの産卵から想起されたとも考えられる。

日南市宮浦に鎮座する鵜戸神宮には、豊玉姫が乗ってきたカメに関する伝承がある。鵜戸崎の先端近くにある海食洞窟が豊玉姫の産屋になったと言い伝えられており、その洞窟の中に本殿が鎮座している。本殿前の広場から海を見下ろしたところに「亀石」という大きな石がある（写真25）。豊玉姫が乗ってきたカメが石になったものという。豊玉姫が海に帰って行ったことを知らず、いつまでも待ち続けて石になったという。この「亀石」は、頭から尻尾まで約八mある大きな石である。背中には六〇cm角の枡型のくぼみがあり、このくぼみの周りにはしめ縄が置

かれている。このくぼみをめがけて、男性は左手で、女性は右手で、願いをこめて「運玉」を投げるという風習がある〔本部　二〇一二〕[33]。

ただし、鵜戸神宮の周辺は岩場であり、実際にウミガメが上陸することはできない。日南市の風田の浜も、豊玉姫がカメに乗って上陸した場所と言い伝えられている〔日南市産業活性化協議会編　二〇一五〕。風田の浜はアカウミガメの産卵場所として、現在、調査・保護活動がおこなわれている。

宮崎県には鵜戸神宮以外にもカメ石がある。宮崎市青島の南に位置する野島神社には、国道に面した海岸に、天然の岩でできた二つのカメ石がある。この神社には浦島伝説のような言い伝えがあるという（『西日本新聞』昭和五〇年五月三日）。

また、古代の日向国とカメの関連でいえば、奈良時代の神護景雲二年（七六八）二月、日向国宮崎郡の大伴人

写真 24　鵜戸神宮（1995 年 3 月撮影）

写真 25　鵜戸神宮の「亀石」(1995 年 3 月撮影)

写真 26　「亀石」の説明版（1995 年 3 月撮影）

益が、赤目の「白亀」を献上、二年後には年号が宝亀に改められたというできごともある（『続日本紀』）。

記紀神話には、豊後（大分県）を舞台にした場面にもカメが登場する。『古事記』の神武東征の場面には、「故、其の国より上り幸でましし時、亀の甲に乗りて釣為つつ打ち羽挙き来る人に、速吸門に遇ひたまひき。」という記述がある〔萩原　一九八三〕。カメの甲に乗って現れた槁根津日子は、「国つ神」であり、「海つ道」をよく知っているという。『日本書紀』では同じ神のことを珍彦といい、神武天皇より椎根津彦という名前を賜ったとしている。舞台となっている速吸門は豊予海峡のことであるという〔坂本ほか　一九九四、萩原　一九八三〕。海峡に臨む佐賀関には、早吸日女神社が鎮座する。拝殿の屋根には、箱を持ってカメに乗った人物をかたどった瓦や、竜宮城の

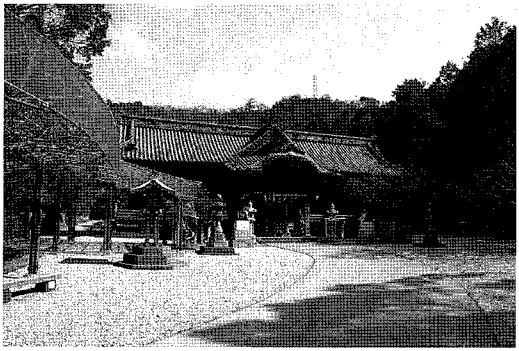


写真 27　早吸日女神社（2005 年 3 月撮影）

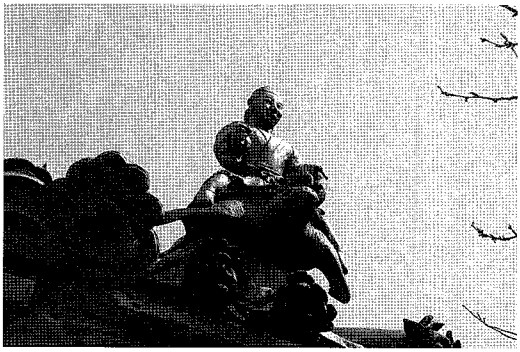


写真 28　早吸日女神社の屋根（2005 年 3 月撮影）

写真 29　早吸日女神社の屋根（2005 年 3 月撮影）

ような瓦が置かれている（写真28・29）[34]。

『続日本後記』には、豊後国大分郡の寒川で「白亀」が捕獲され、朝廷に献上されたことを大瑞として嘉祥に改元したとある。別府市内竈に鎮座する竈門八幡神社には、「白亀」二匹が海から上ってきたので、これを祀ったという言い伝えがある〔別府市　一九八五〕。この神社は、亀山という山の上に鎮座しており、周辺の地名は亀川町と呼んでいる。神社のＨＰによると、嘉祥と改元した際に出現した「白亀」が上がってきたので、亀川という地名がつけられ、亀川中央町（亀の甲広場）には伝説の白亀塚も現存しているという[35]。平成一六年（二〇〇四）には、こうした伝説にちなんで、神社境内に御神亀（開運なで亀）が設置された[36]。

このほか、大分県臼杵市には臼杵城をカメに見立てた伝説がある。天明三年（一七八三）、臼杵を訪れた古河古松軒は、『西遊雑記』巻三に以下のように記している〔柳田　一九七九〕。

本丸は海上の岩山に築し城にて、雅なる事いはんかたなし。二の丸は地方にて、其間幾けんほどあらんや。海をへだてし城郭なり。土人すべていふ、本丸は浮島にて、敵の寄来る時には沖の方へ遠ふざかり行と。また云、亀の背にある岩山にして、時となくうごく事有共いふ。これらの事も埒も無き虚説ながら、土人の物語る事故に記し置ものなり。

この記述から、江戸中期には、臼杵城の本丸はカメの背中にある岩山であり、敵が来襲すると沖へ遠ざかる、という言い伝えがあったことが分かる。臼杵城は、戦国時代、豊後国を治めていた大友宗麟によって築かれた。臼杵七島のひとつである丹生島にあったことから丹生島城とも呼ばれ、形がカメに似ていることから亀城と呼ばれたという〔小野　一九三一〕。あるとき、本丸と二の丸の間に堀を作ったために、その後カメは動かなくなったという

〔酒井　一九四〇、臼杵妖怪共存地区管理委員会・臼杵ミワリークラブ　二〇〇九〕。

臼杵城の突端は海中に突出した岩で、「亀の首」と呼ばれていた（写真30）。ところが、昭和三六年（一九六一）、海岸を埋め立てて土地を造成し、駅から市の中心部へ通じる産業道路を開発することになった。このとき、「亀の首」を切り取る工事をおこなった。工事を請け負った川辺亀蔵氏は、起工式とは別に、自費で神官を招いて丁重な儀式をおこなったうえで工事にとりかかったという。亀蔵の心情について、村上あや氏は、「いやしくも四百年間亀城として、町の人の心の支えとなってきた亀の首を切るにしのびず」と述べている〔村上　一九八三・一九八四a〕。このような儀式や、村上氏の言葉は、臼杵の人々にとって、臼杵城をカメに見立てた言い伝えが根強く受け継がれていたことを示している。

写真30　臼杵城のカメの首（2015年11月撮影）

四　食用習俗

1　宮崎県の事例

a　文献などからみたウミガメの捕獲・食用習俗と卵の採取・食用習俗

宮崎県ではウミガメの肉や卵を食用とする習俗が存在した。しかし、こうした習俗を記した文献は多くない。まず、肉の食用については、宮崎県の民俗学を牽引してきた田中熊雄氏の『宮崎県庶民生活誌』第三編「衣と食」のうち「食の一　食事」の「三　副食」の末尾に以下のような記述がある〔田中　一九八一〕。

肉類といえば亀の肉と魚肉しか食べない地方もあった。海亀の産卵のため砂浜に上陸したとき捕獲したのである。

この文章の中で、「肉類といえば亀の肉と魚肉しか食べない地方もあった」の部分に注をして「児湯郡新富町」と記している。参考文献として挙げられている『日向民俗』は、一六号から二一号まで「食物習俗資料」の特集を組んでいる。このうち、「肉食のこと」という項目において、児湯郡新富町日置六反田の農業を営んでいる宮本という人物（七四歳）からの聞き取りとして「かめの肉だけと魚肉であった」という記述がある〔日向民俗学会　一九六三〕。「食物習俗資料」は全体にわたって、宮崎県内での食習俗に関する聞き取り結果を詳細に報告している。この時期の日向民俗学会の会長は田中熊雄氏であり、[37]『宮崎県庶民生活誌』に書かれている事例は、「食物習俗資料」を基礎資料としているようである。したがって、ウミガメ肉に関する事例については、昭和三八年（一九六三）ごろに新富町日置において聞き取りされたと思われる。なお、新富町日置の調査者は、田中氏自身ではなく、福岡澄雄氏・林康雄氏となっている。

このほか、鹿児島県を中心にウミガメの民俗を詳細に調査した川崎晃稔氏の報告にも宮崎県都井岬の事例が出ている〔川崎　一九八五〕。

アカガメをとる。銛で突く。銛先はツバメモリ（長十cm）で柄はカルの木がよい。漁期は三～四月で、この時期になるとわざわざ捕りに行った。銛は亀が潜る時、尻を上にあげた時に投げる。甲羅には投げない。銛は体内で回転するから決して抜けることはない。ミソ煮、テリヤキにするとうまい。現在は銛で捕獲することはない。定置網にかかることはあるが食べることはない。浜に産卵する亀は絶対に捕獲することはなかった。

川崎氏は都井岬の港で聞き取りをしている。また、別の文献において川崎氏は、「都井岬（宮崎県志布志湾口）でも、船祝にはかならず海亀を料理して食べるものであったという。」と記している〔川崎　一九九〇〕。種子島の捕獲・食用の習俗に類似した事例である〔川崎　一九八五、藤井　二〇〇九〕。

ウミガメの卵の食用習俗については、民俗関係の報告には出てこない。ただし、生物学の文献の中で、カメの卵の食用の状況が出ている。昭和二三年（一九四八）の『暖地の動物学』では以下のような記述がある〔中島・清水　一九四八〕。

亀の卵は煮て食用に供する外、茹でたる後乾燥して粉末となし、下痢止の特効薬と賞してゐる。卵は鶏卵の如くに丈夫な殻でなく弾力に富んだ軟い殻を持ち一見卓球用のボールに似てゐる。其の肉は或る臭気を持ち一般には食用に供することなく、脂肪及び甲のみ利用されてゐる。

ただ、ここにはアオウミガメの利用についても述べているため、宮崎県のみの内容ではない可能性がある。その後、保護活動が開始されてからの文献に、宮崎県におけるカメの卵の食習俗に関する記述がみられる。昭和五二年（一九七七）にまとめられた最初の本格的な報告書である『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』には「Ⅶ　盗掘の状況」という項目において以下のような記述がある〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。

アカウミガメの盗掘は、古くから慣習的に行われ、沿岸住民の蛋白源として、その役割を果たしてきたのが現状である。その際、1穴の卵を20～30個残す慣習があったようだが、実際に残された卵がふ化して稚ガメが地上に出たかどうかは疑問である。終戦直後の食糧が枯渇した時には、その採取利用は極に達したものと考えられ

る。

同報告書の「Ⅳ　産卵状況調査」「1）月別産卵上陸頭数の変化及び産卵場所の環境調査」「（3）産卵上陸頭数の内訳」に以下のような記述もある。

産卵された場所は、ちょっと慣れれば、素人でも簡単に発見でき、また太い針金をまんべんなく突き刺してみれば、どこに卵塊があるか、すぐにわかるものである。そのために盗掘が後をたたなかった。犬が時々掘り起こすことがあったが、ほとんどの場合、あまりにも卵のある場所が深すぎて彼らの手にはおえなかったようである。人による盗掘の場合には、シャベル、あるいは手で掘られ、ひどいのになると、後をきれいに砂をかけ、ならしたものまであった。

筆者が調査した限りでは、宮崎県におけるウミガメの卵利用については、この報告書の内容が最も詳細であると思われる。この報告書には、一章一節gで触れたように、地区別の「盗掘数」、「盗掘率」も記されている。この報告書からは、宮崎県におけるウミガメの卵採取には、資源保護的な知恵があったことや、地区によって採取の頻度には差があったことなどがうかがえる。

その後の文献にも卵の利用に関する記述は散見される。調査・保護活動に当初からかかわった清水薫氏は、『宮崎の動物』の「アカウミガメ（赤海亀）」という項目で以下のように記している〔清水　一九七八〕。

第二次大戦後ごろ宮崎市内でピンポン球の大きさをした、さわるとぷくぷくしてなかなかこわれないウミガメ

の卵を〝精〟がつくといって売り歩いているのを見かけることがあった。

また、清水氏や竹下氏とともに初期のころから調査・保護活動にかかわった中島義人氏は以下のようなことを述べている〔中島　一九八九〕。

一部の地域では、海上又は上陸したアカウミガメを捕獲して食用に供したり、砂浜に産卵したものを掘出して食べたりしていた。

現在、野生動物研究会の会長を務める岩本俊孝氏は以下のように書いている〔岩本　一九九四〕。

昔の人はアカウミガメの卵は滋養に富み、肺病に効くと信じていた。そのため、産卵された卵のうちほとんどは掘り起こされ、食用に供されていた。

卵の効能に関する記述は、民俗学の立場からいえば貴重である。一章で触れたように、宮崎県におけるウミガメの調査・保護活動は、卵の「盗掘」を減らすことが目的として始まっていた。このため、卵の利用に関することにも触れていると思われる。昭和五〇年以前には採取、食用が広範囲におこなわれていたようであるが、これらの文献に記された以上の実態はよく分からない。ウミガメの捕獲・食用についても、田中氏、川崎氏の報告以外に詳細は不明である。

そこで、昭和四〇年代から五〇年代の新聞記事から、具体的な卵の採取・食用の習俗について触れたものを紹介

しておく。ただし、一章一節fで紹介したように、当時の新聞記事には、業者が関係したような大規模な「盗掘」のことに触れているものが多い。当時の大規模な「盗掘」は、地域住民がおこなってきた卵の採取・食用習俗とは差異があるように思われる。次の新聞記事は、一章一節fでも取り上げたが、あらためて引用する。

地元では、昔からアカウミガメの卵は、精力剤になるし、結核や高血圧の特効薬といわれ、小遣いかせぎに掘っては、農村部へ売り歩くものまでいた。いまは、ペットブームにのり、子ガメはデパートで、一匹数百円の値がついている。これを商売にする大がかりな盗掘グループまでいる。(『朝日新聞』昭和五一年五月一九日)

この記事からは、昔からの習慣としておこなわれてきた卵採取・販売と、昭和四〇年代におこなわれていた大規模な「盗掘」が異なっていたことがうかがえる。このほか、地域の習俗としての卵採取や食用について触れたものとしては以下のような記事もある。

戦前は、農村の主婦たちが、浜でとれた魚といっしょに町を売り歩いた。また戦時中は食糧難から、盗掘はひんぱんに行われた。また、ある時は、カステラや天ぷらのころもの色つけ用としても使われたと言う。しかし、卵を食べたことのある人は「生臭くてうまいもんじゃあない」「ニワトリの卵と違ってゆでても白味が固まらないし黄味もザラザラしている」と言う。(『西日本新聞』昭和五〇年五月九日)

この新聞記事には、宮崎市での習俗のほか、屋久島での卵採取のことについても触れている。屋久島では卵を採る権利を入札して決めていたことや、採取する場合は必ず二〇〜二五個はタネタマゴとして残すという「資源保護

に気を配った遠い昔からの島民の知恵」があったことなども紹介されている。（『西日本新聞』昭和五〇年五月九日）

宮崎市以外の卵採取・食用習俗について紹介した新聞記事もある。宮崎市青島に隣接した漁村である折生迫では、戦前、「卵売りが次から次から掘り返して持って行く」ことがあった（『西日本新聞』昭和五〇年五月四日）。日南市梅ケ浜において、仕掛け網にかかった大ガメの卵一六〇個をすべて掘り上げて持ち帰り、友人と山分けして食べた人がいる（『宮崎日日新聞』昭和四七年六月二三日）。また、延岡市長浜海岸では、下痢止めに効くので塩漬けにして売る者もいたという（『毎日新聞』昭和五一年九月一日）。

以上のような情報から、宮崎県ではウミガメの卵採取・食用習俗については、広範囲におこなわれていたことが推測される。また、昭和四〇年代の大規模「盗掘」とは異なる習俗があった可能性も予想される。しかしながら、文献や新聞記事からは、これ以上の情報を得ることは難しい。

このため、長年、宮崎県のウミガメ調査をされてきた竹下完氏や岩本俊孝氏に問い合わせて情報を得た。竹下氏によると、宮崎市の赤江地区および一ッ葉海岸では、卵の「盗掘」が盛んにおこなわれ、とくに赤江では最後まで「盗掘」がおこなわれていたという。また、竹下氏によると、新富町ではウミガメ食用について以下のような話を聞いたという。[38]

昭和の初めごろ、カメの肉を食べていた。五月ごろ、上陸してきたカメを捕獲した。海岸でドラム缶に入れて煮た。激しい匂いが遠くまで漂い、それを知った村人がお椀を持って食べに来た。カメを食べると一年、風邪をひかない。（筆者要約）

田中熊雄氏が取り上げていた地域と同じく新富町の食用事例である。竹下氏は宮崎市から北浦町にかけての海岸を歩いてウミガメを調査してきたなかで、ウミガメの食用の話を聞いたのは新富町だけであったという。また、岩本氏からは、串間市市木で、定置網にかかったウミガメを漁師が食べていたのを見た、という情報を得た。[39]

以上のような、ウミガメの肉や卵の食用に関する文献や情報を総合して、肉の食用に関する事例が複数確認されている新富町を調査地として選んだ。また、卵の採取が盛んであったと推測される宮崎市の赤江地区・檍地区・住吉地区においても聞き取り調査を実施した。

b　宮崎市赤江地区の事例

宮崎市田吉（松崎）出身の前田博仁氏（昭和一七年生まれ）は以下のように語る。[40]

集落に一軒魚屋があった。戦争直後、小学生のころ、松崎の魚屋でカメの卵を売っていた。三個か五個で一〇円ぐらいだった。おいしいもんではない。ピンポン玉みたいにへこんでいる。触ると、へこんだところがもとに戻って、別のところがへこむ。店で卵を買うことはなかった。近所のじいさんが掘りに行っていた。もらったりしていた。卵は食べずに、ボール遊びなどをしていた。卵焼きにはできないといっていた。

自分で卵を掘ったことはない。うちの裏のじいさんは野生動物を捕るのが得意な人だった。魚捕り、カモ捕りなどをした。ウナギも捕った。年中なにかを捕っていた。「大造じいさんと雁」に出てくるようなじいさんだった。松崎には三〇〇町歩ぐらいの田がある。冬になると犬を連れて罠をかけてカモを捕っていた。その人からカメの卵をもらった。宮崎の飲み屋でウミガメの卵を見た記憶がある。昭和五〇年代か。カメの卵は精力がつくといっていた。

隣の集落（浜畑）でカメを捕って食べていた。臭いがきついという。鍋とか食器を別にしていた。浜畑も赤江の中。松崎の隣。上がってきたカメを捕獲したと思う。

松崎という集落は、赤江地区の海岸部に位置する。松崎海岸からは八〇〇mほどの距離に集落の中心があり、昭和二〇年代には七〇～八〇戸あったという。松崎には集落から松林を越えると砂浜が広がっていた。前田氏は海岸の様子を以下のように語る。

防潮林を過ぎると、三メートルぐらいの小さな松林になる。もう少し海の方には、植えたばっかりの一メートルぐらいの松があった。幅一五メートルぐらいで、ずっと植えていた。それから、草があって、崖になって、ずーっと傾斜がある。砂浜は幅が一〇〇メートルぐらいあった。

写真31　松崎の集落（2016年3月撮影）

このような集落で子どものころを過ごした前田氏であるが、自分でカメの卵を採ることはあまりなかった。近所のじいさんからもらって食べることはあったというが、おいしくはなかったという。この松崎ではカメの肉を食べることはなかったというが、隣の浜畑ではカメの肉を食べることがあったという。松崎には地曳網もあったというが、水田が広く、農村であったという。カメを積極的に食べなかったのは、こうしたことと関係があるかもしれない。

また、前田氏は大人になってから、宮崎市内の飲み屋でカメの卵を見たことがあるという。保護が始まっていたころであったので、店の者は宮崎の卵ではなく、鹿児島県の吹上浜のものだと言っていたという。大阪の場末の飲み屋に売るとも言っていたという。

浜畑出身の八八歳の男性は以下のように語る。

カメの卵は採りに行く人はいた。漁師が採っていた。子どものころに見せてもらったことがある。食べなかった。うまいもんではなかった。

浜畑にも地曳網があり、松崎よりも海にかかわる人が多かった集落のようである。浜畑の場合も、松崎と同じく海岸より八〇〇mほどの距離に集落の中心があった。なお、昭和初期には浜畑ではなく、浜山と呼んでいたという。

赤江地区の田元という集落で子どものころを過ごした川崎好氏（昭和五年生まれ）にも話をうかがった。

カメを食べるのは聞かない。自分が住んでいた田元は純農村地帯だった。卵は農家の人々は薬だといって採っていた。胃の調子が悪いとき、胃下しとか言っていた。回虫を落とすといった。食べるというほどではなかった。塩を三角の竹籠のざるに入れて、蓋をして下ににがりがたまる。どこの農家もしていた。そのにがりの中に採ってきたカメの卵を入れて保存していた。小さいころ、おふくろが卵を食べさせてくれた。うまいというもんではない。二度と食べなくていいな、というぐらいのものだった。それっきり食べようと思わない。食べたことはない。薬だと思っていたから食べた。売るとかはなかったと思う。自分は浜にはしょっちゅう行っていたけ

ど、卵を採ったことはない。死んでるカメを見たことはある。

（筆者が、ウミガメのことを問い合わせていたため）この前、原の生まれの九五歳のおばあさんに聞いた。今は本郷南方に住んでいる。この人の家も農家だった。原の人も採りに行った。この女性も薬だといって卵を保存していた。川崎氏が、どうやって食べたのか、と聞くと、卵を炭火で焼いたという。炭火の中へぽんと落とす。白身のとこは絶対に固まらない。黄身しか固まらない。黄身のとこを食べる。自分は食べたことはないという。松崎のところに一軒屋があった。貧しい家だった。そこのおばあさんが、卵を採ってきて、自分では食べんで、持って行って売っていたという。本郷の人が買ってくれたという。貧しいから生活の糧にしていた。戦後も採りに行っていたという。昭和四〇年代まで行っていたという。本郷にカメの卵が好きなおじさんがいたという。採るのをやめたのは保護とは関係ないと思う。鶏の卵なら買うけど。鶏の卵はおしいから食べた。

川崎氏は、その後、周辺の方々にカメの卵のことを聞いてくださった。その情報も提示しておく。

松崎の八〇歳の男性から聞いた。浜畑の一人のおじいちゃんがカメの卵を採りに行って売っていた。田畑も持っていない方だった。どこに売っていたのか、と聞くと、松崎の部落の年寄りが買いよったという。松崎はほとんど農家だった。年寄りの人たちが食べたというか、飲んどった。年寄りが食べていた。若者はあまり食べなかった。八〇歳の男性は卵を買ったのか、と聞くと、自分は買わない、おじいさんたちが買っていた、という。強壮剤みたいな感じで食べていた。毎日食べるわけではなかった。浜畑と松崎以外に売っていたかどうか。

昭和二一年か二二年生まれの男性から聞いた話。津和田（筆者注：大字は本郷北方）の人。この人は小学生のころ、カメの卵を採りに行ったことがあるという。遊ぶためで、ボールに使った。友達と投げ合ったという。赤

江の町に一軒の店がある。湯地（ゆうじ）商店という。田吉駅の近くにあった。おばあさんがやっていた。この店で卵を売っていたという。昭和二一年か二二年生まれの人が子どものころなので、昭和三〇年ごろか。籠に入れてぶら下げるようなかっこうで売っていたという。雑貨店で日用品を売っていた。川崎氏も前はしょっちゅう通ったけど卵を売っていたのは知らない。旧制中学のころはいろいろ買いに行った。戦前は売っていなかったと思う。戦後ではないか。（店の人が自分で採りに行ったのか、買ったのか、と問うと）買ったと思う。息子がいたが、海に遊びに行くようなタイプではなかった。卵を採りに行くようなことはなかったと思う。

田元は浜畑の内陸側に位置した集落であった。海岸からは一・五kmほど内陸になる。田元は大字の田吉ではなく、大字の本郷南方と大字の本郷北方に分かれていた。昭和一〇年代には田元には一九戸あった。一五〇町歩の水田があり、宮崎平野でも一等田であったという。一九戸の農家はすべて三町以上の田を所有していて、ゆとりのある農村であったという。しかし、昭和一八年（一九四三）に当時の海軍が飛行場（現在の宮崎空港）を作るに際して強制移転させられ、集落は消滅した。川崎氏は、小学校六年生まで田元で暮らしており、当時の農村の生活、国による飛行場建設と強制的な集落の移転、アメリカ軍による飛行場空襲のことをよく覚えている。この田元からも、浜畑の地曳網に加勢に行くことはあったという。川崎氏の祖父も網を曳きに行くことはあったという。松崎のように集落の前に松林や砂浜が広がっているわけではないが、浜畑集落の北側に田元集落の松林があり、松葉かき

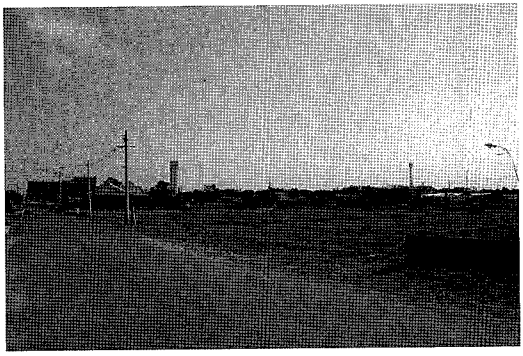


写真32　田元集落の跡地（2016年3月撮影）

に行っていたという。また、子どもは浜へしょっちゅう遊びに行っていたという。しかし、川崎氏は自分でカメの卵を採ることはなかった。それでも、薬としてカメの卵を保存し、食べさせられたという。川崎氏はカメの卵を販売することは知らなかったが、周辺地域の方々に聞いてくださったところによると、松崎・浜畑にカメの卵を採って売る人がいたという。浜畑の男性は浜畑と松崎の集落で卵を売っていたが、松崎の女性は本郷地区にカメの卵を売っていた。本郷地区にはカメの卵が好きな人がいたという。本郷地区は、海岸から二kmほど内陸に位置し、戦前から人口も多く町場であった。また、大字田吉の田吉駅前にもカメの卵を売る店があったという。田吉駅は海岸から二・五km内陸に位置し、戦前から町場であったという。

赤江地区における聞き取りをまとめると、以下のようなことがみえてくる。砂浜に最も近い集落ではウミガメの卵を採ったり、食べたりすることがあった。漁業従事者はカメの肉を食べることもあった。海岸近くの集落には、カメの卵を採って売る人もいた。少し内陸の農村でも、カメの卵を自分たちで採り、薬用として食べていた。さらに内陸の町場の集落では、カメの卵を買い求め、中には好きな人もいた。海岸近くの人たちは、カメの卵をおいしかった、とは語らない。しかし、町場の人は金を出して買うことがあったようである。

c　宮崎市檍地区の事例

一ッ葉海岸周辺の檍地区でも、ウミガメの食用習俗について確認をした。小戸町の黒木健史氏（昭和一八年生まれ）・小戸町の日高章氏（昭和一九年生まれ）・吉村町の児玉輝夫氏（昭和二三年生まれ）・新別府町の金丸文章氏（昭和一六年生まれ）・新別府町の金丸正広氏（昭和二二年生まれ）・阿波岐原町の菊池喜継氏（昭和一三年生まれ）は以下のように語る。

カメの卵は自由に採りよった。薬といった。塩漬けにした。白身は固まらん。黄身だけ固まる。日高氏は生で飲んだ。ざらざらしていた。食えるもんではなかった。日高氏は卵を採りに行ったことがある。遊び感覚で採っただけ。ズボンの中に卵を入れて、ズボンを縛って持って帰ったことがある。そんなことをするなと、父に怒られた。ただ、上がるから、おもしろ半分。遊び心で採った。売るためではない。

新別府の人がカメの卵を売っていた。その人は定職がなかった。男の人だった。夜に採って、昼に売っていた。売る人は限られている。

金丸文章氏は、卵を売りに来て、食べたことはある。おおっぴらに言うことではなかった。おいしいもんではない。栄養剤といって食べた。

カメを食べた話はない。漁師は食べたかもしれない。

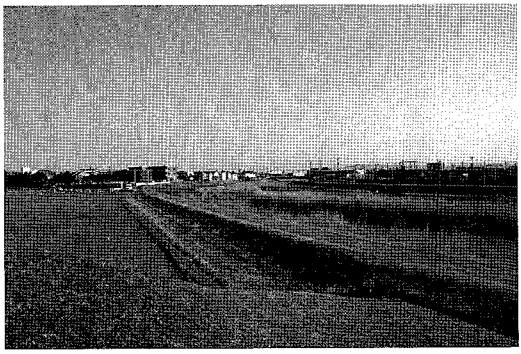


写真 33　新別府川（檍地域事務所から河口方面を望む）(2016 年 3 月撮影)

二章で述べたように、ウミガメと遊んだり、産卵を観察していた黒木氏は小戸町の方であった。卵を採って遊んだという日高氏も小戸町の方である。海岸に近い小戸町の方は、遊び感覚でウミガメの卵を採ったり、食べたりしたようである。小戸町は大淀川と一ッ葉入り江での漁業が盛んであった地域である。集落と砂浜の間には、一ッ葉入り江が横たわっていたが、船を持っているので、自由に砂浜に行くことができたという。一方、新別府町には地曳網もあり、漁業に従事する人もいたが、水田が多い地域であった。この新別府町には卵を採って売る人がいたという。この人は漁業従事者ではなかったようである。また、新別府町の農家では売りに来たカメの卵を買って食べることもあったことがうかがえる。一ッ葉海岸周辺では、ウミガメの肉を食べることは聞いたことがないという。

ただ、漁師の人は食べた可能性があるようである。

檍地区の北部に位置する山崎町の方からも情報を得ることができた。山崎町に子どものころから住んでいる井野氏（九〇歳、男性）は以下のように語る。[41]

戦時中から終戦後のころ、採る人は一人ぐらい。毎日採ってきて、売りにも行っていた。その方は昭和二〇年ぐらいに亡くなった。山崎町は地曳網が多かった。ウミガメの卵は、子どもが掘って遊ぶ程度のもの。ほとんど売りに出す事はなかった。

同じく山崎町に子どものころから住んでいる井野豊子氏（八〇代、女性）は以下のように語る。[42]

地曳網を引くときにたま採る人がいた程度。みんなに配っていた。自分はウミガメの卵は嫌いだった。売りに出すことはなかったと思う。

また、宮崎県教育庁の黒木秀一氏が山崎町の老人婦人会の方々に聞いたと

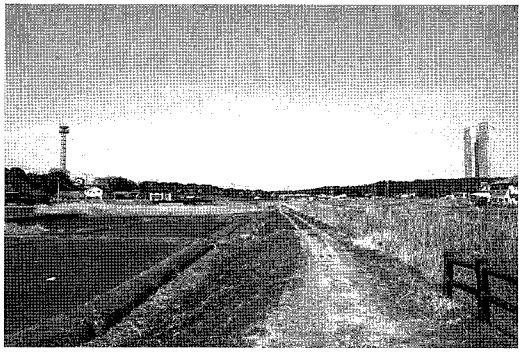


写真34　山崎町の集落と水田（2016年3月撮影）

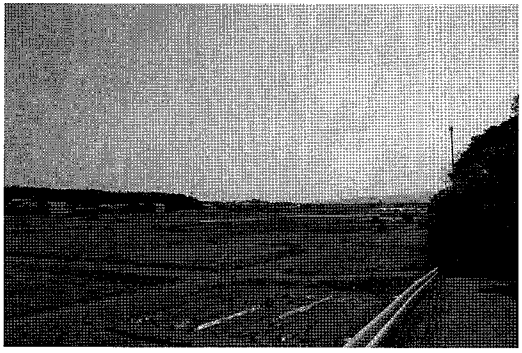


写真35　山崎町から南を望む（2016年3月撮影）

ころ、だれもカメの卵のことは知らなかったという。山崎町は檍地区の中でも最後まで地曳網が残っていた集落である。カメの卵を採ることはあったが、売ることはあまりなかったようである。昭和五二年の『市指定天然記念物調査報告書　アカウミガメ』には、一ッ葉海岸の「盗掘数」が最も多かったが、山崎海岸の「盗掘数」は少なかった〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。聞き取り結果と報告書の「盗掘数」を比較すると、新別府町の人などが販売していたために一ッ葉海岸では卵の採取が盛んであったが、山崎町ではほとんど集落内での利用であったため採取は多くなかったということがうかがえる。

d　宮崎市市街地の事例

内陸出身の方にも聞き取りをした。子どものころ、宮崎市江平に住んでいた大西敏夫氏（昭和三一年生まれ）は以下のように語る。

昭和三〇年代から四〇年代の初め、子どものころなので、はっきり分からないが、農家の方が野菜を積んで行商をされていた。カメの卵も一緒に入れて売りに回っていた。どこの人か分からない。女の人が売りに来ていた。五〇代か六〇代か。リヤカーで野菜を売っていた。カメの卵はピンポン玉みたいだった。隣が食堂だったので、よく買っていた。カメの卵は買ってなかった。「へー、カメの卵食べるんだ」、と思った。野菜のことは覚えていないが、カメの卵のことは覚えている。買って食べたことはない。

江平は海岸まで約三・五kmの地区である。大西氏は、農家の所在地について、子どものころなのでよく分からないとしながら、新別府町や吉村町あたりではないか、という。檍地区の方々が語っていた新別府町の卵を販売する

人は男性であった。したがって、大西氏の記憶する方とは別人と考えられる。新別府町には、昭和四〇年ごろまでは、ウミガメの卵を販売する人が複数いたことが予想される。

e　宮崎市住吉地区の事例

檍地区の北に隣接する住吉地区の方にも話をうかがうことができた。住吉地区の島之内に住んでいた斉田健氏（昭和三年生まれ）は以下のように語る。[43]

父親が料理人でボラの子（方言：ツクダ、姿寿司にする。秋～春に採りに行く。当時の貴重なタンパク源。今は誰も食べない）を石崎川河口に採りに行ったり、石崎浜で地曳網（一年を通して凪の日、二月は休み、八丁櫓に一一人くらい乗る。イワシ・アジ・サバ・カレイが取れていた。）をしていた。塩路には地曳網が三つか四つあり、朝の五時か六時、潮の加減で四時ぐらいから曳いた。多くて六〇人、少なくて四〇人ぐらい曳いた。女の人も曳いた。網を上げる二時間ぐらい前に行って、カメが上がってくるのを待って、カメの卵を採った。地曳網に行った人ばかりではなく、卵だけ採りに行く人もいた。

一人ではさびしいので、二人か三人で行った。浜には一人で行くと怖かった。松林が一キロぐらいあった。松林を通り過ぎて砂浜に出た。砂の丘が三つぐらいあった。一人では行かなかったと思う。昭和一三年、海軍の艦上攻撃機が浜に不時着したことがあった。それほど浜は広かった。

場所は石崎浜から現在の住吉ＩＣくらいまでだが、毎日行くことはなかった。ウミガメの卵を採取するための縄張りなどはなかった。だれが採りに行ってもよかった。産んだところを一つ見つければ、一〇〇個ぐらい採れた。あとのために、残しとけよ、という人もいた。卵を採るときは一〇個ぐらい残しておいた。絶えるといけな

いという意識があったと思う。全部持ち帰る人もいたかもしれない。

父親は料亭をしていた。漁が好きだった。潮の加減で、地曳網を曳くのを待っているときにカメの卵を採って帰った。自分も連れて行ってもらったことがある。それは、カメの卵を採りに行ったのだと思う。早く行かないとどこに産んだか分からんから、早くに行った。自転車で行った。住んでいたのは島之内。浜まで一里ぐらいある。父も何回か卵を採りに行った。卵を採りに行くのは小鮒をすくうような網を持って行った。割れないので、網に入れて持って帰った。帰るときには隠して通った。悪いことをしたわけではないけど。浜に一番近い集落は塩路。塩路の人も卵を採りよったと思う。

採った卵はどこかに売った。鶏卵がない時代なので、コイの生き血やカメの卵は重要な位置にあった。コイの生き血は結核に効くといった。カメの卵やコイを自分の家に買いにくる人もいた。分けて欲しいと予約をする人もいた。個人的に買いに来る人もいた。家族で食べる人もいた。近所に配ることもあった。たくさん取ってきて、食べきれなくて捨てられていた卵を見たこともあった。

卵を塩漬けにすることはなかった。ウミガメの卵は焼いても固まらない。ウミガメの卵を少しはさみで切り、どんぶりに三〜四個入れ、メリケン粉を混ぜて、卵焼き風に焼き、切って食べていた。卵焼きの鍋で焼いていた。自分は長男だったので、妹や弟たちに、おやつとして作ってやった。自分は生臭いので好きではなく、ほとんど食べなかった。舌触りが鶏の卵とは違う。ウミガメの卵は婦人病の薬といわれていた。婦人病とは四〇代以上の女性の閉経による体調不良ではないだろうか。カメの卵を食べるのは女の人が多かったと思う。採りに行くのは男の人だった。

ウミガメの肉を食べることはなかった。地曳網に入ったカメには酒を飲ませて放していた。佐土原で、牛が引く二輪車にウミガメを積み、むしろをかけて縄でくくって持って帰っている人を見たことがある。何が積んであ

るのかとのぞいてみたらウミガメだった。持ち帰って食べたのだろう。

市場がなかった時代、農家のおばあさんが野菜の行商に行っていた。ほうれん草・白菜・大根・ネギなど味噌汁に入れるような野菜を売りに行く人が何人もいた。その中にウミガメの卵を売っている人もいた。現在の宮崎大学住吉牧場の近く（島之内）に住んでいた人たちは、花ケ島から神宮あたりに売りに行っていた。佐土原の下那珂の人たちも自宅近く（現在の日向住吉駅前）に野菜の行商に来て、ウミガメの卵も売っていた。以前の日向住吉駅は次郎ケ別府駅という名前で、駅前に料亭が八～九軒あった。自分の実家は駅の正面で料理屋をしていた。

天秤棒に直径一m、深さ二〇cmの大きさの平籠を下げて、野菜を並べて運ぶ。卵はつぶれないように、小さな籠に入れてあったが、卵は隠していた。「ほうれん草や白菜はいらんかね～」と売り歩くのだが、「ウミガメの卵はいらんかね～」とは言わない。婦人病の人が買うので客の病気を知られないように表向きは見えないように売っていたのだろう。自然で採取したものは自分たちが作った作物ではないので、堂々と売ったりしなかった。ご主人や息子たちが採ってきた卵を売っていた。野菜の行商は昭和三六年くらいまでは見ていた。そのころはリヤカーの人もいた。

終戦後三年ぐらいまではカメの卵を食べていた。地曳網は二七年ぐらいまでだったか。鶏卵の普及で採りに行く人も少なくなった。（昔は鶏卵とバナナは高価だった。鶏卵の普及は昭和三〇年代ごろ。）保護が始まるから、卵を採ることはなくなってきていた。薬が近代化されて、婦人病の薬として使う人が少なくなった。コイの生き血もそうだった。しかし、希少価値を求めて採りに行っていた人はいただろう。ウミガメの調査が始まって食べてはいけないという意識が広がり、食べなくなったような気がする。

斉田氏の場合は、自分の父親がカメの卵を採っていて、それを販売もしていたために詳細な記憶が残っている。斉田氏の家は島之内という海岸から二・五kmほど内陸の集落であった。島之内は住吉村の役場があったところである。昭和三五年（一九六〇）には六四六戸、三〇五二人あった〔「角川日本地名大辞典」編纂委員会　一九八六〕。

少し内陸からでも、地曳網のついでに卵を採ることがあったことがうかがえる。また、斉田氏の父親は漁が好きな人であったという。漁の好きな人が、誘い合って卵を目的に採りに行くこともあったようである。卵はどの集落の人でも自由に採っていたが、海岸近くの集落を通るときには隠したという。島之内からは地曳網を曳くことや、浜へ遊びに行くことはあっても、松葉かきや、流木を拾いに浜へ行くことはなかったという。浜から離れた集落の者が堂々とカメの卵を採りに行くことははばかられたということかもしれない。しかし、卵は無制限に採っていたわけではなかった。卵を採取するとき、何個かを残しておくという言い伝えがあったという。

採った卵を販売するのは、島之内の野菜行商のおばあさんたちであった。夫や息子が採ってきた卵を販売したという。この人たちは野菜を売ることが中心であり、カメの卵は隠して売っていたことが分かる。隠して売るのは、保護が始まっていたからではないという。販売者は自分たちが作ったものではないからという心意があり、客の心意としては自分の病気を知られたくないという心意があるから、と斉田氏は説明する。島之内の人たちは、さらに内陸に売りに行っていたが、佐土原の人たちが島之内にも売りに来ていたという。

斉田氏の場合も、ウミガメの卵採取がなくなった理由として、保護活動を最優先には語らなかった。斉田氏によると、カメの卵を食べなくなったのは、鶏卵の普及、地曳網の消滅、薬の近代化、野菜行商の衰退、保護の開始などが影響しているという。

以上、赤江地区・檍地区・住吉地区において聞き取りをおこなうと、宮崎市内の沿岸部では、ウミガメの卵を採取して食用にする習俗が広がっていたことが確認できた。また、宮崎市の青島においても卵を食べることはあった

という。[44] ただし、卵に対するかかわりは、海岸近くの集落、少し内陸の農村、さらに内陸の町場、という三段階ほどに分類できることがみえてきた。海岸近くの集落では子どもの遊び道具であり、大人でも野生動物捕獲が好きな方が採ることがあった。あまり仕事がない方が、小遣い稼ぎとして卵を採取して売ることもあった。薬用として食用にすることがあったが、おいしかったとは語られない。少し内陸の農村からも、子どもが遊びで卵を採りに行くことがあった。やはり、薬用として食用にすることがあったが、おいしかったとは語られない。農家の人が採りに行き、野菜行商の際にカメの卵を積んでいくこともあった。さらに内陸の町場からでも、卵を採りに行くことがあった。子どもや野生動物の捕獲が好きな方が行っていた。採ってきた卵を販売することもあった。

卵を採取していた時期については、戦後の食糧難であった昭和二〇年代が最も盛んであったようである。昭和四〇年ごろまで盛んであったが、その後は衰退したという。卵の食用習俗がなくなったのは、保護とは関係がない、と語る人もいる。鶏卵の普及や、カメの卵を売る手段であった野菜行商の衰退などの理由もあった。一方、一章で述べたように、宮崎市でウミガメ保護が始まったきっかけは、昭和四〇年代に「盗掘」率が九〇%を越えていたからであったという。卵の「盗掘」は昭和五〇年代でも続けられ、平成になったころになくなった。このように、地域の方々の語りや認識と、保護運動を支えてきた方が直面していた「盗掘」の実態には差異があるように思われる。

カメの肉については、赤江地区や旧佐土原町で食べることがあったが、ときどき食べる程度であったようである。

f　新富町の事例

新富町は宮崎市の北側に位置する町である。昭和三四年（一九五九）、海岸部の富田村と内陸部の新田村が合併

して新富町が成立した。平成一八年（二〇〇六）、一ツ瀬川南側の旧佐土原町が宮崎市に合併したため、新富町は一ツ瀬川をはさんで宮崎市に隣接することになった。一ツ瀬川の河口から北に砂浜が発達し、北側の高鍋町にかけて砂浜が伸びている。

田中熊雄氏の本や竹下完氏の情報により、宮崎県の中でもウミガメの肉を食用とする習俗が顕著であったという新富町において聞き取り調査をした。一ツ瀬川河口から北に延びる砂浜の西側には富田浜入り江が北に伸びている。この入り江近くには古くからの集落はない。海岸線の北の方には日置（ひおき）地区がある。[45] 大字日置地区には今別府（いまべう）・岩脇（いわなぎ）・六反田・野中・日之出などの小字（集落）がある。このうち、今別府・野中・日之出の方に話をうかがった。

今別府で民宿を経営してきた瀧口紘二氏（昭和一七年生まれ）・幸子氏夫妻は以下のように語る。

終戦直後、日置の人たちがカメの卵を採って食べたというのは聞いた。ここに来たころはなかった。食糧難のころ、肉も食べたと聞く。戦後五年ぐらいまでか。サツマイモの蔓でもなんでも食べた時代。紘二氏は卵も肉も食べたことはない。紘二氏は麓（新田村）の生まれ。卵も肉も売りに来たというのは聞いていない。卵は気持ち悪かった。食べたことはない。

幸子氏は卵を食べたことがある。嫁いできてから、紘二氏の父が卵を何回か採ってきて食べた。卵焼きにして食べた。好奇心で食べてみたか。卵は真っ黄色で、普通の卵と同じと思った。おいしかった。肉は食べたことはない。幸子氏が卵を食べたのは昭和四〇年過ぎか。結婚当初は新田のほうにいた。基地の下だった。忙しいときに民宿に手伝いに来た。

もともと、紘二氏の父親は内陸の新田村で旅館兼食堂をしており、昭和三〇年代には海水浴場のあった富田浜に店を出していたという。紘二氏はカメの肉も卵も食べたことはないというが、幸子氏は昭和四〇年代に紘二氏の父が採ってきた卵を食べたという。現在も瀧口氏の民宿は、入り江近くに位置しており砂浜が近い。ただし、今別府の集落は松林を越えた内陸に位置しており、集落からは離れている。したがって、瀧口氏夫妻の場合は、今別府の習俗とは判断できない。今別府にはもともと漁師はいなかったという。夫妻の娘である初美氏によると、幸子氏の友達は、リヤカーでカメの肉を売りに来ていたという。食べると匂いがして、三日ぐらい匂ったという。この友達は六反田の人という。

六反田の北側に野中という集落がある。高鍋町との境に位置する集落である。日置におけるカメの食習俗について確認するため、野中で暮らしてきた出口弘敏氏（昭和九年生まれ）に話をうかがった。

カメを殺して肉を取る人がいた。だれでもせんかった。一人か二人。野中の人だった。農家のような気がする。待ち構えて、卵を産卵したあと、ひっくり返した。（カメをひっくり返すのは、卵を産んだあとだったか、とあらためて聞くと）卵を産む前かあとか、関係はないか。分からん。

ひっくり返すと、カメはどうにもならん。一匹、二匹ぐらいしよったか。カメを殺して、浜で肉を取りよった。肉を持って帰りよった。肉を取ったあとは、そのまま放置した。肉を取ったあとのは、海岸に行くといくらでもあった。浜でさばいてほったらかしだった。肉を取ったあとのも

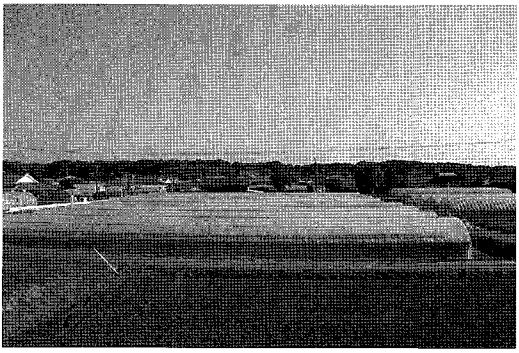


写真 36　野中の集落（2015 年 12 月撮影）

のか、ひっくり返して死んでいるのがけっこうあった。一〇〇メートルおきぐらいにあった。

甲羅は何も使わなかった。頭はそのままほっていた。手もそのまま。その人はカメの肉を行商しよった。天秤棒を担いで、肉を各家に、「いりませんかー」と売って回った。男の人が回っていた。大字日置ぐらい回った。野中、六反田、岩脇、今別府ぐらいか。その人だけが行商していた。もう一人いたか。一人は確実。七〇前後の人だった。戦後も売っていた。戦前も売っていたかもしれない。小さいころなので覚えていない。〇〇じい、というと、カメを殺すと知っていた。その家は田畑もあんまりなかったか。地曳を曳きに行ったりしていた。肉を売っていたのは昭和三〇年ぐらいまでか。高校ぐらいにはなかったか。子どもは継がなかった。売る人が亡くなって、カメをつぶして売りに歩くことはなくなった。

農家でもけっこう食べた。カメの肉はものすごく匂いがする。家の中では絶対に料理させんかった。カメを食べると、次の日は汗に匂いがした。次の日は、カメを食べたね、と分かるぐらい匂った。鍋は各家にカメ専用の鍋があった。その鍋ではほかの料理は炊かせんかった。肉は赤肉で、きれいだった。けっこうおいしかった。味付けは味噌味だったか。専用の箸があった。竹を切ってきて使った。一回使ったら捨てる。匂いがきつかった。

カメの肉を食べると風邪をひかないといった。みんながみんな食べたわけではない。限られていた。（カメを捕るのは）産卵に上がってくるのを見計らって殺すから六月ごろ。食べるのは産卵時期だけだった。何回も食べない。一年に二、三回か。おいしいんだけど、あんまり食べない。

（どの部分がおいしいか、と問うと）包丁で切って売ってるから、どの部分か分からん。肉の塊を二つか三つ持ってきている。内臓は買い手がおらんかったと思う。脂を買うことはない。一匹のカメでけっこうあったと思う。塩漬けはしていない。常連客でないと買わない。卵は気持ちが悪いという感じだった。なんぼ炊いても固まらん。

自分は高鍋に親戚がいる。高鍋ではカメを売っているのは聞いたことがない。海藻やカキを売っていた。自分もカメをひっくり返して遊んだ。一人では無理。けっこう大きい。

卵を持って帰る人もいた。卵はやわい。いくら炊いても固まらん。脂を炊くような感じ。卵はあんまり食べなかった。塩に漬けてからぶらさげちょった人もいた。たまに生で食べる人もいた。卵を食べる人はめったにおらん。いい感じはしなかった。おいしくない。掘りに行く人はまっすぐに掘らん。カメは一メートル近く掘ると横に掘る。横に卵を産む。掘る人は真下に掘るけど、いくら掘っても卵に当たらん。食べるためではなく、遊びで掘ったことはある。卵はいくつか掘って、またいけた。遊び半分だった。卵を売る人はなかった。買い手がおらん。肉はけっこう売れていた。

野中の中心部は海岸から四〇〇mほど内陸に位置する。田畑も広く農業に従事する人が多かったようである。日置の海岸では、昭和一〇年代から、山西水産が地曳網をしていた。野中の人も、地曳網には手伝いに行ったという。出口氏の語りで注目されることは、カメの肉を販売する人がいたということである。宮崎市では卵を売る人はいたというが、肉を売ったという話はでなかった。ところが、新富町では卵よりも肉のほうを売り歩く人がおり、農家の人々も肉を好んで買っていたという。

海岸近くの日之出の梶原憲明氏（昭和二二年生まれ）にも話をうかがった。

写真 37　日之出の集落（2015 年 12 月撮影）

日之出の人はカメはほとんど食べなかった。カメを捕ることなかった。ほとんどほったらかし。梶原氏は小学校六年か中一のころ、カメを返したことがある。一人ではない。四、五人で返した。親が来て怒られた。放すとカメは後ろを見ながら帰って行った。日之出の人にとって、カメを食べようというのはなかった。この辺で食べる人はなかった。売りに来ると食べるといったところか。

地曳網があったので、六月ごろにカメが地曳網に入った。地曳は沖まで行かんから、カメは近くにおったのだろう。地曳は速くは動かない。じわーっと上がってくる。二匹入ったら一匹は逃がした。一匹は分け前として、川沿いでカメをつぶして分けた。水を汲めるし、水が流れるところでつぶしよった。焼酎を飲ませてから、あおむけにして、ヨキみたいなので首を叩いた。血がぱーっと出た。腹の甲羅と上の甲羅の間がやわい。そこに包丁を入れて甲羅を取った。きれいに分かれよった。頭はそのままほったらかし。鍋には入れなかった。

たんぱく源だった。四〇人ぐらいの人が地曳を曳いた。捕ってから一匹はさばいた。四〇人なら四〇人に分配した。カメは自分たちの分け前だった。魚は山西水産のもの。雑の魚は分けて帰った。カメはもらってきた人が食べた。家の中はだめ。家の中で炊くと家の中が臭くなるといった。外で鍋で炊いて食べた。その辺りの竹を切ってきて箸にした。竹を切ってこいと言われた。皿は使わしゃらん（使わせない）。カメを食べると汗がにおいよった。汗がカメ臭くなる。牛肉みたいに脂っぽくない。赤身でやわらかい、という記憶がある。硬く感じたことはない。

近所の人が地曳に行っていたので、肉をもらってきて食べたことがある。中学ぐらいか、一五、六歳か。父が生きているころにも、家の裏でカメを炊かされた。うっすら覚えている。鍋から直接食べた。鍋はほかのものは使えない。内臓は臭くない。甲羅のところに青い脂みたいなのがついている。それを入れるとものすごいにおいがする。大鍋で炊きよるのを覚えている。体の中の卵は固まる。もらって食べたのは覚えている。地曳が終わる

と必ずノミカタあるので。漁が終わると飲むのが楽しみ。味付けは味噌だけ。肉の塩漬けは聞かない。甲羅はそのままほかった。タヌキが甲羅のふちを食べた。カメを食べたのは一年に一ぺんか二へんか。血は飲まなかった。内臓の名前はない。腹の甲羅も食べない。この前も、（仲間と）飲んだときに、もう一回カメを食べてみたいという話をした。

カメをつぶしてから売っている人もいた。岩脇に一人、永谷に一人いた。魚屋でも漁師でもない。農業をしていたか。普通の人だった。その人は自分でカメを返して捕っていた。川のそばのへんでカメをさばいた。岩脇と永谷の人は商売として売っていた。肉は商売にしてる人がいたが、卵は使い道がなかった。この人たちは卵は売っていない。よそから卵を採りに来る人もいなかった。商売してる人は昭和四〇年ぐらいまでか。梶原氏が高校ぐらいまでか。

父は自分が小さいときに亡くなった。父は卵を塩漬けにしていた。藁で納豆みたいにして、塩をいっぱいにした。卵を二〇個ぐらい入れて、塩を真っ白に入れて、納屋の上に置いていた。はらいた（腹痛）の薬になるといった。焼いて食べた。一回だけ食べた。卵はかちんかちんに固まっている。水分が飛んでるのか。炊いても固まらんかった。そのあと、卵を塩漬けにしたのは聞いたことがない。生の卵を食べたのは記憶がない。（肉の話をしたあとで）卵を生で飲んだこともたぶんあると思う。

そのころから豆腐屋をしていたので朝が早かった。カメの卵を採ったことはある。カメが上がった辺りに竹を差すと、ぶすっと入るところがある。そこが卵を産んだところ。朝早くに行った。一人で行くことはない。遊びで行った。家で食べるためではなかった。売ることはなかった。カメの卵は遊びで学校へ持って行った。ふわふわしている。鶏の卵のように、ばりってひびが入るわけではない。

卵を採ろうと思っていなかった。商売になってたら採ったかもしれんが、商売にならなかった。昭和四七年に

はあんまり卵は採っていなかった。

肉を売る人とは別に、地曳網に入ったカメを食べることもあったという。梶原氏の語りからは、出口氏よりも身近にウミガメを見ていたことがうかがえる。

新富町の内陸出身の方にも話をうかがった。城元出身の太田功氏（昭和三三年生まれ）は以下のように語る。

日之出の子が、学校に遊び道具として、カメの卵を持ってきていた。卵でキャッチボールをした。食べたことはない。ゆでても固まらないという。肉は食べたことはない。売っているのも知らない。日之出に遊びに行ったとき、カメ小屋があった記憶がある。匂いがものすごいので、カメ専用の鍋、釜があった。日之出に遊びに行ったときに見た。食べたことはない。

新富町教育委員会の樋渡将太郎氏は、ウミガメ保護にかかわっているため、町内のウミガメに関するさまざまな情報を聞いている。小学校、中学校、高齢者向けの出前授業をするというが、高齢者が対象の場合には、昔はこうだった、と教えてもらうことが多いという。そのようなときに、肉や卵を食べていた話が出てくるという。高齢者の話を聞いている樋渡氏は、肉よりも卵を食べていた人のほうが多いのではと、感じている。また、国道一〇号線よりも内陸にいくと、食べたという話は薄れていき、販売に来たという話も少なくなる。西都市との境の人は、カメを食べる話は聞いているが、売りに来たこともないし、食べたこともないという。

以上のように、新富町の場合は、卵のみならず肉も盛んに食べられていたようである。ただし、川崎晃稔氏が報告していた日南市のような沖合での積極的な捕獲ではなく、地曳網にかかったり、上陸したカメを捕獲するという

ものであった。また、宮崎市とは異なり、卵のみならず肉の販売もおこなわれていたところに特徴がある。宮崎市の赤江地区・檍地区・住吉地区などに比べて人口が少なく、販売距離も短い。樋渡氏が食用の話が薄れていく目安として考えている国道一〇号線は、新富町中心部あたりにおいて、海岸から一・五kmほど内陸である。宮崎市よりも狭い範囲で、肉や卵の販売がおこなわれていたことがうかがえる。

g　高鍋町の事例

高鍋町南高鍋（堀之内）の横山芳武氏（昭和三年生まれ）は以下のように語る。(46)

ウミガメの卵は、ゆでて食べていた。戦後ぐらいまでだった。食糧難の時代、肉類がなかったので貴重な蛋白源だったのだろう。ウミガメの卵は子どもには食べさせてなかった。臭くて、食べると出る汗まで臭くなるといわれていた。臭みが残るため食器を使わずに、ハマグリの貝殻を皿の代わりに使っていた。小学校四、五年生の授業で学校の先生に一番おいしいものを黒板に書くという時間があって、カメと書いた友達がいた。カメとは何かと先生が友達に聞き返していたことを今でも覚えている。自分たちは食べなかったが、食べていたところもあったのだろう。

南高鍋の堀之内には、新富町から続く砂浜が広がっている。堀之内には現在でもウミガメの産卵が多くみられる。横山氏はカメ肉を食べたことはないようであり、卵の食用のことが語られている。しかし、新富町の事例と比較すれば、臭くなるから食器を分けたという点は肉を食べるときのことと思われる。カメが一番好き、と言った友達についても、肉のことを言ったものと思われる。全国的にみても、ウミガメの肉はおいしかった、と語られるこ

とも多いが、卵はおいしくなかった、と語られることのほうが多いからである。

高鍋町蚊口浦出身の大木隆幸氏（昭和一九年生まれ）にも話をうかがった。

子どものころ、カメの卵を売りにきよった。新富よりの堀之内から売りに来た。個人的に来た。港がないから船は陸に上げていた。歩いて天秤棒を担いで売りに来た。カメの卵の味は覚えていない。貧乏やったから、そんなに買わなかった。鶏を飼ってたから鶏の卵は食べた。カメの肉は食べたことはない。

二章でも触れたように、南高鍋の堀之内よりも北側の蚊口浦は、小丸川の河口にあたり、砂利の砂浜になっている。したがって、ウミガメの産卵がなく、産卵のある堀之内から卵を売りに来ていたという。

h　延岡市の事例

延岡市出北出身の根井幸恵氏（昭和二一年生まれ）は以下のように語る。[47]

延岡の長浜でもカメの卵を食べた。自分は記憶がないが、姉が自分も食べていたといっている。卵だけでなくウミガメの肉も、食卓にあがっていたことがあった。知らないうちに食べていた。どのように入手していたかまでは分からない。

延岡市でも卵や肉を食べることがあったことが分かる。このように、宮崎県では北部までウミガメの卵を食べる習俗は広がっていたことが予想される。肉を食べる習俗については卵よりも地域が限定されるものの、北部まで点

在していたようである。

2　大分県の事例

a　文献などからみた肉と卵の食用習俗

『大分百科事典』の「ウミガメ」の項目には、「肉やカメの卵は、鹿児島県や宮崎県は食用にするが、本県では食用にしない」とある〔大分放送大分百科事典刊行本部　一九八〇〕。NPO法人おおいた環境保全フォーラムの内田桂氏も、大分県ではウミガメの肉の食用は聞いたことがないという。ただし、内田氏によると、卵については大分県でも食用の習慣はあったという。[48] 内田氏からは以下のような情報を得た。

一九五〇年ごろまでは旧蒲江町の元猿海岸の周辺地区で、ウミガメの卵の採取が盛んにおこなわれ自家消費されていた。卵の食用は一九六〇年ごろまであった。行商の人たちが採卵した卵を大分市近郊まで売り歩いていた。精力食材として売られていた。（筆者要約）

『蒲江町史』には、「昔は屋形島・波当津浦・元猿の海岸ではウミガメの産卵が多くみられた。卵を食べるために採っていたという話を聞いた。」〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕という記述がみられる。旧蒲江町では卵の食用が存在したことがうかがえるが、旧蒲江町以外の状況は不明である。そこで、筆者は大分県におけるウミガメの食用に関する実態を把握するため、佐伯市および臼杵市を中心に聞き取りをおこなった。

b　佐伯市の事例

佐伯市蒲江蒲江浦出身の清家隆仁氏（昭和二九年生まれ）は、以下のように語る。

屋形島でカメの卵を食べた。屋形島では、鶏の卵と混ぜて固まらせて食べた。ピンポン玉みたい。蒲江では食べたのは聞いたことがない。

屋形島は蒲江港から南へ二・五kmの蒲江湾口に位置した周囲三kmの離島である。昭和三五年（一九六〇）には一七六人、二七世帯であった（蒲江町史編さん委員会　二〇〇五）。清家氏は屋形島でカメの卵を食べたことは知っているが、旧蒲江町の中心地区である蒲江では、カメの卵を食べたことを聞かないという。

佐伯市蒲江西野浦の久寿米木大作氏（昭和一二年生まれ）は以下のように語る。

西野浦の仙崎に一軒家があった。仙崎さんという家だった。テングサを採りに行くと、その家のおばあさんがカメの卵をゆでたのをくれた。カメの卵はゆでても白身が固まらん。どろっとしている。黄身だけ食べた。仙崎のおばあさんは、カメが産んだ場所が分かるので掘っていた。自分は卵を採りに行かなかった。カメは食わない。

ウミガメの産卵する砂浜は湾内にはなく、湾口のほうにあった。そのあたりに仕事に行ったときには、カメの卵を食べることがあったということである。しかし、日常的に食べるものではなかったようである。薬用という意味合いもなかったようである。なお、カメは食べたことがないという。

西野浦出身の清水聡氏（昭和一七年生まれ）は以下のように語る。

高山海岸に産みに来る。卵はおいしくない。ウミガメは小笠原にいたときに食べた。アオのほうがおいしい。アオは海草を食べる。アカは雑食。何匹ももらって食べたが、もう食べたいとは思わない。ここはカメを食べる習慣はない。

清水氏は小笠原でアオウミガメを食べたというが、旧蒲江町では食べる習慣がないという。

佐伯市蒲江畑野浦の冨高晃氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

カメの卵も食べた。栄養があるという。ピンポン玉ぐらい。炊いても白身が煮えん。少々叩いても割れない。大騒津に大きな砂浜がある。尾浦から畑野浦へ来る途中にある。子どもは、尾浦の子どもたちは学校へ来る途中にカメの卵を採ってきていた。畑野浦から卵を採りに行くことはなかった。尾浦の組は通学途中に採った。尾浦の組は棒を持って行って、ここにおるじゃろうというところへ挿すと分かった、という。よう卵を持ってきた子どもがいた。その子は大騒津に住んでいた。

深島の組はカメを食いよった。うまいんじゃといった。わしたちは食わん。

ウミガメの卵を食べたことはあるが、産卵する砂浜は畑野浦の集落から離れた場所であるため、卵を採りに行くことはなかったという。畑野浦でも日常的に食べるものではなく、薬用という意味合いも語られなかった。[49] ところで、深島ではカメを食べたという話も語られた。深島というのは、蒲江港から南へ九kmの日向灘に位置する周囲四

kmの離島である。昭和三五年（一九六〇）には一七七人、三七世帯であったが、蒲江との交通に時間がかかることなどから、現在では屋形島以上に過疎化が進んでいる（蒲江町史編さん委員会　二〇〇五）。筆者は深島に現地調査に行くことができず確認はできていない。ただし、カメ肉の食習俗の存在した宮崎県に近く、本土との交通も不便な隔絶された離島であることから、カメ肉を食べる習俗があったというのは容易に想像できる。

佐伯市蒲江畑野浦（尾浦）の鳴海吉三郎氏（昭和三年生まれ）・鳴海勝子氏（昭和一〇年生まれ）夫妻は以下のように語る。

カメの卵は大騒津で採った。小学校のころ、大騒津に二、三軒家があった。昭和一一、二年ごろ。そこで百姓しよった。カメが上がると、足跡が付いて分かるから、小学校に持ってきていた。もらって食べたことがある。うまくなかった。ここから採りに行くことはなかったと思う。勝子氏は、ミカンをちぎりに行ったり、真珠などを手伝っていた家でカメの卵をもらって食べた。おいしくなかった。炊いて食べた。カメの卵は売ることはなかったと思う。

畑野浦の冨高晃氏が語ったことと同じ内容が確認できた。尾浦の人にとっても、大騒津は集落から離れた場所であるため、積極的に卵を採りに行くことはなかったという。大騒津も尾浦の一部であり、昭和一〇年代までは大騒津に二、三軒の家があった。[50] その人たちが採った卵をもらう程度であったようである。

鳴海吉三郎氏（昭和三年生まれ）はカメの食用についても語ってくれた。

カメを食べる話は聞いたことがない。宮崎は食べた。自分は奄美に出稼ぎに行った。湯湾（筆者注：宇検村）

の上のトンネルの工事に行った。漁師は捕ってくると、浜に集まって、カメをさばいて、甲羅まで小割りに切って分配した。見たことがある。自分は食べなかった。

宮崎での食用のことは知っており、自身が出稼ぎに行った先の奄美大島で食用にしているのを見ている。[51] しかし、尾浦では食べたことはないという。

畑野浦（尾浦）の山田朝子氏（昭和二七年生まれ）は以下のように語る。

カメの卵を食べたことがある。親戚の家で食べた。ゆでてもやわらかい。おいしくなかった。親戚の家でたまたま一回だけ食べた。しゅっちゅう食べない。卵を採りに行くことはなかった。

尾浦の人たちは、昭和四〇年ごろまでは、カメの卵を食べる機会はあったようである。ただし、日常的なものではなかった。薬用としての意味合いもなかったようである。

旧蒲江町の北隣の旧米水津村でも聞き取りをおこなった。佐伯市米水津宮野浦の濱田平士氏（昭和二年生まれ）は、先述したように、子どものころ、間越においてウミガメの産卵を見ることがあった。しかし、卵は食べたことがないという。また、以下のように語る。

漁師は捕って食うことはなかった。この近所では食うことは聞かない。

カメの肉も卵も食べなかったということである。濱田氏がカメの産卵を見た佐伯市米水津浦代浦（間越）でも聞

き取りをおこなった。間越の成松多哲氏（昭和一〇年生まれ）は以下のように語る。

カメを食べるとこがあるらしいけど、カメは食べたことない。逃がしてやる。この先に芳ヶ浦がある。当時は五軒あった。今は一軒。米水津の端っこ。ここの人がカメを食べたという話を聞いた。鶴見という姓。漂流して流れ着いた人ではないかという。顔つきが琉球の人に似ている人が多かった。

卵も食べたことはない。よその人が掘っていた。炭焼きがあったので、炭焼きに来た人が掘っていた。蒲江の楠本とかから来ていた。ここの山はウバメガシやから備長炭のいいのができる。その人たちがたまに卵を掘っていた。食べたんじゃろうけど、よう分からん。珍しかったから掘ったんだろう。蒲江も波当津などに砂浜はある。

成松氏によると、鶴見半島先端付近の芳ヶ浦においてウミガメを食べたことがあったという。定期的に食用にしていたのか、一時的に食用にしたのか、ということについては不明である。今回はこれ以上確認できなかった。しかし、半島の先端付近や離島などでは集落の比較的近い場所にカメが産卵することが多く、そうした集落ではカメを捕獲していたという事例は多い。[52] 間越の場合は、集落の近くでウミガメが産卵していたにもかかわらず、カメの肉や卵を食べることはなかったという。地元のものではなく、蒲江から炭焼きに来ていた人たちが食べることがあったようである。旧米水津村でも、ウミガメの食用習俗は存在したようであるが、旧蒲江町ほど顕著ではなかったように思われる。

c　臼杵市以北の事例

七章で取り上げるウミガメの供養習俗が顕著にみられる臼杵市においても、食用習俗について聞き取りした。臼杵市中津浦の板井覚氏（昭和一一年生まれ）は、「カメを食べたことは聞かん。」という。中津浦の平松豊彦氏（昭和一九年生まれ）は以下のように語る。

高知の人は、カメが捕れると、二・三人が集まって、このカメを食べようと話し出す。遠洋に乗っていたので、高知の人たちと一緒に乗っていたことがある。牛肉よりうまいと聞いたが、食べようとは思わなかった。豊彦氏はお神酒をかけて逃がしてやった。高知の人は食べるものがないので、カメを食べるのだろう。この辺りは、食べるものに苦労することはなかった。

臼杵市ではカメの肉も卵も食用にする習俗を確認できなかった。高知県などの漁師と一緒に漁をした経験がある方は、カメを食べる習俗について知っている。しかし、臼杵市では食べる人はいなかったという。

大分市や日出町においても、ウミガメの肉や卵の食用習俗についてはまったく確認できなかった。

五　鑑賞・剥製

a　観賞用子ガメの販売

昭和五二年（一九七七）の『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』では、「アカウミガメの稚ガメを観光土産加工品として加工販売、あるいは愛玩用としてペット販売を行っている現状もある」と述べている〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。これについては詳細な聞き取りをおこなわなかったが、宮崎市の青島神社参道に

おいて、子ガメをたらいに入れて販売していることがあったという。[53] 青島での子ガメ販売がいつごろまであったのかは不明であるが、昭和五二年の報告書に記載があるため、昭和五〇年ごろにも子ガメの販売はあったようである。子ガメを食用にした事例は聞かないため、観賞用であったと思われる。このような事例は全国的にも珍しい。一章一節fで紹介したように、昭和五〇年ごろには、県外の業者がからんで、県外に子ガメを販売することもあったようである。

b　剥製

昭和五〇年ごろには、宮崎市の青島の土産物屋でウミガメの剥製が売られていた（『西日本新聞』昭和五〇年五月一〇日）。いつまで売っていたのかは不明である。

佐伯市米水津宮野浦の濱田平士氏（昭和二年生まれ）の家には、ウミガメの剥製が二つある（写真38・39）。ひとつはタイマイ、ひとつはアオウミガメと思われる。濱田氏は以下のように語る。

四〇年ぐらい前か、定置にタイマイが入った。生きていた。持ってきてくれた。佐伯に剥製屋があった。剥製

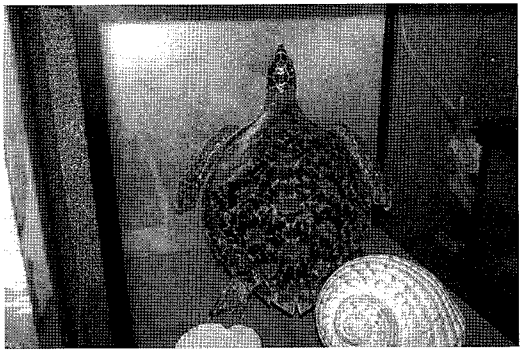


写真38　濱田平士氏宅のタイマイの剥製（2015年8月撮影）

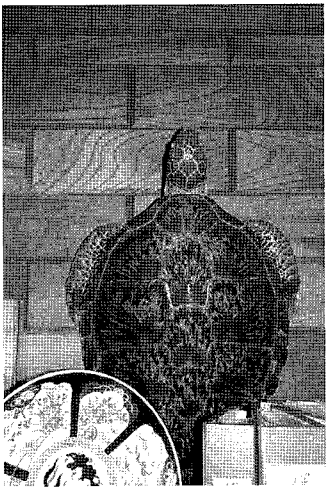


写真39　濱田平士氏宅のアオウミガメの剥製（2015年8月撮影）

にして、家に置いている。もうひとつの大きなカメは剥製屋に売っていた（アオウミガメ）。それを買ってきた。今は売っていない。

宮崎県、大分県を通じて、これ以外にウミガメの剥製を飾る習俗を確認することはできなかった。

c　薬屋の看板

臼杵市臼杵のかめや薬局では、店の入り口のショーケースに大きなウミガメの甲羅が飾ってある（写真40）。この店は、明治一八年（一八八五）創業という。かめや薬局の久保田修太郎氏によると、昔からカメの甲羅はいくつかあったという。この甲羅がいつから、どのような経緯で飾られるようになったのかは不明である。昭和五九年（一九八四）に書かれた村上あや氏の文章にも、「「亀屋」は古い生薬屋で、大きな亀の甲を店先に吊してあるのが目印」と記されている〔村上一九八四b〕。筆者は斉藤行雄

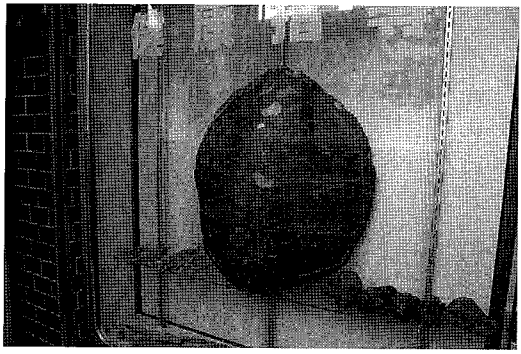


写真40　「かめ屋」のウミガメの甲羅（2005年3月撮影）

写真41　「かめ屋」のウミガメの甲羅（2015年11月撮影）

氏の案内で平成一七年（二〇〇五）に訪れた。平成二七年（二〇一五）一一月にも店の前を通ったところ、店舗が改装されていた。ウミガメの甲羅は新しい店舗でも飾られていた（写真41）。甲羅には穴が開いている。銛で突いて捕獲する際にできた穴のように思われる。このような事例はきわめて珍しいが、臼杵の「かめ屋」だけの風習というわけではなかった。薬屋にウミガメの甲羅を飾ることは、享和三年（一八〇三）に刊行された小野蘭山の『本草綱目啓蒙』では、「蠵亀　ウミガメ」という項目に「京師薬舗ニハコノ全甲ヲ用テ看板トス」と記されており、江戸時代の京都では薬屋の看板としてウミガメの甲羅が用いられていたことがうかがえる〔杉本　一九七四〕。

## 六　食の禁忌・報恩伝承

宮崎県では、ウミガメの肉・卵の食習俗に対する禁忌の報告は限られている。宮崎県日南市風田の浜では、ウミガメを捕ること食べることを禁じていたという。三章で述べたように、豊玉姫がカメに乗って上陸したという言い伝えがあるからのようである。ただし、戦時中の食糧難の時期には、アカウミガメの卵を食べて飢えをしのいだという〔日南市産業活性化協議会　二〇一五〕。

このほか、宮崎市青島に隣接した漁村である折生迫でもウミガメを食べないという（『西日本新聞』昭和五〇年五月四日）。当時の漁協組合長の胡元新蔵氏は、「「ウミガメを大事にすれば、自分もやすやすと命を失うこともない」という信仰に似た気持ちの表れ」と語っている。折生迫の鈴木久三郎氏は、ウミガメについて以下のようなことを語っている（『西日本新聞』昭和五〇年五月四日）。

戦前、二一歳のころ、カツオ釣りに雇われて台湾沖へ漁に行った。しけにあって船が沈み、二六人の乗組員のうち助かったのは八人だけだった。子どものころ、浜に産んだウミガメの卵を、よく自分の家の庭に埋めなお

し、子ガメを育てて海に帰していた。網にかかったウミガメを放してやったこともある。きっとそのおかげで自分は助かった。（筆者要約）

ウミガメにつかまって助かったという語りではない。ただし、ウミガメを助けたことがあったために、遭難したときに助かった、ウミガメのおかげである、という語りは、ウミガメの報恩説話ということができる〔藤井　二〇一二c〕。

## 七　放流習俗

### 1　宮崎県の事例

#### a　文献などにみえる放流習俗

宮崎県では、網に入ったウミガメに酒を飲ませて海に放すことがあった。『暖地の動物学』には、「県下の漁場にて海亀が捕獲された時には海神の使ひ者とたたへ、酒を呑ませて海に返へす習である。」という記述がある〔中島・清水　一九四八〕。

根岸幹雄氏は、漁師の網に入ったウミガメに、「漁師は酒を飲ませて、再び海に放してやる習慣がある」と述べたうえで、宮崎市青島の事例を紹介している〔根岸　一九七九〕。捕えたウミガメをしばらく飼育し、夏の終わりに浦島太郎の人形をカメの背中に取り付け、カメに酒を飲ませて、多くの人の見送りで、海に放す習慣が毎年おこなわれているという[54]。この点について、宮崎市田吉（松崎）出身の前田博仁氏（昭和一七年生まれ）にうかがうと、青島の事例は「こどものくに」の行事であるということであった。「こどものくに」は、昭和一四年（一九三九）、青島に開園した遊園地である。前田氏によると、この行事はかなり古くからおこなわれており、マスコミに

も取り上げられたことがあるという。[55]

昭和四〇年代の新聞記事にも、ウミガメに酒を飲ませて海に帰すということが取り上げられている。『宮崎日日新聞』昭和四七年（一九七二）六月二三日には、「捕えたカメを再び海へ　別れにしょうちゅう」というタイトルで、以下のようなことが書かれている。

日南市梅ヶ浜において、仕掛け網に一五〇kgもの大ガメがかかった。網を仕掛けた地元の会社員は、カメはめったに捕れないからと、一六〇個の卵をすべて掘り上げて持ち帰り、友人と山分けして食べた。三日間、自宅で飼っていたが、カメが弱ってきたので、焼酎を飲ませて海へ帰した。（筆者要約）

この記事では、ウミガメを放した会社員を「現代浦島太郎」として紹介している。また、『宮崎日日新聞』（日南・串間版）昭和四九年（一九七四）六月一九日には、以下のようなことが出ている。

南郷町後浜海岸では、近年、産卵が少なくなっていたところ、珍しく一匹の大ガメが産卵。体が弱っていたため、近くの老人が一週間保護し、再到来を願って焼酎を飲ませて海へ帰した。（筆者要約）

新聞記事にはまだ同様の内容はあるかもしれないが、今回見出したのは以上の二件であった。ついで、聞き取り調査において確認したことを紹介してみたい。

b　宮崎市の事例

宮崎市田吉（松崎）出身の前田博仁氏（昭和一七年生まれ）は、以下のようなことも語った。

カメに焼酎を飲ませて逃がす、という話を聞いた。地曳にかかったのか。

前田氏は実際に見ているわけではないが、田吉（松崎）の言い伝えとして聞いている。このように、周辺の漁民は、カメに酒を飲ませて放していたようであるが、浦島太郎を取り付けて放すのは「こどものくに」の行事として特別なイベントであったと思われる。このほか、赤江地区や檍地区の方々からは、ウミガメに酒を飲ませて放すという話は聞くことができなかった。

宮崎市住吉地区の島之内出身の斉田健氏（昭和三年生まれ）は、ウミガメを放すところを何度も見たことがあるという。[56]

地引き網にウミガメがかかると一升の酒を無理矢理飲ませていた。ウミガメが網にかかると暴れて網が破れ、魚が逃げてしまう。網が破られると大損害になる。ウミガメに対して、「網にもうかかるなよ。もう近寄るなよ」という戒めだった。一升瓶をさかさにして飲ませた。苦しかっただろうと思う。今から考えると残酷だった。地引き網にウミガメがかかると一升瓶の酒を買いに走る人がいた。カメは大事にしよった。焼酎ではなく酒だった。放すのを見たのは一回か二回ではない。カメは万年というので、大事にしろよ、と聞いていた。

四章で述べたように、斉田氏の父親は塩路の地曳網に参加しており、斉田氏も浜までついて行くことがあったた

めに、ウミガメに酒を飲ませて放流する場面を何度も見ることがあったようである。斉田氏父子はカメの卵を採ることはあったが、カメは大事にしろと聞いていたという。

c　新富町の事例

新富町においても、類似の事例を聞いた。新富町日置（野中）の出口弘敏氏（昭和九年生まれ）は、以下のように語る。

酒を飲ませて放すという話を聞いたけど、見たことはない。

新富町日置（日之出）の梶原憲明氏（昭和二二年生まれ）は、以下のように語る。

地曳網でも、魚もあるし、カメはいらんというときに、カメの口を開けて焼酎を飲ませて放した。

海岸近くに暮らしてきた梶原氏の話は具体的である。日置の地曳網では、四章で述べたように、ウミガメを食べることもあった。しかし、いつも食べるわけではなく、いらないときには酒を飲ませて放していたということである。

d　高鍋町の事例

高鍋町蚊口出身の大木隆幸氏（昭和一九年生まれ）は、以下のように語る。

子どものころ、カメを捕まえて、酒を飲ませて放流するのを見た。上がってきたのを捕まえていた。焼酎を飲ませていた。蚊口の海岸は石なので、地曳はできない。

大木氏は実際にカメに酒を飲ませて放流するところを見ている。この場合は、網にかかったカメではなく、上陸してきたカメを捕えて飲ませたということである。

以上のように、宮崎県では、ウミガメが地曳網に入った場合に酒を飲ませて放すことがあった。上陸した際に捕えて酒を飲ませることもあった。ウミガメを食べる地域でも、カメを食べないときには酒を飲ませて放すことがあった。宮崎県の場合は、カメに焼酎を飲ませたという場合が多いようである。

2　大分県の事例

a　文献などにみえる放流習俗

大分県でもウミガメに酒を飲ませて海に放すという習俗はみられる。佐伯市蒲江（旧蒲江町）では以下のような報告がある〔蒲江町史編さん委員会　二〇〇五〕。

漁師の話しでは「亀は良く漁の網にかかるが再び海に返す。お酒を少々飲ませ次の大漁を祈願し海に帰す。酒を飲ませ海に放すと、豊漁がある」という。

佐伯市米水津（旧米水津村）でも以下のような報告がある〔米水津村誌編さん委員会　一九九〇〕。

最近の事例では、昭和六十二年七月に、宮野浦の漁船の網にあがり、関係者が一時水槽で保護したが、潮時を見て清酒を与え、豊漁を祈って海に送り帰している。米水津村を含む県南海岸などでは、アカウミガメを海神の使いと信じ、漁業、航海などの安全祈願行事が習慣的に伝承されている。

b　佐伯市の事例

筆者は、佐伯市の現地調査においてこの事例の確認をおこなった。佐伯市蒲江蒲江浦出身の清家隆仁氏（昭和二九年生まれ）は以下のように語る。

蒲江では大敷にカメが入ると酒を飲ませて放していた。連れてきて、港に係留してあるのを見た。実際に酒を飲ませて放すところは見ていない。子どものころに聞いた。

蒲江西野浦の久寿米木大作氏（昭和一二年生まれ）は以下のように語る。

酒を飲ませて放すと聞いたことがある。縁起がいいという。珍しいので入ったら縁起がいい。

蒲江畑野浦の冨高晃氏（昭和二年生まれ）はウミガメを放したことがあるという。

カメは網にかかると酒を飲ませて海に放した。冨高氏はキンチャク網をしていたので、何回もカメに酒を飲ませて放したことがある。昭和二七、八年ごろだった。キンチャクにカメがかかると、ひっくり返して酒を飲ませ

た。ひっくり返すと涙を出した。酒を飲ませると喜ぶで、というが、カメは苦しいと思う。飲ませると一升ぐらい飲む。放すと、礼を言うかなんか知らんが、一〇メートルぐらい行くと後ろを向く。畑野浦の人はカメを大事にした。とくにいわれは知らない。

実際にウミガメに酒を飲ませたことのある方の話であるため、具体的な内容となっている。カメが礼を言う、という表現が特徴的である。

蒲江畑野浦（尾浦）の鳴海吉三郎氏（昭和三年生まれ）は以下のように語る。

カメに酒を飲ませて放す、という話はあった。見たことはない。

また、蒲江畑野浦（尾浦）の山田朝子氏（昭和二七年生まれ）も以下のように語る。

カメは網にかかると酒を飲ませて海に帰すという話があった。カメは涙を流して喜んだという。縁起がいいという。酒を飲ませて放すところは見たことはない。

米水津宮野浦の濱田平士氏（昭和二年生まれ）は以下のように語る。

カメは信仰の対象にしよった。定置とか、沖合でもイワシ・アジ・サバを捕るキンチャク網にカメが入る。カメが泳ぎこんでくる。大きなカメが入ることがある。カメはじゃまになる。カメが入ると船に積まなしょうがな

い。沖で逃がしたり、珍しいので持ってくる。口をむりやり開けて酒を飲ませた。子どもが乗ってみたりした。ペンキで何丸とか、船の名前を書いた。漁頼みますで、ということで逃がした。放すと、不思議に海に方にはって行く。

濱田氏の話も具体的である。カメを喜ぶという感覚だけではなく、漁の障害になるという感覚もあったことが分かる。甲羅に船名などを書いて放したという点が特徴的である。

米水津浦代浦（間越）の成松多哲氏（昭和一〇年生まれ）は以下のように語る。

自分が中学を卒業したのは昭和二五年。そのあと、二六年か二七年に定置ができた。産卵を終えて出ていくカメが定置に入りよった。カメは龍宮の使いじゃ、というて、放して網の外に逃がしてやった。お神酒は持ってないのでやらなかった。持ってきて酒を飲ませることはなかった。吊り上げるようになっていれば、そんなこともできた。二、三人がかりで網の外に出した。

佐伯市の中でも、米水津の事例は、カメを海の神の使いというなど、信仰的な意味合いが蒲江よりも強いように思われる。

c　臼杵市の事例

本田氏・斉藤氏の報告には、臼杵市中津浦の平松円七氏の話として、磯建網の中にかかったウミガメが死んでしまったので供養塔を建てたことが紹介されている。このとき、平松氏は、カメが生きていれば酒を飲ませて沖に放

してやると語っている〔本田・斉藤一九八三〕。臼杵市大浜でも、ウミガメが網にかかると、縁起物として海に返す、という報告がある〔臼杵市史編さん室　一九九二〕。ここには、酒を飲ませる、という内容がみられない。

現地調査においてこの習俗に関する確認をおこなった。臼杵市中津浦の板井覚氏（昭和一一年生まれ）は以下のように語る。

カメが生きとったら酒を飲ませて放すと漁があると、親たちに聞いた。戦前には、生きたカメに酒を飲ませて放したことがある。

臼杵市中津浦の平松豊彦氏（昭和一九年生まれ）は以下のように語る。

カメが生きていれば、お神酒を飲ませて戻すのが慣わし。

臼杵市鳴川の三重野利幸氏（昭和四年生まれ）は、以下のようなことを語った。

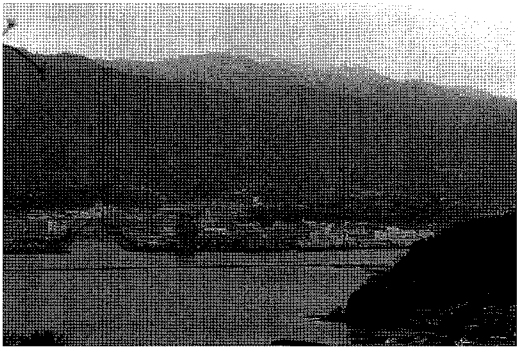


写真 42　臼杵の町（2005 年 3 月撮影）

写真 43　臼杵湾（2005 年 3 月撮影）

いまだに呑み助は「カメじゃ」といいう。

他地域では、ウミガメは酒が好きという前提で、酒飲みのことをカメと呼ぶことが多い。つまり、臼杵市でもカメは酒が好きという認識があったものと思われる。

d　大分市の事例

佐賀関では、江戸から明治時代の文書に、度々漁師とカメの話が出てくるという。たとえば、下浦地区の海岸に迷い込んだ大ガメに酒を飲ませると、四、五人を乗せて海に入って行ったという内容が書かれているという。[57]

大分市浜町の清水進正氏も以下のように語る。

カメは生きていたら酒を飲ませて放す。

以上のように、大分市においても、ウミガメに酒を飲ませて放すことが確認できた。とくに、佐賀関では江戸時代にもおこなっていた可能性がある。

e　日出町の事例

日出町の阿部大蔵氏（昭和一〇年生まれ）は以下のように語る。

若いころの経験で、のべなわを商売にしていたとき。針がカメの手にかかっていたことがあった。ものすごい

大きなカメだった。漁の途中だったので、父が、カメに「手を出せ、はずしてやるから」と言うと、カメは手をぽんと出した。次の日だったか、漁の現場に酒を一合持って行って、「すまんじゃったのー」ということで、近辺に撒きよった。カメが近くをぷかぷか泳いでいた。父は、カメがお礼を言っているといっていた。自分は中学を出ていたから、一五、六歳だった。

阿部氏は、八章で述べるように、近年、死んだウミガメの供養を提案した方である。阿部氏が若いころの体験として、父親が海上のカメに酒を注いだという。これは、漁でけがをさせたカメに対するお詫びという気持ちがあったようである。

f　国東市の事例

国東半島の北五kmに位置する姫島でもウミガメのことが報告されている。これは、昭和五二年（一九七七）の調査にもとづいて漁民伝承をまとめた報告の中に出ている〔河野　一九八一〕。

出漁の途中、亀に出会うは凶。その反面、漁師は亀を大切にし、網や針にかかった亀には酒を飲ませて海に帰す。

姫島村の事例は、カメに出会うと凶であるとして、酒を飲ませて海に帰すというものである。

以上のように、大分県では南部の佐伯市から北部の姫島村まで、広い範囲において、ウミガメに酒を飲ませて放すという習俗が分布している。海の神の使いという感覚があり、甲羅に船名を書いて放す、漁の際にけがをさせた

カメに酒をふるまう、など、信仰的な意味合いが、宮崎県よりも強いようである。姫島村のように、カメに出会うことを凶というのは、丁重にもてなさなければ、反転してわざわいをもたらす存在であることを示しているようである。

## 八　供養習俗

### 1　宮崎県の事例

宮崎県においては、ウミガメの供養塔や墓・祠などはまったく確認されていない。竹下完氏も、他県におけるカメ塚などのことは知っているものの、宮崎県ではウミガメを供養する墓などは見たことがないという。筆者の調査においても確認することはできなかった。根岸幹雄氏は、昭和九年（一九三四）九月ごろ、台風の来襲で死んでしまった子ガメを標本として持ち帰るとともに、何匹かを砂浜に埋葬した、という〔根岸　一九七九〕。この程度の埋葬は、海岸部においてしばしばおこなわれるものであり、地域の習俗とは言い難いと判断し、供養事例には数えなかった。

### 2　大分県の事例

#### a　佐伯市の事例

大分県では臼杵市のウミガメの供養塔が報告されている。比較検討するために、佐伯市においても現地調査で確認をおこなった。旧蒲江町・旧米水津村において聞き取りをおこなったが、ウミガメの供養塔については見出すことはできなかったが、以下のようなことを聞いた。蒲江畑野浦の冨高丈夫氏（昭和一三年生まれ）は、各浦に魚鱗供養塔があり、それがすべてかねているのではないか、という。また、米水津宮野浦の濱田平士氏（昭和二年生ま

れ）は以下のように語る。

カメの墓は知らない。クジラの墓も知らない。魚鱗供養塔は浦々にある。各浦の寺や墓にある。宮野浦にもある。

このように、旧蒲江町・旧米水津村では、浦ごとに魚鱗供養塔が存在していることが特徴的である。旧蒲江町・旧米水津村の魚類の供養塔については、『蒲江町史』、『米水津村史』のほか、大分県の高校教員である長野浩典氏の著書などで紹介されているが〔蒲江町教育委員会　一九七七、米水津村誌編さん委員会　一九九〇、長野　二〇一五〕、聞き取り調査においても、文献においても、佐伯市ではウミガメに関する供養習俗は確認できなかった。なお、この地域の魚類供養塔には、江戸時代のものが多いことも特徴である。古いものとしては、米水津宮野浦・迎接庵の享保五年（一七二〇）の「江河魚鱗離苦得楽塔」、蒲江蒲江浦・東光寺の享保一七年（一七三二）の「江海魚鱗離苦得楽塔」などがある（写真44）。現地調査で聞いたように、これらの魚類供養塔が、ウミガメの供養も兼ねてきたため、とくにウミガメの供養塔を建立しなかった、という可能性もある。

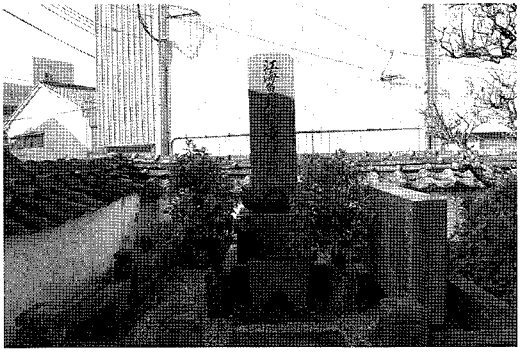


写真44　東光寺の昭和60年（1985）再建の「江海魚鱗離苦得楽塔」（2015年11月撮影）

b　臼杵市の事例

一方、臼杵市にはウミガメの供養塔に関する報告が複数ある。筆者が確認した限りでは、本田健二氏・斉藤行雄

表２　大分県のウミガメ供養習俗

| 番号 | 所在地 | 埋葬・建立場所 | 呼称 | 墓塔表題 | 形態 | 地上高cm | 埋葬・建立時期 | ウミガメの発見状態 | 埋葬・祭祀者 | ウミガメの種類 | 現状 | 文献 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 大分県臼杵市柿之浦 | 海岸沿いの道路脇 | | 亀墓 | 石碑 | 60 | 明治30年代10月10日建立 | | | | 現存。 | 本田　1983、小島　2003・2005、田口　2011 | 2005年現地調査。 |
| 2 | 大分県臼杵市鳴川 | 山頂 | オカメサマ | 御亀大明神霊 | 石碑 | 154 | 大正10年（1921）ごろ | | 地区民 | | 現存。漁民の信仰があった。現在は再建して個人が祭祀。 | 本田　1983、小島　2003・2005、田口　2011 | 2005年現地調査。 |
| 3 | 大分県臼杵市祇園（現在地は末広黒丸） | 工場の敷地（移転後も工場の敷地） | | 霊亀之塔 | 石碑 | 87 | 明治32年（1899） | 臼杵川に入ってきたカメが死んだ。 | 渡邊甚七（工場の社長） | | 現存。 | 本田　1983、小島　2003・2005、田口　2011 | 2005年現地調査。 |
| 4 | 大分県臼杵市中津浦 | 個人の家の敷地 | カメサン | 亀徳霊神 | 自然石、祠→石碑 | 150ぐらい→78 | 昭和23、4年（1948～49）→平成2年（1990）11月再建 | ベッコウカメが定置網にかかる。 | 平松豊彦の父親（漁民、網元） | タイマイ | 現存。再建して祭祀。 | | 2005年現地調査。 |
| 5 | 大分県臼杵市中津浦 | 恵比須神社境内 | | 亀之墓 | 石碑（台座はカメ形） | 69 | 昭和43年（1968）5月 | ベッコウカメが建網にかかる。 | 平松円七（漁民） | | 現存。 | 本田　1983、松崎　2004、小島　2003・2005、宮脇　2008、田口　2011、長野　2015 | 2005年現地調査。 |
| | | | | 亀之墓 | 石碑 | 54 | 昭和61年（1986）9月建立 | 7月ごろエビの建網にかかる。小さいカメ。 | 板井覚（漁民） | | 現存。個人で祭祀。 | 松崎　2004、宮脇　2008、田口　2011、長野　2015 | |

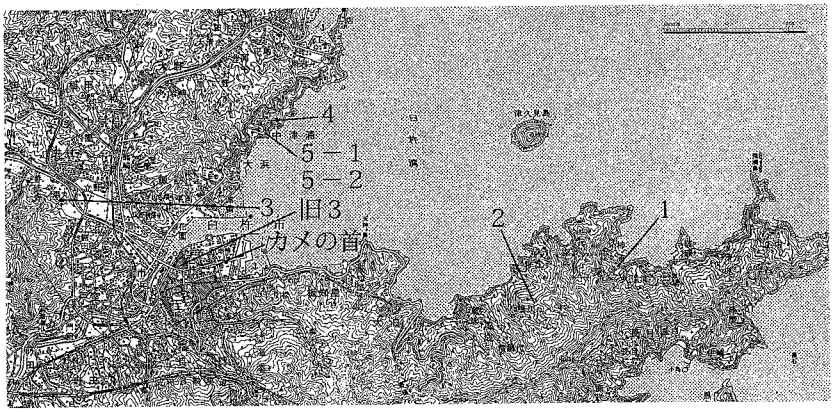
| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6 | 大分県大分市佐賀関 | 早吸日女神社境内 | | 大亀碑 | 石碑（台座はカメ形） | 330 | 昭和42年（1967）4月14日 | | 幸伝三郎（漁民）、小野清次（早吸日女神社宮司） | | 現存。 | | 2005年現地調査。 |
| 7 | 大分県大分市浜町 | 恵美須神社境内 | カメノオハカ | 万寿瑞亀之墓 | 石碑 | 169.5 | 昭和6年（1931）5月8日 | 波打ち際にカメが流れ着いた。 | 村上彌市 高木喜平 村山三郎 | | 現存。 | 長野　2015 | 2016年現地調査。 |
| 8 | 大分県日出町 | 糸ヶ浜海浜公園 | | | | | 平成24年（2012）11月3日 | 城下海岸のまさ網にカメが入って死んでいた。 | 阿部大蔵（漁民）ほか | アオウミガメ | 埋葬・供養のみ。 | 内田桂氏、日出町農林水産課の御教示。 | 2016年現地調査。 |
| 9 | 大分県国東市国見町竹田津小高島 | 港の入口 | | 海亀神社 | 石碑 | | 明治時代ごろ | 漂着したウミガメを祀ったもの。 | | | 現存。 | 内田桂氏、国東市教育委員会の御教示。国見町史編集委員会　1993 | |

氏の報告が最も早い[58]。本田氏・斉藤氏は、臼杵市内の供養塔について、魚類などとともに、祇園西・中津浦・鳴川・柿之浦にあるウミガメの供養塔を報告している〔本田・斉藤　一九八三〕。その後、『臼杵市史　下』では、第五章「町・在・浦の生産と交易」第一節「野と浦の生業」一〇「海の信仰と禁忌」1「禁忌としきたり」において以下のような報告がある〔臼杵市史編さん室　一九九一〕。

亀はマグロ延縄や網にかかりやすく、縁起物で幸せをもたらすというので、食べずに海に返してやる。網や延縄にかかって死んだ亀は墓を建てて供養する（大浜）。

また、民俗学者の松崎憲三氏は、クジラの供養習俗についてまとめた論文のなかで、臼杵市にはクジラのほか、ウミガメ・アワビ・サザエ・ナマコ・魚などの供養塔が多く存在することを紹介している。このうち、中津浦の天満宮に近接する蛭子神社境内に二基の「亀之墓」があることを報告している〔松崎　一九九六〕[59]。クジラの供養塔をまとめた文献の中でも、臼杵市中津浦のカメの墓が紹介されている〔宮脇　二〇〇八〕。筆者は平成一七年（二〇〇五）三月に、カメの墓の報告をまとめた斉藤氏のご協力を得て、現地調査をおこなった。ただし、臼杵市の供養習俗については、全国規模の一覧表や日本ウミガメ協議会の機関誌において簡単に紹介しただけであった〔藤井　二〇一四a・二〇一六〕。したがって、調査内容について、本稿で詳細に報告しておくことにする。なお、臼杵市のカメの供養塔は、筆者のほか、小島孝夫氏や田口理恵氏が全国的な一覧表の中でまとめている〔小島　二〇〇三・二〇〇五、田口　二〇一一〕。

臼杵市柿之浦には明治時代に建立されたカメの墓がある。これは、本田氏・斉藤氏が報告している。本田氏・斉藤氏によると、古老の話として、産卵のために陸に上がったカメのものであるとしているが、すでに詳しいことは分からなかったという〔本田・




地図7　臼杵市のウミガメ供養塔所在（5万分の1地形図「臼杵」、国土地理院、平成14年（2002）測量）

斉藤　一九八三〕。筆者の調査でも由来については分からなかった。年代についても、摩耗が激しく、特定できなかった。港近くの道路沿いに立っており、三角形の自然石に「亀墓」と刻まれている。

・柿之浦の「亀墓」(表2No.1)(写真46)

(正面)亀墓　明治三十□年十月十□日

高さ　六〇cm

最大幅　四六cm

奥行　一二cm

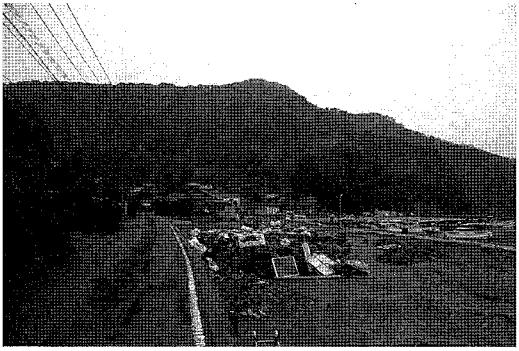


写真45　柿之浦の集落(2005年3月撮影)

写真46　柿之浦の「亀墓」(2005年3月撮影)

臼杵市鳴川には大正時代に建立されたカメの墓がある。本田氏・斉藤氏は以下のように紹介している〔本田・斉藤　一九八三〕。

大正一〇年、鳴川の浜に八〇キロほどの死んだ「大亀」が打ち上げられていた。甲羅には藻やカキがたくさん

ついていた。このカメを集落の人が担ぎ上げて現在地に埋葬し、一〇月に碑を建てた。昭和五二年の台風で破損したため、現在の碑を再建した。三重野利幸氏が祀っている（筆者要約）。

本田氏・斉藤氏の報告に紹介されている三重野利幸氏（昭和四年生まれ）を訪ね、妻の三重野君子氏（昭和六年生まれ）とともにお話をうかがった。

君子氏は、浜に上がっていたカメを、村の人たちが担いであがったと聞いた。利幸氏が知っている限りでは、三重野の家で管理し、手入れをしている。君子氏が子どものころには、突きん棒の人が、漁の神様といって、参りに来たと聞いたことがある。利幸氏の祖父が二〇代のときに建てられたものだが、とくに話は聞いていない。聞いたかもし

写真 47 「御亀大明神霊」のある山から集落を望む（2005 年 3 月撮影）

写真 49 鳴川の「御亀大明神霊」(2005 年 3 月撮影)

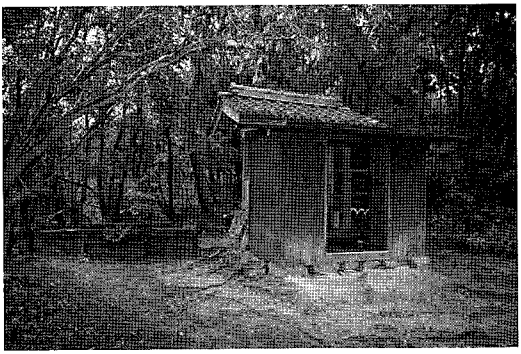


写真 48 「御亀大明神霊」と地蔵（2005 年 3 月撮影）

れないが、関心がなかったので忘れてしまった。

何年か前に、台風か地震で倒れて石碑が壊れた。父親の姉は信仰熱心であった。その人の助言もあって、そっくりの石碑を建て直した。粗末にしてはいかんということで。石はハライガワで買うてきた。石は船で運んだ。石碑の大きさ、形、字体までそっくりに作ったが、大正十何年か分からなかったので、十の下を一字あけて刻んでいる。分かったら入れようと思った。

オカメサマと呼んでいる。五・六年前だったら知った人もいた。分水嶺の頂に祀っている。見晴らしのいいところということで祀ったのではないか。炭焼きをしていたころは、ここから海が見えた。オカメサマは地蔵の隣に祀っている。この地蔵はイボにご利益があるという。立ったのは地蔵さんが先か。この場所には、薪を取りに行ったりした。かつては、年に二回道をきれいにした。毎月二四日におばあさんたちが集まって、心経をあげている。主体は地蔵さんの祭り。ついでに、オカメサマに手をあわせて花をあげてくれる。

・鳴川の「御亀大明神霊」(表2No.2)[60](写真49)

(正面) 御亀大明神霊　大正十□年　四月十五日

(裏面) 昭　五十二年八月再建

本体　高さ　七〇cm

幅　二八cm

奥行　一五cm

台座1(上) 高さ　一一cm

台座2　高さ　一二cm

台座3　高さ　一一cm
台座4（下）高さ　五〇cm
全体の地上高　一五四cm

鳴川の事例は、海岸に漂着したカメを祀ったものという。現在は三重野氏の家で管理しているというが、もとは集落の人たちが共同で祀ったもののようである。集落背後の山の頂上付近に地蔵とともに祀られているため、埋葬には相当の手間がかかったと思われる。鳴川は突きん棒船に雇われて漁業に従事する人もいたが、米・麦・芋を作り、山仕事もする半農半漁の集落であった。三重野利幸氏の父親は、炭焼きをし、炭や薪を大八に積んで町に売りに行っていたという。したがって、カメは漁の守り神というよりは、集落の守り神という性格が強いように思われる。

本田氏・斉藤氏の報告には、臼杵市祇園西の富士甚醤油の工場の敷地内にカメの墓があると記されている。本田氏・斉藤氏は、調査当時の会長・渡辺諒助氏の話として以下のようなことを紹介している〔本田・斉藤　一九八三〕。

臼杵川に迷い込んだ「大亀」を見つけて捕えたが、弱っていたために間もなく死んだ。このカメの供養のため、当時社長であった渡辺甚七が塔を建てた（筆者要約）。

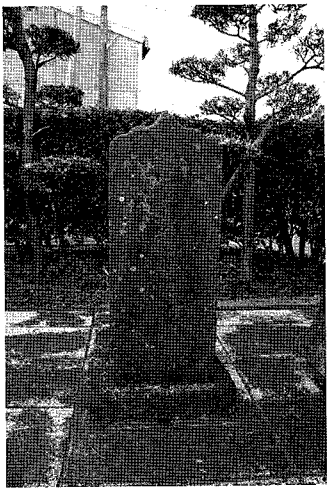


写真50　富士甚醤油の工場の「霊亀之塔」(2005年3月撮影)

富士甚醤油は明治一六年（一八八三）創業の会社である。筆者は平成一七年（二〇〇五）三月に、斉藤氏の御教示により、富士甚醤油の工場を訪ねた。このときは、もとの祇園ではなく、臼杵市郊外の末広黒丸に工場が移転していた。カメの墓は、移転した工場の敷地内に移されていた。カメの墓に刻まれた年代によると、明治三二年（一八九九）の建立である。年代を確認できるものとしては、臼杵市で最古のカメの墓ということができる。

・富士甚醤油の工場の「霊亀之塔」（表2No．3）（写真50）

（正面）霊亀之塔

（裏面）明治三十二年　渡邊甚七建之

本体　高さ　七九cm
　　幅　三〇cm
　　奥行　一九cm
台座　高さ　八cm
全体の地上高　八七cm

本田氏・斉藤氏の報告には、臼杵市中津浦の恵比須神社境内にカメの墓があると出ている〔本田・斉藤　一九八三〕。ここでは、平松円七氏の話とし

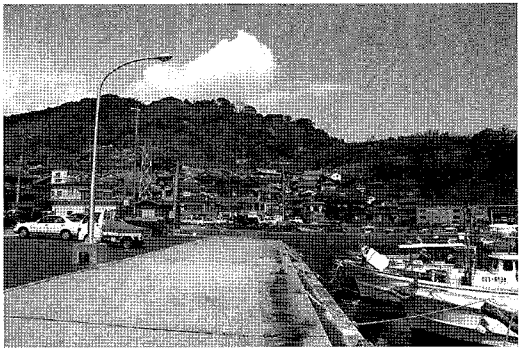


写真51　中津浦の集落（2005年3月撮影）

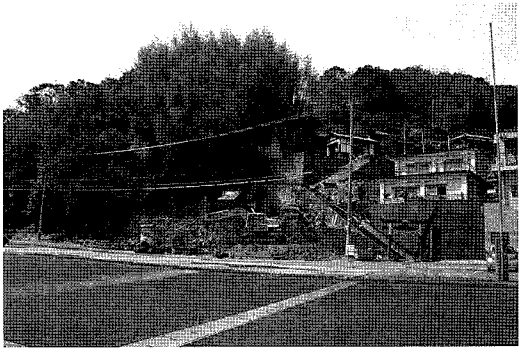


写真52　恵比須神社（2005年3月撮影）

て、以下のような内容が紹介されている。

大分市少年自然の家付近の磯建網の中に、四・五〇センチのタイマイがかかった。カメが生きていれば酒を飲ませて沖に放してやるが、死んでしまったので供養のために現在地に埋葬した（筆者要約）。

このカメの墓は、松崎氏、宮脇氏も報告しているが、クジラなどの供養塔と並んでカメの墓がある、という程度の内容となっている〔松崎　一九九六、宮脇　二〇〇八〕。筆者は、本田氏・斉藤氏の報告、および松崎氏の報告をもとに、平成一七年（二〇〇五）三月に現地調査をおこなった。「平松円七」と刻まれたカメの墓は、恵比須神社境内の本殿右側にあった。「亀之墓」と刻まれた石碑がカメ型石造物の上に載っている。碑文銘や大きさは以下の通りである。

・中津浦の恵比須神社境内の「亀之墓」（表2No．5－1）（写真53）

（正面）亀之墓

（右側面）平松円七建之

（左側面）昭和四十三年五月吉日

本体　高さ　四〇cm

幅　一七cm

奥行　一七cm

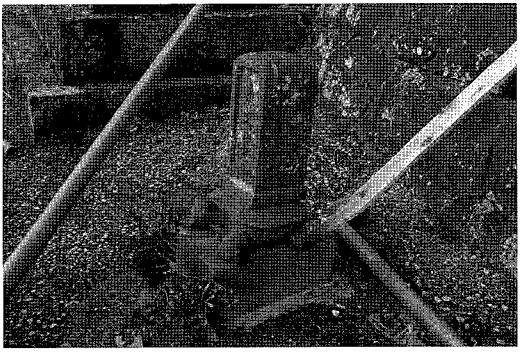


写真53　中津浦の恵比須神社境内の「亀之墓」（2005年3月撮影）

カメ　高さ　一四cm
台座　高さ　一五cm
全体の地上高　六九cm

本田氏・斉藤氏の報告では、中津浦におけるカメの墓は平松円七氏建立のもののみである。しかし、松崎氏や宮脇氏は、恵比須神社境内にはもうひとつカメの墓があることを報告している〔松崎　一九九六、宮脇　二〇〇八〕。こちらのカメの墓については以下の通りであった。

・中津浦の恵比須神社境内の「亀之墓」(表2No.5－2)(写真54)[61]

(正面)亀之墓
(右側面)昭和六十一年九月吉日
(左側面)板井覚建之
本体　高さ　三一cm
　　幅　一五cm
　　奥行　一一cm
台座(上)　高さ　九cm
台座(下)　高さ　一四cm
全体の地上高　五四cm

写真54　中津浦の恵比須神社境内の「亀之墓」(2005年3月撮影)

このカメの墓に刻まれている中津浦の板井覚氏（昭和一一年生まれ）を訪ねたところ、以下のような話をうかがうことができた。

エビの建網にカメがかかった。四尺ぐらいしかねー網。鉛の重しに巻かれていた。カメも息をしに海面へ上がるのだろう。それができなかったので死んでいた。自然の家の沖べた。網は夕方入れて、朝の二時ごろから上げる。カメが入ったのは七月ごろだったか。八月は網はせん。五月も寒いからせん。だから、六月、七月ごろだった。生きてれば、放してやるけど、死んでたのでいけた（埋葬した）ほうがよかろうと思って。粗末にいたらいかんということで。漁があるんでねーかなーということで。

カメがかかったのは初めてだった。たいしたカメじゃなかった。抱きまわすぐらいの小さいカメだった。両手で回せるぐらい。一人で抱えて持ってきた。あそこ（筆者注：現在の墓の場所）があいとったので埋めた。墓所はあるけど、墓所はいかんし、海のもんやけん、恵比須さまのところへ埋めた。平松がいけとる（埋葬している）ので。埋めたときは、藪だったので、いけても分からんと思ったが、区長が代わってきれいにしたため、目立つようになってしまった。目立たんでよかろうと思った。自分が元気な間は管理せなしょーねー。盆、正月のサカキも忘れたことがある。そのほかは何もせん。海に戻しておけばよかった。いらんことをしてしまったと後悔している。

石屋に頼んで、字を彫りこんでもらった。坊さん（報恩寺）を呼んで拝んでもらった。

親たちぐらいのとき、カメが網にかかっていけたことがある。覚氏が子どものころ。終戦前ぐらいか。平松豊彦氏の親が塔を建てていた。自分たちの土地にいけていた。畑かなんか。急傾斜の工事で、何年か前に上に上げた。

大浜は底曳なので、カメは入らん。中津浦は建網しかやらん。

板井氏は、自分の網にかかったカメが死んでいたために、埋葬して供養したということである。平松氏がすでに恵比須神社境内にカメを埋葬していたため、同じく恵比須神社境内を選んだという。板井氏の語りからは、カメを目立つような形で永続的に祀ることは意図していなかったことがうかがえる。板井氏以前にも、平松豊彦氏の親や平松円七氏がカメを供養したことがあったので、同じようにしたという。

板井氏から、平松豊彦氏の親もカメの塔を建てていたという情報が出てきた。この事例について、中津浦の板井秀次氏（昭和七年生まれ）に話をうかがった。

ます網（定置網）にカメがかかった。ます網は一年中やっていた。昭和三〇年ごろ。ベッコウだった。トロ箱に入れて上がった。寺を呼んで葬式した。平松豊彦氏の親だった。網元だった。いけた（埋葬した）ときはじいさんもいた。ブントクという屋号。一七・八人雇われていた。自分も雇われていた。カメは自分も担いで上がった。漁神様に祀る。漁に出るとき、そこに寄って拝んでいた。当時は、カワクチイワシを捕っていた。網元は中津浦で四・五軒あった。津久見島から内側でやっていた。

そこで、中津浦の平松豊彦氏（昭和一九年生まれ）を訪ねて話をうかがったところ、これまでの報告には記載がなかったカメの墓を発見した。

昭和二三・四年だった。父親がやっていたます網（定置網）にベッコウガメがかかった。自然の家の下、トノ

ガハエという島みたいなところがある。そこに網を張っていた。この辺りではます網といっていたが、今では定置網という。カメが入ったのは冬だったか。カメが入ったときは、四つ張はしてなかった。ます網だけだった。四つ張は、父親が兵隊から帰ってきて、昭和二二・三年ごろから始めた。

たまたまきていた祈祷師のような人が、このカメには龍神様が乗っているので、漁神様として祀れといったので、それならと家の裏に祀った。親子で来て、泊り込んでいた人もいる。でも、祀れといったのは、報恩寺かもしれない。ベッコウガメだったので、乗り子たちは金にすればいいじゃないかと言ったらしい。買い手がきていたらしい。かなりの値段がついていた。玄関先で、若い衆に抱えられて、カメの上に座らされたことを覚えている。足がやっと届くぐらいだった。近所でも評判になっていた。

人間並みの葬式をした。祠にして、大事にして祀った。海の石を祠の中に祀っていた。一メートル四・五〇センチの縦長の石だった。縦目のいった石だった。すばらしい石を祀った。どこで拾ったのかは分からない。妙見様の石と同じようなだった。字は書いてなかった。急傾斜の工事で上に上げた。工事の際に掘っても、甲羅も何もなかった。上げるときに石が割れたので、新たに石碑を建てた。今の石は石屋さんから買った。「亀徳霊神」の戒名は、埋めたときに寺からもらっていた。報恩寺は日蓮宗。三代前の和尚から戒名をもらった。

豊彦氏の妻にも話をうかがった。

呼び方は「カメさん」。今日はカメさんの日やなーとか、近所の人が、カメさんの掃除しておいたとかいう。神様を供養する日は、ショウゴク（正月、五月、九月）の一五日。カメさんもそのときに祀っている。今では、一月一〇日、三月は父親の祥月命日、五月一〇日と、寺の都合などにあわせて住職に来てもらっている。

・中津浦の平松豊彦氏宅の「亀徳霊神」（表2No．4）（写真55）

（正面）亀徳霊神
（右側面）平成二年十一月
（左側面）平松豊彦建之
本体　高さ　五五cm
　　幅　二二cm
　　奥行　二二cm
台座　高さ　二三cm
全体の地上高　七八cm

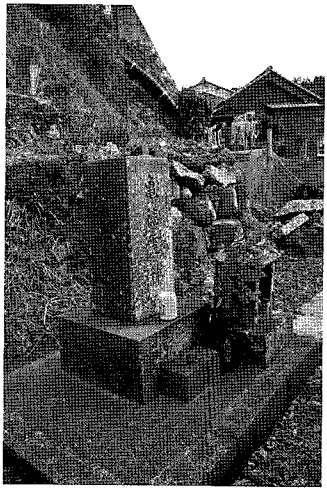


写真55　中津浦の平松豊彦氏宅の「亀徳霊神」（2005年3月撮影）

平松氏の家は、もともとは、親戚の網元のもとでマスモチをしていた。マスモチとは、親方の次で、イリコなどを枡に入れて袋に詰め替える役であった。枡はだれでも持てるものではなかったので、これを持つ人が親方の次ということであったという。そこから独立して、網元をするようになっていた。板井秀次氏が乗っていたころは、漁も盛んで、地曳、四つ張、キンチャク（巻き網）をしていた。秀次氏が乗っていたころは盛んであった。中津浦の漁はイリコが主体で、イリコは四つ張、地曳で捕っていた。しかし、昭和五一年（一九七六）ごろに網元をやめている。

平松豊彦氏夫妻や、板井秀次氏の語りから、カメの供養は、漁業が盛んな時期に、網元の家がおこなったということが分かった。また、通常のカメではなく、タイマイという珍しい種類であったということも、供養することと

関係しているようである。さらに、祈祷者のような人が祀るようにという助言を与えていることも影響しているようである。中津浦では、この平松豊彦氏のカメ供養以降に、平松円七氏、板井覚氏がカメの墓を建てたということもわかってきた。

以上のように、臼杵市には五か所に六基のウミガメ供養塔がみられる。先行研究で明らかになっているように、臼杵市にはクジラをはじめ、さまざまな海の生き物の供養塔が多い。これらの供養塔の影響を受けて、ウミガメの供養塔が建立された可能性がある。そして、ウミガメの供養自体も、ある集落やある個人がウミガメを祀り始めたことが次々と影響を与えて広がっていったということも考えられる。

c　大分市の事例

大分市佐賀関の早吸日女神社境内にもカメの石碑がある。[62] これについては、地元の新聞で紹介されている以外に報告は見ていない。[63] 平成一七年（二〇〇五）三月に現地調査をおこなった。[64] 早吸日女神社宮司から以下のようなことをうかがった。

境内に「大亀之碑」と書いた石碑を建てている。昭和三〇年代に、氏子の漁師が、見たこともないような大きなカメが海岸に打ちあがって死んでいたので、どこかへ祀りたいと神社へ持ってきた。境内にカメを放している「亀の池」があるので、その近くに、骨を納めて石碑を建てた。当時の大分県知事に字を書いてもらった。石屋さんを頼んで、カメ

写真56　早吸日女神社境内の「大亀碑」(2005年3月撮影)

の背中に石碑を建てている。佐賀関精錬所に賛助をお願いしていたが、その人のお金で建てた。当時七〇近い人だった。満州かどこかから引き上げてきて、漁師をやっていたが、専業の漁師ではなかった。その家はもうない。碑を建てただけで、当時から祀りはしていなかった。

・早吸日女神社境内の「大亀碑」(表2No. 6)(写真56)

石碑

(正面) 大亀碑

大分県知事木下郁事

本体　高さ　九二cm

幅　七一cm

奥行　七cm

カメ形石造物　高さ　三〇cm

長さ　一二一cm

台座(上)　高さ　二七cm

幅　一〇五cm

全体の地上高　約三三〇cm

碑文石碑

(正面) 昭和四十二年四月十四日

早吸日女神社宮司　小野清次
発起人　幸伝三郎　八十一才

高さ　七五cm
幅　七一cm
奥行　一三cm

長野浩典氏の『生類供養と日本人』には、大分市浜町の恵美須神社境内にある「万寿瑞亀之墓」と刻まれたカメの墓が紹介されている〔長野　二〇一五〕。長野氏は大分市内の高校教員をしており、勤務校の近くでたまたま見つけたという。筆者はこの情報を知らなかったため、全国の「ウミガメ供養塔一覧」には記載できていない〔藤井　二〇一四a〕。

浜町は別府湾に面した古い漁師町であるが、現在では漁業に従事している人はほとんどいないという。長野氏が調査した段階では、神社の総代もカメの墓に関する由来を知らなかったという。筆者は平成二八年（二〇一六）三月に現地調査をおこなった。

浜町に子どものころから住んでいる日名子和代氏（昭和五年生まれ）にうかがった。カメの墓には毎日参っているが、由来は知らないという。ただし、石碑に刻まれている人名については、浜町の網元であるという。清水いつお氏（昭和一五年生まれ）も由来は知らないというが、子どものころには、漁の網にカメがかかることはあったという。恵美須神社の歴史をまとめている清水進正氏は古老から聞いた話を知っていた。

カメのことは古老から聞いているだけしか分からない。波打ち際にカメが流れ着いた。死んでたか、生きてた

か、分からない。墓を作って祀った。墓を波打ち際に建てた。神社の浜側にあった。その後、今の場所に移した。龍宮様もやり替えた。

このあたりは、昭和一〇年ごろに埋め立てた。それまでは神社のすぐ隣まで砂浜だった。

浜町ではイリコ網が盛んであったが、現在は漁師はいない。昭和一〇年ごろから埋め立てが進んだため、海岸の景観もまったく変わっている。カメの墓についても、これ以上のことは分からなかった。

・浜町の恵美須神社境内の「万寿瑞亀之墓」(表2No.7)(写真58)

(正面)　万寿瑞亀之墓

(裏面)　昭和六年五月八日建之

世話人　村上彌市　高木喜平　村山三郎

本体　高さ　七七cm　幅　三三cm　奥行　一四cm

台座(上)　高さ　二七cm　幅　五二cm　奥行　三二cm

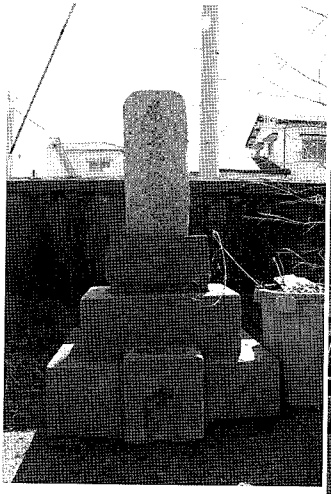


写真58　浜町の恵美須神社境内の「万寿瑞亀之墓」(2016年3月撮影)

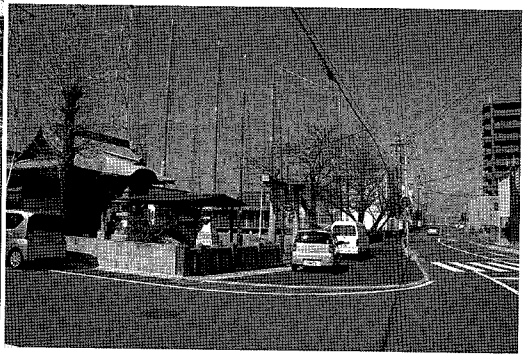


写真57　恵美須神社から海側を望む(2016年3月撮影)

台座（中）　高さ　二七・五cm
　　幅　七五cm
　　奥行　五一cm
台座（下）　高さ　三八cm
　　幅　一〇四cm
　　奥行　七八・五cm
全体の地上高　一六九・五cm

d　日出町の事例

NPO法人おおいた環境保全フォーラム理事長の内田桂氏から、日出町ではウミガメが漂着した際に、僧侶の読経をして埋葬することがある、と教えていただいた。平成二四年（二〇一二）九月一〇日、糸ケ浜海岸にウミガメが漂着したとき、ウミガメの前に線香が添えられていたという。[65]

その後、平成二四年（二〇一二）一一月二日、日出町の城下（しろした）海岸にアオウミガメが漂着した際には、僧侶が読経をして糸ケ浜にウミガメを埋めたという。日出中学校の先生から連絡があって、大分うみがめネットワークがウミガメの調査をおこない、埋葬に立ち会ったという（写真61）。[66] この事例について、日出町役場の農林水産課に問い合わせたところ、『大分合同新聞』平成二四年（二〇一二）一一月四日に「海の守り神ウミガメ安らかに」という

写真59　城下海岸（2016年3月撮影）

見出しで記事が出ていることが分かった。糸ケ浜海浜公園の波打ち際に、一mの穴を掘ってウミガメを丁寧に埋めたという。筆者は、平成二八年（二〇一六）三月、カメの供養を提案したという漁師の阿部大蔵氏（昭和一〇年生まれ）に話をうかがうことができた。

カメを粗末にしてはいけない。死んだのでも弔う、と父から聞いていた。粗末に扱うと七代先まで祟る、と父が言っていた。小さいころから、カメは粗末にするな、大事にしろ、と叩きこまれた。この前は、まさ網に入ってカメが死んでいた。城下海岸の下。湧水のところのまさ網に入って死んでいた。若い人では知らんから、自分が教えた。カメは無茶苦茶したら悪い、やっぱり供養しようということになった。役場に連絡して、産業課だったか、役場の人が来て、きれいな砂浜に持って行って埋めた。真那井の砂浜に埋めた。光蓮寺を呼んだ。役場が呼んだか。ほとんど役場が段取りした。自分は教えて、立ち会っただけ。役場の人に聞いたら分かる。

ほかにもカメを弔ったというのは聞いている。実際には知らんけど。そんな人はもうみんな死んでいる。カメ

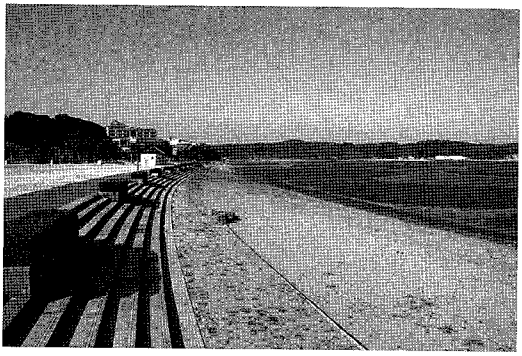


写真60　糸ケ浜（2016年3月撮影）

写真61　糸ケ浜でのウミガメ供養（2012年11月3日、大分うみがめネットワーク活動レポートのブログより転載）

の墓のようなものは見たことはない。

阿部氏は、日出町の中心部である南浜に住んでいる。城下海岸近くの漁師町である。読経をおこなった光蓮寺は、同じく日出町の中心部に位置する。光蓮寺住職の森本信幸氏にも話をうかがった。

糸ヶ浜でカメを埋めてお勤めした。人間並みにした。自分がカメを拝んだのは初めて。昔はしていたみたい。しょっちゅうあるものではない。たまたま打ち上げられた。砂を深く掘って埋めた。浜辺で二回ぐらいあったらしい。二回目といっていた。自分は前のときは行っていない。埋めたところには墓のようなものはない。ほかに供養塔も知らない。

阿部氏が言う真那井の砂浜と、森本氏が言う糸ヶ浜は同じ場所である。日出町中心部から六kmほど離れた場所にある。城下海岸には埋葬する場所がないので、糸ヶ浜に埋葬したという。筆者は、平成二八年（二〇一六）三月、糸ヶ浜も訪れた。海岸を散歩中の八〇歳ぐらいの男性にうかがったところ、何年か前、ウミガメとイノシシが浜で死んでいたという。ウミガメが死んでいたのは初めてということであった。このときは、イノシシと一緒に死んでいたので、イノシシとウミガメを別々に埋葬したが、とくにカメを埋めてやる風習があるわけではないという。大分うみがめネットワークのブログによると、平成二七年（二〇一五）四月二二日に、日出町糸ヶ浜にアカウミガメとイノシシが漂着したとある。[67] 海岸で男性が語った事例は、このときのことかもしれない。

e　国東市の事例

内田桂氏からは国東市国見町にも「海亀神社」という石碑があることを教えていただいた。[68] 港の入口に自然石に「海亀神社」と刻まれた石碑が建っているという。内田氏が地域の人から聞いたところ、昔、死んで漂着したウミガメを祀ったものであるという。内田氏は、おそらく明治時代ではないか、という。

ところで、『国見町史』には、第六編「文化財」第二章「町内のいろいろな文化財」第二節「有形文化財」2「石造文化財」(1)「石造宝塔」の「鳥獣供養塔」の中に、「小高島の海岸に浮亀神社と刻んだ石塔がある。」という記述がある〔国見町史編集委員会　一九九三〕。国東市教育委員会に問い合わせたところ、「浮亀神社」は誤記であり、「海亀神社」が正しい

写真63　「海亀神社」の石碑（2016年3月、国東市教育委員会提供）

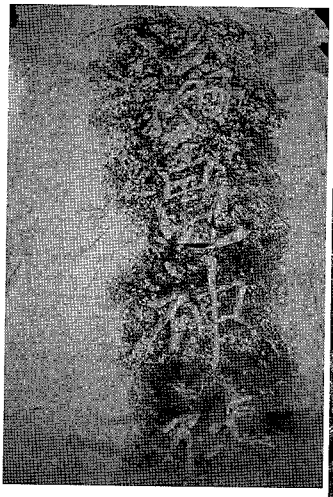


写真64　「海亀神社」の拓本（2016年3月、国東市教育委員会提供）

写真62　「海亀神社」と周辺の石造物（2016年3月、国東市教育委員会提供）

ということであった。内田氏にご教示いただいた事例と、『国見町史』掲載の事例は同じものであると思われる。国東市教育委員会の松本啓子氏が現地を確認してくださったところ、以下のような状況であった。[69] 国見町竹田津小高島に、石造物が五、六基ある。地蔵や社号標、石祠などである。そのなかに、「海亀神社」と刻まれた石碑が建っている（表2No．9）（写真62・63・64）。「海亀神社」という石碑には年号などはなく、神官や地域の方々に聞いても由来は分からないという。ただ、周辺の石造物の年代は文化年間から明治時代であるという。提供いただいた写真から判断する限りでは、明治時代、遅くとも昭和初期までに建立されたものではないかと思われる。周辺には、ウミガメが産卵する砂浜があったといい、昔、近くの海岸にウミガメが来ていたから建立されたのではないか、という人もいるという。内田氏の話も合わせると、「海亀神社」は、明治ごろに、漂着したウミガメを埋葬供養した供養塔ではないかと推測できる。

## 九　考察

### 1　宮崎県・大分県におけるウミガメの民俗の特徴

宮崎県沿岸では、アカウミガメの産卵がみられる。とくに、宮崎市から高鍋町にかけて長く伸びる海岸線一帯には相当数のアカウミガメが上陸・産卵してきた。沿岸部の人々には、ウミガメの産卵は知られていたものの、ウミガメの生態に関する調査や保護活動が開始されるのは、昭和四〇年代後半であった。

宮崎県では、産卵地周辺の集落では、調査・保護活動が開始される以前から、ウミガメの産卵に関する民俗知識があった。ウミガメの産卵を見る、というかかわりもみられた。これは、「おもしろ半分」、「カメと遊ぶ」、「卵で遊ぶ」という表現で語られるように、卵を採ることが目的でも、カメを保護することが目的でもなかった。とくに、砂浜が遊び場であった子どもたちにとっては、ウミガメは好奇心の対象であったようである。大人たちは、産

卵場所で今年の台風の大きさを知る、という民俗知識も持っていた。また、漁民たちは地曳網や定置網にかかるウミガメと出会うことがあった。

大分県では、南部を中心にアカウミガメの産卵がみられる。ただし、宮崎県のような砂丘海岸ではなく、リアス式海岸のため、上陸・産卵頭数は限られており、ウミガメの調査が本格化したのは近年になってからであった。しかし、大分県でも、地曳網や定置網の際に漁民たちはウミガメと出会うことがあった。砂浜は集落から離れたところにある場合も多いが、人々はウミガメの産卵時期を知っており、産卵場所で波の高さを知る、などの民俗知識は持っている。

ウミガメに関する神話・伝説は点在している。宮崎県日南市では、豊玉姫がウミガメに乗って海からやってきたという。鵜戸神宮には豊玉姫が乗ってきたカメがかたまったという「亀石」が存在する。しかしながら、ウミガメに対する信仰や禁忌に結びついて語られることは多くなかったようである。一方、大分県でも、記紀神話にカメが登場する。佐賀関の早吸日女神社などにおいて、竜宮城につながるような言い伝えが語られ、臼杵でもカメが城を背負って守るという言い伝えがあった。

ウミガメの肉を食用にする習俗については、宮崎県では串間市・宮崎市・新富町・延岡市において確認できた。広く食べられたというよりは、限られた地域で食べられていたようである。串間市や宮崎市赤江地区では漁民以外の人が食べたことは確認できなかった。宮崎市の檍地区や旧佐土原町では、漁民が食べていた可能性がある。新富町では、カメ肉を販売する人が複数いたようであり、周辺の集落に販売して回っていたという。ただし、カメの肉を食べることには抵抗感覚もあったようで、広範囲に食習俗が広がることはなかったようである。しかしながら、ウミガメの肉を食べないという禁忌伝承は日南市と宮崎市の一部以外では確認できなかった。大分県では、佐伯市の一部でまれに食べることがあったようである。ただし、大分県で肉の食用習俗を確認できたのは、離島や半島の

先端付近という、ごくわずかな地域のみであった。

ウミガメの卵を食用にする習俗については、宮崎県では沿岸部のほとんどの地域でみられたようである。宮崎市では、卵を採取する場合、必ずいくつかの卵を残す、という言い伝えもあった。砂浜近くの集落や、近隣の農村では、カメの卵を薬用として食べていた。海岸近くの集落や、少し内陸の農村では、採取した卵を販売する人もいた。したがって、海岸近くの集落のみならず、農村や町場でも、ウミガメの卵を買い求めて食べる習俗があった。宮崎県においては、ウミガメの卵の食用習俗は広がりを持っていたようである。大分県では、南部の佐伯市において、産卵地近くの集落を中心に卵の食用があった。大分市付近まで販売することもあったという。

ウミガメに酒を飲ませて放流する習俗については、宮崎県・大分県ともに広く分布している。宮崎県では、ウミガメを食用とする地域でも、食べない場合にはウミガメに酒を飲ませて放していた。しかし、宮崎県の場合は、ウミガメに対する信仰的な意味合いは少ないようである。大分県南部でも、ウミガメに対して酒を飲ませて放流する習俗がある。大分県南部の方が、宮崎県よりも信仰的な意味合いは強いようである。大分県北中部では、生きていれば酒を飲ませて放し、死んでいれば供養塔を建てて供養していた。大分県北中部の場合は、さらにウミガメに対する信仰的な意味合いが強いように思われる。

死んだウミガメを供養する習俗は、宮崎県ではまったく確認できなかった。死んだウミガメに出会うのは、漁民の網にかかっていた場合と、砂浜に漂着していた場合がある。いずれの場合でも、宮崎県ではウミガメを供養する習俗はまったく確認できない。ところが、大分県では、臼杵市・大分市・日出町・国東市に存在している。とくに、臼杵市には五か所に六基の供養塔が建てられている。日出町の事例は、埋葬して供養するというものであるが、供養塔を建てることは確認できなかった。このような供養習俗は、大分県の南部では確認できなかった。

このほか、ウミガメに関する民俗としては、ウミガメがまとわりついている流木を拾い上げて祀るという習俗も

ある〔藤井　一九九九〕。これについては、宮崎県・大分県ともに確認できなかった。

## 2　地域的差異

アカウミガメの産卵は、南西諸島・九州南部・四国南部・紀伊半島南部・遠州灘で多くみられる。九州南部に位置する宮崎県は、鹿児島県とともに、日本列島でも有数のアカウミガメの産卵地となっている。宮崎県北部から大分県南部にかけての砂浜でもアカウミガメの産卵はみられる。海岸の状況にも関係するが、一般的にいえば、宮崎県南部から北上するにしたがって、徐々に上陸・産卵頭数は減少していく。一方、ウミガメの回遊については、大分県南部においても定置網への混獲が多いことから、相当数のウミガメが大分県沿岸海域まで回遊していることがうかがえる。

ウミガメの産卵に関する民俗知識は、南西諸島などと同じようなものが、宮崎県から大分県にかけて認められる。ウミガメの産卵を見てきた人々にとっては、自然と蓄積してきた知識なのであろう。ただし、南西諸島のように、ウミガメの捕獲や卵の採取を前提にした知識とは異なっているように思われる。つまり、沖縄・奄美などでは、ウミガメを捕獲したいために、ウミガメに関する知識を有しているという傾向があった〔藤井　二〇〇四・二〇〇九・二〇一〇〕。卵に関する知識も同様である。しかし、宮崎県・大分県では、ウミガメの肉や卵に関する食用に対する関心は、南西諸島に比べると高くなかったように思われる。そのため、民俗知識も捕獲・採取を前提とした知識とは差異があるようである。

ウミガメの肉を食用にする習俗は、ウミガメの産卵状況とも関係している。全国的な視野でみれば、昭和初期の時点でウミガメの食用習俗が存在したのは、南西諸島・九州南部・四国南部・紀伊半島南部・伊豆諸島が中心であった〔藤井　二〇一二b〕。沖縄・奄美から種子島、大隅半島にかけて広がっているウミガメの食習俗は、宮崎

県南部へとつながっている。串間市の捕獲方法は、銛による突き捕りであり、船祝いに食べる儀礼食であったという点からも〔川崎　一九八五・一九九〇〕、種子島における捕獲・食習俗に共通する点が多い。種子島の南種子町では、アカウミガメを船上から銛で突き捕り、浦祝いでウミガメの肉を共食していた〔藤井　二〇〇九〕。大隅半島先端の佐多岬付近でも、アカウミガメを突き捕っていた〔川崎　一九八五〕。また、高知県や和歌山県でもアカウミガメを銛で突き捕る方法が一般的であった〔坂本　一九九四、藤井　一九九八b〕。捕獲方法からすれば、串間市の場合は、鹿児島県や高知県・和歌山県と共通している。儀礼食としての意味合いは、南種子町と共通している。ところが、宮崎市や新富町の捕獲方法は、地曳網にかかったものを捕獲するだけであり、広域的な比較をすれば、やや特異な形態を示している。これは、砂浜が広がっている宮崎市や新富町の地形、および、この地域の漁業形態に関係していると思われる。新富町の場合は、肉を販売する人がいたという特徴もある。新富町において、肉の食用習俗が盛んであった理由は明確には分からない。古くからの集落が海岸近くにあり、漁業がおこなわれる、砂浜を利用した地曳網が中心であった、というような点は宮崎市赤江地区・檍地区・住吉地区と共通するからである。あえて、宮崎市赤江地区・檍地区・住吉地区などとの違いを挙げれば、都市の近郊ではないという点であろう。カメ肉の販売者がいた新富町日置の野中や高鍋町南高鍋の永谷は、新富町と高鍋町の境界に位置しており、街道からも離れた集落であった。ウミガメ肉の食用や販売については、都市の人々が忌避する傾向があるため、外部の人たちの目につきにくい地域であり、ウミガメの食用を忌避する人々が少なかったからこそ、根強く残っていたということがいえるかもしれない。延岡市においても、ウミガメ肉の食用は確認できたが、実態はよく分からない。文献にも記されていないことから、新富町のように盛んに食べていた可能性は低い。九州東海岸において、盛んにウミガメ肉を食べていた地域としては、宮崎県新富町はほぼ北限であろうと思われる。

ウミガメの卵を食用にする習俗については、肉の食用習俗が顕著でない地域でもおこなわれていた。たとえば、

静岡県の御前崎市などでは、昭和時代には肉の食用習俗は存在しなかったものの、卵を採取して食用にする習俗は存在した〔藤井　二〇一四b〕。全国的にみれば、肉の食用習俗よりもより広い範囲に分布していたと思われる。宮崎県における卵の食用習俗については、これまでは、薬になるという迷信があった、「盗掘率」が高かった、などと言われるだけで、実態がよく分かっていなかった。しかし、聞き取り調査によると、宮崎県の沿岸部では広くウミガメの卵を採取して食用にする習俗が存在したことがみえてきた。南西諸島と同じような、卵をいくつか残すという資源保護的な知恵もあった。

ただし、宮崎県沿岸部の中でも、卵の食用に関して、地域的な差異が認められる。つまり、砂浜のごく近くの集落では、卵を採って遊びながら、薬用として食べることがあった。砂浜から少し離れた農村でも、カメの卵は自分たちで採り、薬用として食べていた。こうした地域での卵の食用は、日常食でも儀礼食でもない。ウミガメの産卵時期に日常的に食べるものではなかったという。また、行事に欠かせない食べ物というわけでもなかった。カメの卵はおいいしかった、また食べたい、というような語りを聞くことはなかった。おいしくなかった、薬だといって親に食べさせられた、という語りが多かった。ニワトリの卵がごちそうとして語られるのと対照的である。金を出してまで買おうと思わない、という人もいた。

しかし、内陸の町場では、砂浜近くの集落から売りに来る卵を買い求めて食べることがあった。町場の人たちにとっては、ウミガメの卵は珍しい存在であった。なかにはウミガメの卵が好きな人もいたという。販売する人たちが効能を宣伝してきたということもあろうが、町場の人たちのほうがウミガメの卵を欲しがる傾向がみられたようである。屋久島などでも、ウミガメの卵を販売していたが、集落内もしくは集落周辺での販売であった[70]。ところが、宮崎市の場合は、市街地が砂浜の近くにあり、また平野が広がっているため、徒歩で行商する時代にも、広範囲に卵を販売して回ることが可能であった。リヤカーを引っ張って野菜を行商する人たちが、ウミガメの卵も販売

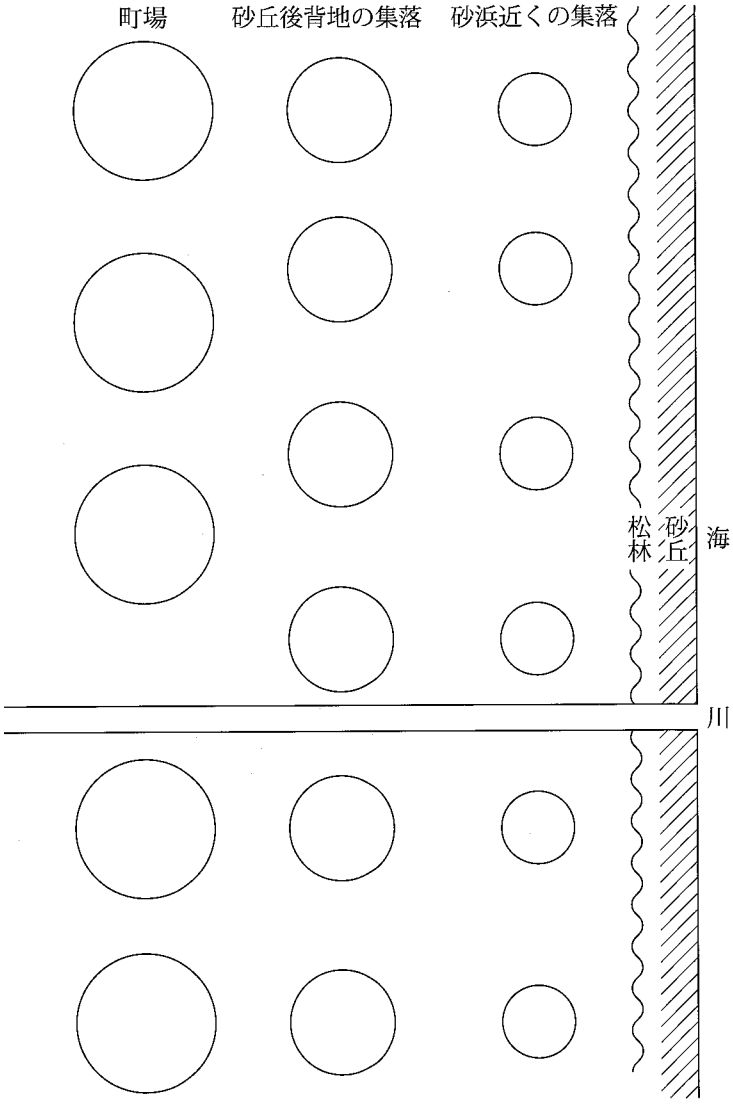



図1　宮崎市周辺におけるウミガメ卵の食習俗の概念図

していたという。宮崎市では、砂浜近くの集落や砂浜近くの農村のみならず、市街地にもウミガメの卵の食習俗が広がっていたのが特徴である。町場での卵の食習俗は、長年にわたって販売する人たちと購入する人たちが作り上げてきたものであったといえよう。

宮崎市赤江地区・檍地区・住吉地区、新富町日置を中心とした調査から、ウミガメの卵の食習俗については、宮崎県の海岸部ではほぼ同じ構造であったと推測できる。高鍋町でも同じような傾向にあったと思われる。このように、宮崎県沿岸部でも、砂浜近くの集落、砂丘後背地の集落、町場という三地域において、ウミガメの卵の食用に対する温度差があったように思われる。

ウミガメに酒を飲ませて放流する習俗については、鹿児島県から青森県にかけて日本列島に広く分布している。最も南で確認したのは奄美群島の加計呂麻島である。ウミガメを食べない地域では定置網などに入ったカメを放流する際に酒を飲ませる。産卵に上陸したカメに酒を飲ませて海に帰すということもあった。とくに、網にかかったカメに酒を飲ませて放すという行為には、カメを丁重に扱うことで、魚を連れてきてもらおうとする心意がある。漁民の縁起担ぎという要素が強い。また、ウミガメを食用とする地域においても、その年最初に網に入ったカメには酒を飲ませて放すという地域もある〔坂本　一九九四〕。宮崎県の場合は、食用とした地域、食用としない地域ともに、酒を飲ませて放す習俗が認められた。大分県においても、この習俗は広く分布していることが確認できた。

死んだウミガメを供養する習俗は、鹿児島県から青森県まで分布する。現在までのところ、全国で二四四か所、三二八事例を確認している〔藤井　二〇一四a〕[71]。ただし、全国的に均質に分布するのではなく、特定の地域に集中する傾向がある。山口県・愛知県・静岡県・千葉県などに多く分布する。今回の調査地である大分県も一一か所で一二事例が確認できた。県単位でいえば、大分県は事例が多いほうになる。しかし、大分県全域に分布している

わけではない。大分県南部では確認できず、分布は北中部に集中している。九州全体を見渡した場合でも、鹿児島県では南種子町・長島町でわずかにみられたのみで、あとは熊本県荒尾市、佐賀県小城市・唐津市、長崎県平戸市・壱岐市に存在する程度である。九州の中部以北に多く分布していることが分かる。つまり、大分県臼杵市と熊本県荒尾市を東西に結ぶ線よりも北側に、ウミガメの供養習俗が多数分布していることになる。

ウミガメの供養習俗がこのような分布をしていることについては、いくつかの理由が考えられる。一点目は、ウミガメの生息状況である。アカウミガメは南九州を中心に上陸・産卵している。アオウミガメなども大分県南部以南に回遊が多い。大分県中部以北では、ウミガメの上陸・産卵、回遊いずれも限られてくる。全国的にみると、ウ

写真 65　臼杵市大泊の「大鯨魚宝塔」(2005 年 3 月撮影)

写真 66　臼杵市中津浦の恵比須神社境内の「鯨神社」(2005 年 3 月撮影)

写真 67　臼杵市津留の貝や魚の供養塔（2005 年 3 月撮影）

ミガメとの接触頻度の高い地域では、食用となる割合が高く、接触頻度が低い地域では神として祀られる傾向が強い。大分県中部は、ウミガメとの接触頻度が低くなるため、食用にはならず、縁起を担ぐなどの理由から、祀る対象となったと考えられる。

二点目として、供養習俗が分布する地域は、食用とする地域に隣接していることも関係がありそうである。全国的にみれば、ウミガメの供養習俗は、ウミガメを食用とする地域に隣接した地域に多く分布する傾向があることを指摘したことがある〔藤井　二〇一二b〕。臼杵湾や別府湾周辺は、ウミガメを食用とする地域からいえば、比較的近い地域に当たる。とくに、臼杵市では、自分は食用にしないが、ウミガメを食用とする習俗について知っている漁民もいる。食用に対する忌避や摩擦はあまり認められなかったが、ウミガメを祀る習俗が顕著なのは、ウミガメを食用とする地域との違いを強調して、自分たちの地域の個性を表現するという特徴もうかがえる。

三点目として、臼杵周辺には、ウミガメにまつわる神話や伝説が多数存在していることも挙げられる。ウミガメは神の乗り物であり、他界と行き来する媒介と考えられてきた。城を守る守り神でもあった。こうした伝承が、昭和時代のウミガメ供養習俗発生に影響を与えていることも間違いない。

四点目としては、クジラなどの供養塔の影響である。臼杵市には幕末から昭和時代にかけてのクジラの供養塔が七基存在する（写真65・66・67[72]）。また、臼杵市には昭和時代に建立された、アワビ・サザエ・ナマコ・カニなどの供養塔も存在する。時代的にみると、臼杵市の場合はクジラの供養塔が古く、昭和時代になるとウミガメをはじめ、さまざまな供養塔が出現したと考えられる。大分県を中心に、生き物の供養習俗をまとめている長野浩典氏は、佐伯市と臼杵市はともに魚類供養塔の高密度地帯であるとしたうえで、両者には違いがあるという。供養塔の数としては佐伯市のほうが多いが、クジラの墓は臼杵市のほうが多い。建立年代は臼杵市のほうが新しく、臼杵市のほうがさまざまな生き物の供養塔があるという。臼杵市の供養塔は、新しく、多様なものが多いという点におい

て、新しい供養塔が多様化してきていると指摘している〔長野　二〇一五〕。臼杵市における海の生き物の供養塔は、クジラ供養の影響を受けて次々と発生し、ウミガメ供養を生み出していったと考えられる。

### 3　時代的変化

歴史的にみた場合、ウミガメの民俗は利用や信仰する対象から、保護する対象へと変化してきたといえる。宮崎県、大分県においても、ウミガメの民俗は変化していたことがみえてきた。

とくに、宮崎県の場合は、昭和三〇年代までは肉や卵の食用が盛んにおこなわれてきた。聞き取りによると、宮崎県の沿岸部の集落では、昭和二〇年代までは、肉屋は近くになく、肉といえば家で飼っているニワトリをつぶして食べるぐらいであったという。こうした時期には、身近に手に入るウミガメの肉は貴重な存在であったと思われる。しかし、昭和三〇年代以降はあまり食べなくなっていった。食糧事情の向上にともない、豚肉や牛肉が容易に手に入るようになったことも大いに影響しているようである。ウミガメの肉は独特のにおいがする。このような独特なにおいや味に対する抵抗感を覚える人が増えていった。また、ウミガメを殺すこと、食べることに対する抵抗感も増していった。全国的にみても、ウミガメの肉は時代をさかのぼるほど食べられていた。江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代と次第に食べる地域が減少していった。地域によって、食べられなくなる時期は異なっている。たとえば、他地域との交通が便利ではなかった地域では遅くまで食べられてきた。離島や半島のような地域である。食糧が手に入りにくいという単純な理由だけではなく、離島などではウミガメの肉が人々の命をつないできたという意味合いが強いため、それだけウミガメを食べることに対するこだわりも強かったと思われる。また、離島などでは、外部の人の目に触れにくいという理由もある。つまり、市街地が近ければ、都市住民によって、ウミガメを捕ることや食べることに対する忌避感や摩擦が生じることがある。和歌山県田辺市では、明治時代から大

正時代に、そのような摩擦があった〔藤井　一九九八b〕。宮崎県の沿岸部は離島や半島ではない。とくに宮崎市の場合は、砂浜は市街地に近い。したがって、ウミガメ食が漁村独特の食文化として残っていくことは難しかったと思われる。他地域よりも、ウミガメ肉を食べなくなる傾向は早かったようである。昭和三〇年代以降は、宮崎県でウミガメを食べたことは聞かない。そのなかでも、新富町の場合は、市街地から比較的離れているために、最後までウミガメの食習俗が残ったということがいえそうである。

卵については、聞き取り調査および文献〔宮崎野生動物研究会　一九七七、清水・中島　一九七八〕によると、昭和二〇年代の食糧難の時代に卵利用は最大になったと考えられる。聞き取り調査によると、昭和三〇年代までは砂浜周辺の集落および、隣接した農村では食べていた。肉よりも遅くまで食べられていたようである。それでも、昭和四〇年代以降はあまり食べなくなっていった。昭和四〇年代までは卵を販売する人も複数いたようであるが、販売についても次第に減少していったようである。

一方、調査・保護にかかわってきた方や、報告書、新聞記事などによると、昭和四〇年代にも卵は九割ほどが採られていたといい、平成八年（一九九六）ごろまで採る人がいたという〔宮崎野生動物研究会　一九七七、竹下二〇〇九など〕。野生動物研究会では、行政に働きかけ、文化財指定を受けて、マスコミに取り上げてもらい、ようやく卵の「盗掘」がなくなっていったという。

ところが、地元の方々からの聞き取りでは、昭和四〇年代までは卵を食べた、売る人もいた、という語りが出るものの、昭和五〇年代まで卵を採っていた人のことはまったく分からなかった。ウミガメの卵を食べなくなったのは、保護が始まったからではない、と断言する方もいた。別の方は、卵を食べなくなった理由として、鶏卵の普及、地曳網の消滅、薬の近代化、野菜行商の衰退、保護の開始などが影響しているという。沿岸部の方々からの聞き取りを総合すると、宮崎県では調査・保護活動が開始される昭和四〇年代半ば以前に、ウミガメの肉や卵に対す

る食用習俗は急速に衰退していたと思われる。[73]

全国的な視野で考えても、ウミガメの食習俗が昭和四〇年ごろには衰退していたというのは妥当性がある。日本の社会が大規模に変化し、生業、食習慣などが大きく変化したのが昭和三〇年代後半から四〇年代にかけてであった。いわゆる高度経済成長期を通じて、人々の生活は隅々まで変化していくことになる。農業・漁業などの生業のみならず、衣・食・住、年中行事、人生儀礼など、さまざまな面で民俗文化は変貌していった。全国的にウミガメの肉や卵の利用が急速に消滅していったのはこの時期であった。

また、ウミガメの生態研究の成果からみても、昭和四〇年代にウミガメの利用が急速に衰えたということが推測できるという。須磨海浜水族園の石原孝氏の研究によれば、アカウミガメの成熟年齢は四〇歳程度であるとされる（石原　二〇一二）。[74] 日本ウミガメ協議会会長の松沢慶将氏のご教示によると、宮崎県や鹿児島県の屋久島での産卵が急激に回復したのは平成一九年（二〇〇七）から平成二五（二〇一三）年の間である。[75] 実際のウミガメの成熟年齢にもある程度の幅（個体差）があるので、産卵数が急激に回復した中間の平成二二年（二〇一〇）の四〇年前、つまり昭和四五年（一九七〇）あたりを中心に利用が急速に衰えたと考えられるという。ただし、松沢氏によると、宮崎県や屋久島でのウミガメの産卵数の回復年は、詳しく分析すれば、平成一九年（二〇〇七）から平成二五（二〇一三）年よりももう少し前になるかもしれないという。そうなると、宮崎での利用が衰えたのは昭和四〇年代前半ということになる。

以上のように、地元の方々からの聞き取り結果や、社会全体の変化、ウミガメの生態研究の成果などからみると、昭和三〇年代から四〇年代前半にかけて、宮崎県でのウミガメ利用は衰退したと考えられる。しかし、調査・保護にかかわった方々や調査報告書によると、昭和四〇年代後半まで、卵の「盗掘率」は高かったという。つまり、卵の「盗掘」をめぐって若干の時代的なずれがあることが分かった。このような卵の「盗掘率」をめぐる時期

的なずれを生み出す理由としては、いくつかの要因が考えられる。

一点目として、地域別にみると「盗掘率」には差があったという問題である。昭和五一年度の報告書をよく見ると、昭和四九年（一九七四）の「盗掘率」は六八・三％であったとしている。ただし、こどものくに海岸ではまったく「盗掘」がみられず、松崎海岸・一ッ葉海岸・住吉海岸では七五～一〇〇％の「高盗掘率」を示していたという。当時の新聞記事にも、赤江では一〇〇％、一ッ葉では七五％、住吉では九八％であったと紹介されている。このように、地域によっては、「盗掘率」が九〇％を越えているところもあったが、宮崎市の海岸全体でみれば、あるいは宮崎県全体でみれば、昭和四〇年代後半には「盗掘率」は九〇％もなかったという可能性がある。

二点目として、「盗掘率」という数字の問題である。四章一節aでみたように、「盗掘率」が高い地域でも、必ずしも「盗掘数」が高いとは限らない。ウミガメの産卵数が減少した場合、ごくわずかな「盗掘」であっても、「盗掘率」としては九割や一〇割という数字になることもある。実際に、昭和五一年度の報告書に出ている「盗掘数」と「盗掘率」を比較すると、たとえば、昭和五一年（一九七六）の木花海岸では「盗掘数」は六月に二、七月に三であったが、上陸・産卵数が少なかったため、年間通じた「盗掘率」は結果として他の地域よりも高くなっている〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。

三点目として、「盗掘率」九割という数字が、保護活動の過程で独り歩きした可能性である。現在確認できる最も古い報告書では、昭和四九年（一九七四）の六八・三％という数字が最高である〔宮崎野生動物研究会　一九七七、清水・中島　一九七八〕。その後、宮崎県のウミガメ保護活動が盛んになっていくにつれて、昭和五四年の「県指定文化財指定申請書」のように、保護活動開始前は「盗掘率」が高かった、九割以上が「盗掘」されていた、という言葉がみられるようになっていく。つまり、保護活動前には「盗掘率」九割であったという数字が、保護活動の過程で独り歩きしていった可能性がある。

四点目として、昭和四〇年代後半の「盗掘率」が高い要因としては、ウミガメの上陸頭数の減少も影響している可能性がある。昭和四〇年代後半は、ウミガメの上陸・産卵頭数が減少し始めた時期でもあったのではなかろうか。宮崎市檍地区では、「カメが上陸してものすごかった。卵を採っても個体数は減らんかった。」ということを聞いた。人々による卵の採取は減少していたが、ウミガメの上陸・産卵頭数そのものが減少したため、「盗掘率」が高くなったという可能性もある。先に紹介した、松沢氏のウミガメ回復と利用衰退の年代推測を当てはめると、昭和初期から昭和二〇年代にかけてウミガメの利用が増加していた、ということも推測できる。聞き取りなどによると、昭和二〇年代前半の食糧難の時代が、最も利用頻度が高かったように思われるが、この時期の利用増加が昭和四〇年代のウミガメ減少につながっている可能性もある。さらに、昭和三〇年代後半から、宮崎県ではでんぷん工場が次々とでき、工場からの排水によって河川が汚染されたという。筆者の聞き取りでは、宮崎市のみならず新富町においても、でんぷん工場による環境悪化の話が語られた。一章一節fで述べたように、昭和四〇年代の新聞記事によると、ウミガメが海水汚染などの理由で死亡していることが取り上げられており、ウミガメの産卵を減少させる環境の悪化が懸念されていた。宮崎市周辺における海岸環境の大規模改変は昭和五〇年ごろから進行した。しかし、これに先だって、昭和三〇年代後半から四〇年代にかけて、ウミガメの産卵を減少させるような自然環境の汚染が進行していたようである。

以上四点のような、地域差の問題、「盗掘率」という数字の問題、「盗掘率」の数字が独り歩きした可能性、ウミガメの減少の可能性、などの要因により、宮崎市では昭和四〇年代後半にも卵の「盗掘率」が高くなっていたという可能性がある。しかしながら、そのような問題だけではなく、実際に昭和五〇年ごろにも依然として高い「盗掘率」を支えていた人々がおり、卵の販売がされていた、というのも事実のようである。次に、昭和四〇年代から五〇年代にかけて、卵の採取をおこない、販売をおこなっていた人について検討してみたい。

まず、卵を「盗掘」する人々の変化の問題である。昭和四〇年ごろまでおこなわれてきたのは、砂浜近くの集落や、砂丘周辺の農村、および周辺の町場の人たちによる採取であった。四章でみたように地元の方々に対する聞き取り調査では、この集落のこのような方が卵を採っていた、卵を売っていた、ということはかなり明確に語られた。ところが、より時代が新しいはずなのに、昭和五〇年代に卵を採っていた人についてはまったく分からなかった。地元の方々からの聞き取りで、どなたからもこの時期に卵を採っていた人のことが語られなかったのは、地元の方々が把握していない人々の手によって卵が採られていた、ということが想定される。

この点について、清水氏・中島氏の文章には、昭和五〇年ごろに卵の「盗掘」を「おこなっていた人のことに触れた部分がある〔清水・中島　一九七八〕。

宮崎、屋久島における古い慣習の採卵法は、一〇〇%を目標にせず、必ず三十個前後の卵を残す「おきて」があった。しかし、今日ではその残された卵すら盗掘する人々がいる。

筆者が地元の方から聞いた話でも、卵を採ったときにはいくつかの卵を残すという知恵があった。この知恵は、昭和五一年度の報告書にも記録されていた〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。昭和五〇年ごろに卵を「盗掘」していた人は、伝統的な慣習を踏まえない人々であったことが示唆されている。また、筆者が竹下完氏から聞いたところでも、「盗掘」はすべての卵を掘り採っていたという。[76] このような、卵の採り方の違いをみても、昭和四〇年代後半から五〇年代にかけて、外部の人が「盗掘」に関与するようになった可能性がある。亀崎直樹氏によると、鹿児島県の吹上浜でも卵を採る際には卵を半分残すということがあったという〔紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会　一九九四〕。宮崎県・鹿児島県ともに、昭和四〇年代から五〇年代にかけておこなわれていた

ウミガメの卵採取には、地元の者が入っていたとしても、民俗的な知識・知恵を背景にした採取ではなくなっていたようである。

昭和四〇年代から五〇年代にかけて、「盗掘」をおこなう人が変化していたことを裏付ける資料として、一章一節fで紹介した昭和四〇年代から五〇年代の新聞記事があげられる。当時の新聞記事は、宮崎市周辺でおこなわれてきた、昔ながらの卵採取についても触れている。昔からウミガメの卵は薬、精力剤などとして重宝されたこと、小遣い稼ぎに売り歩く人がいたこと、などである。とくに、四章一節aで取り上げた『西日本新聞』昭和五〇年五月九日の記事は、筆者の聞き取り結果とほぼ同じ内容が書かれている。つまり、戦前から終戦直後ぐらいの時期には、卵を売り歩く人がいたということと、卵を食べた人は卵はうまいものではないと語る、という点である。

当時の新聞記事には、こうした地元の習慣とは区別する書き方で以下のような「盗掘」が記されている。県外業者の依頼で掘る、関西から業者が「盗掘」に来る、ジープを乗り付けて大規模に「盗掘」している、関西で卵を売っている、子ガメをペットとして売る商人がいる、子ガメを壁掛けにして売っている、土産物業者が甲羅を飾りにするために親ガメを捕る、などである。当時の新聞記事によると、このような県外業者がかかわった大規模な「盗掘」は、昭和四〇年代前半からおこなわれていたようである。ここに記されている「盗掘」は、聞き取り調査で地元の方々から聞いたことや、新聞記事・文献などに記されている卵採取の内容とは明らかに異なっている。つまり、地元の人々が自分たちが薬用として食べるために卵を採ることや、小遣い稼ぎに卵を農村や町場に売る、という形態とは大きく異なっているのである。

このように、昭和四〇年代には、地元の人たちが卵を採る、食べる、売る、というよりは、外部の業者が関与した大規模な「盗掘」が横行するようになっていた。この時期に、大規模な「盗掘」が活発化したのは宮崎県以外にもみられた。昭和三〇年代後半からの高度経済成長以降、市場での販売を目的にした、外部の人たちによるウミガ

メの卵の採取が活発化したといわれている。日本ウミガメ協議会の初代会長であった亀崎直樹氏は、「金儲けのための採卵が行われるようになり、かなりひどい卵の採取が行われました」と述べている〔紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会　一九九四〕。鹿児島県の吹上浜では、昭和五〇年代にも外部の販売ルートがかかわっていたともいい、ウミガメの調査・保護をおこなっていた鹿児島大学の学生に対する妨害事件も起こったという。静岡県御前崎市でも、静岡市や浜松市から卵を買いに来ていたということを聞いたことがある〔藤井　二〇一四b〕。

宮崎県の場合は、鹿児島県ほど外部への卵の販売は盛んではなかったようであるが、昭和五〇年代には、聞き取り調査においても、宮崎市内の飲み屋でウミガメの卵が出されていたり、大阪の飲み屋に販売するという話も語られた。鹿児島県ほど大規模ではなかったと思われるが、昭和五〇年代には少なくとも、宮崎県から外部への卵の販売ルートがあったということになろう。いずれにしても、昭和四〇年代から平成にかけておこなわれていた卵採取については、地元の人たちが、もともと卵を採っていた方法とは大きく異なった採り方、販売スタイルがおこなわれていた、と考えることができる。

昭和四〇年代から五〇年代にかけて、宮崎県や鹿児島県を中心に、なぜ「かなりひどい卵の採取」がおこなわれるようになったのであろうか。次にこの問題を考えてみたい。大きな要因としては、高度経済成長により、道路の整備と自動車の普及が急速に進んだため、砂浜周辺の集落以外からも、容易に浜辺へ行くことができるようになったことがあげられる。昭和四九年の新聞記事には、車で砂浜に乗り付けることも問題視されていた。「盗掘」目的ではなくても、車で砂浜に乗り入れることが広まったのが昭和四〇年代であった。

昭和三〇年代までは、宮崎市周辺の砂浜でも、外部の者が容易にウミガメの卵を採ることはできなかった。海岸近くには松林があり、砂丘がいくつもあった。そして、砂浜も今よりも相当広かった。卵を採りに行こうとする場

合、徒歩で松林や砂丘を越えて行かなければならなかった。一人で松林を越えていくのはさびしかったと語る話者もいた。このような時代には、外部の者が、大規模に、卵の「盗掘」をおこなうことは困難なことであったと思われる。

また、海岸近くに入り江がある地域もあった。たとえば、檍地区での聞き取りにおいて、一ッ葉入り江があった時代には、外部の者がカメの卵を採りに行くことはできなかった、ということを聞いた。地元の者は船があるから、自由に砂浜に行くことができたが、外部の者は船がないので砂浜には用意にたどりつけなかったという。しかし、昭和五〇年ごろからの宮崎港の改修などにより、一ッ葉の浜辺にも外部の人たちが容易に到達できるようになった。道路の整備と、自動車の普及により、地元ではない人々がウミガメの卵を採ることが可能になったのである。宮崎県沿岸部では、このような入り江がいくつもみられたが、海岸部のみならず、河川や河口の改修などもあって、現在では大きな入り江は少なくなっている。

このような、道路の整備や自動車の普及にともなって、町場の人たちの卵に対する嗜好が高まったということも考えられる。昭和三〇年代までは、宮崎市の町場の人たちは、浜辺の集落の人や、野菜行商の人たちから卵を買っていた。しかし、容易に浜辺に行けるようになったため、町場の人たちが卵を直接採りに行くことができるようになったのである。砂浜近くの集落の人たちは、ウミガメの卵は薬として食べたが、おいしくはなかった、と語る方が多い。しかし、昭和一〇年代、二〇年代に、卵が売られていた町場の人にとっては、ウミガメの卵は栄養価の高

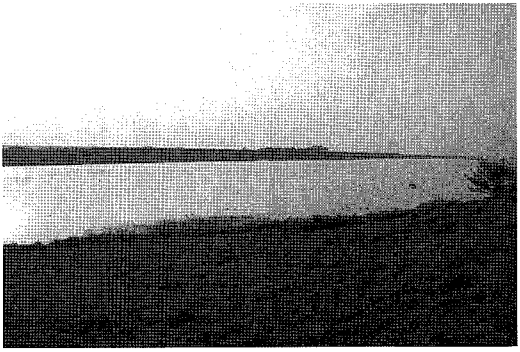


写真68　富田浜入り江（2015年12月撮影）

い貴重品であり、付加価値のあるものであったに違いない。ニワトリの卵が普及し、薬が出回るようになっても、ウミガメの卵に対する好奇心と食への欲求は、浜辺の人たちほどにすぐには低下しなかったかもしれない。そして、町場の人も容易に浜辺へ行けるようになると、自分で卵を採りに行くという人がでたとしても不思議ではない。ただし、そうした町場の人たちの卵採取は、外部の業者がからむような、大規模といえるものではなかったと思われる。

このように、昭和四〇年代から五〇年代にかけての時期にも、町場の一部の人たちの採取があった可能性がある。砂浜近くの人々の採取も部分的には残っていたと思われる。しかし、この時期におこなわれていた大規模な「盗掘」は、外部の業者がからんだ組織的・計画的なものであったようである。

このほか、一章一節fで紹介したように、昭和四〇年代の新聞記事によると、ウミガメにいたずらをする、砂浜に車を乗り入れて騒ぐ、観光客が産卵の邪魔をして卵をつぶす、などという問題も生じていた。昭和四〇年代から五〇年代には、釣り客やサーファーも宮崎市周辺の海岸で増加した。[77] 野生動物研究会がまとめた報告書においても、一章一節gで述べたように、昭和末期から平成にかけての時期には、釣り客やサーファーが珍しいからという理由で「盗掘」にかかわっていた可能性が高いことが指摘されている。ただし、この場合は、珍しいから掘ってみるという程度のものも多かったように思われる。

以上のように、昭和四〇年代後半から五〇年代前半にかけて、依然として高い「盗掘率」が示されていたのは、「盗掘」する人々の変化が関係しているようである。聞き取り調査や文献などを総合すると、以下のようなことがうかがえる。地元における伝統的・慣習的なウミガメの卵採取は昭和三〇年代後半から四〇年代前半にかけて、社会全体の変化にともなって、急速に衰退していったと思われる。海岸近くの集落では、卵の食習俗もなくなっていった。昭和四〇年代には、以前からの慣習的によって卵を採る人もまだ残っていたが、道路の整備や自動車の普

及により、次第に外部から砂浜に入ってくる人たちが採取にかかわるようになっていった。なかには市街地の人も含まれていたと思われるが、県内外の業者がからんで大規模な「盗掘」がおこなわれるようになった。ただし、市の天然記念物指定後の昭和五〇年代には卵の「盗掘」は急速になくなっていった。ウミガメ保護にかかわっておられた方々が根絶しようとしていたのは、伝統的な知識・知恵にもとづいた卵採取とは隔絶した、まさしく乱獲的な「盗掘」であったと思われる。

「盗掘率」という数字の問題や、「盗掘」する人々の変化という問題はあるにしても、結果として昭和四〇年代後半以降も卵の「盗掘」が続いていたため、宮崎市を中心にした地域でウミガメを調査・保護する活動が活発化した。宮崎県の場合は、動物園関係者や宮崎大学の教員を中心とした人々がウミガメに対する調査・保護活動、および啓蒙活動を開始した。沿岸部の人々は、ウミガメに対する民俗知識はあったものの、あまり関心はなかった、と語る方が多い。しかし、昭和三〇年代後半からの高度経済成長、列島改造にともない、全国的に急速な自然環境の悪化が進んだことで、地域の人々も海岸環境やウミガメに関心を持ち始めていた。さらに、昭和五〇年代以降、宮崎県の海岸部では、大規模な開発がおこなわれてきた。宮崎港の改修や宮崎空港の滑走路延長によって、海岸の砂は流出したと考えられている〔林　二〇〇七〕[78]。海岸の様子はがらっと変わった、と語られる。宮崎市では海岸部の環境が大きく変貌したため、ウミガメの産卵する砂浜は急速に減少していった。したがって、野生動物研究会の活動も、「盗掘」をなくすことから、海岸環境の保全へと活動の目的を広げてきている。現在では、海岸部の人々も、海岸環境の保全を考え始めている。野生動物研究会・行政・学校などの啓蒙活動の効果もあって、人々はより広い環境意識の一環でウミガメ保護を捉えているようである。

以上の結果をふまえて、宮崎市周辺における人々とウミガメのかかわりの変化をあらためてまとめると以下のようになる。昭和二〇年代までは広く地域住民の卵利用があった。昭和三〇年代後半から四〇年代は、海岸全体の利

用が減少し、地域住民の卵利用も減少した。同時に環境の悪化があり、外部の卵利用が急増した。大規模な「盗掘」と環境悪化に危機感が高まり、昭和四〇年代後半以降、調査・保護が開始された。昭和五〇年以降は、天然記念物という地域資源としてウミガメを活用していくことが模索され始めた。

一方、大分県で本格的なウミガメ調査が開始されたのは、平成二一年（二〇〇九）ごろであった。大分県でウミガメが注目されるようになったのは、ごく最近であるといえる。大分県ではウミガメの肉食用はほとんどなく、卵の食用も南部を中心としたものであった。昭和三〇年代には次第に衰退したようである。宮崎県のように、卵の「盗掘」をやめさせるために始まったわけではなかった。むしろ、大分県におけるウミガメの実態がよく分からないために、ウミガメの産卵や漂着の状況を把握しようと開始されたようである。また、供養習俗については、全国的にいえば衰退している地域が多い。しかし、大分県では、臼杵市のように、昭和末年まで供養塔を建てるところがあった。また、日出町のように、現在でも漁民の提案によって供養習俗をおこなっているところもみられる。

## おわりに

筆者が大分県臼杵市にウミガメ供養塔の調査に入ったのは平成一七年（二〇〇五）であった。それ以降、全国的な一覧や日本ウミガメ協議会の機関誌以外で臼杵市の事例を紹介することはなかった。今回の大分県調査では、臼杵以外にも供養習俗が存在することが分かった。日出町では最近もウミガメ供養がおこなわれていたことが分かった。ウミガメの民俗についてまとまった報告のなかった宮崎県にも調査に入ることができた。宮崎県から大分県までの海岸線は長い。砂浜海岸やリアス式海岸など、海岸の地形もさまざまである。漁業形態にも違いがある。ウミガメの民俗にも差異があることがあらためて確認できた。

また、宮崎県で保護活動が活発になる以前に存在した食用習俗についても確認できた。従来、宮崎県ではウミガ

メの卵の「盗掘」が盛んであったというイメージが強かった。しかし、地域的にも時代的にも利用頻度や利用形態に差異があることが分かってきた。平成初年まで続いていたウミガメの卵採取は、地域の人々による伝統的な利用とは隔絶したものであったようである。この時期の卵の採取は、地域の人々がおこなってきた零細な採取・販売ではなかったと思われる。野生動物研究会の人々の努力によって、こうした「盗掘」はなくなっていった。

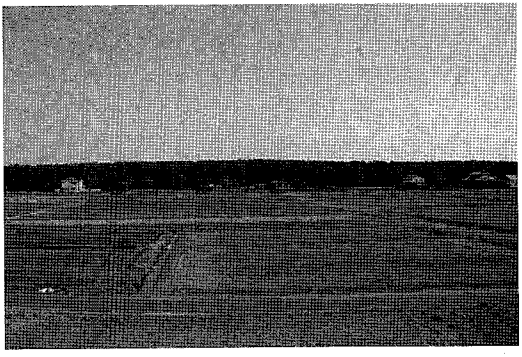


写真69　山崎町の松林（2016年3月撮影）

写真70　新富町今別府の松林（2015年12月撮影）

食用のような消えゆく民俗も含めて、かつておこなわれていた習俗をできるだけ正確に記録することが本稿の大きな目的のひとつであった。また、ウミガメの調査・保護活動が活発になった背景を、ウミガメの民俗の変化のなかで捉えることもひとつの目的であった。本稿では、宮崎県における肉・卵の利用習俗を明らかにすることができた。この習俗自体は、決して否定するものではない。むしろ、利用習俗の記憶を受け継ぐことも含めて、ウミガメ保護をおこなっている地域もある。[79] 本稿では、また、調査・保護活動の方々が取り悩んでおられた「盗掘」の実態についてもある程度明らかにできた。ウミガメの利用は、単純な図式で保護と対立するものではない。ウミガメの保護は、地域の資源管理という問題とからんでいる。宮崎県の場合は、地域住民の食資源としてのウミガメ利用か

ら、無秩序で大規模な「盗掘」をやめさせることで、より広域的な地域の資源として天然記念物というウミガメ利用の方向に変化したということができるのである。

「盗掘」という表現を使用してきたが、市や県の天然記念物指定を受ける前、ウミガメの卵はだれのものでもなかった。集落から松林を越えて、いくつかの砂丘を越えた先に大きな砂浜が広がっていた。周辺の集落の人々は、地曳網をしたり、貝や海藻を採った。流木を拾って薪にすることもあった。子どもたちにとっては、砂浜は遊び場であった。海岸の松林で松葉をかくことも、地域の人々にとっては重要な仕事であった。ガス・電気がない時代には、松葉は家での焚きつけに必要であった。また、販売して収入を得ることもあった。松林ではショウロと呼ばれるキノコを採ることもあった〔黒木　二〇一〇、黒木　二〇一五〕[80]。松葉の場合は、集落ごとに区画が定められていて、松葉かきの権利が決まっていた。ところが、流木やウミガメの卵などは、特定の集落のものでもなく、だれが採りに行ってもよかったという。採った際に、卵をいくつか残すという知恵はあったものの、規制があったわけではない。それでも、ウミガメは減少しなかった。徒歩や自転車で移動していた時代は、遠方の砂浜まで卵を採りに行くようなことはなく、遠方から採りに来ることもなかったという。また、卵を採りに行った経験のある方は、松林と砂丘を越えて行くのは寂しかったと語る。入り江がある地域では、船がないと砂浜に到達できなかった。現在では、宮崎市周辺の砂浜はだれでも容易に到達することができるが、昭和三〇年代までは外部の者が到達しにくい場所であった。こうしたことも、ウミガメの保全につながっていたと思われる。あるいは、宮崎県においてはウミガメの卵や肉を食べていても、カメは大事にするもの、あまり採るものではない、という意識もあった。さらに、卵はあまりおいしいものではなかった、ということも乱獲につながらなかった一因であろう。

むしろ、昭和五〇年ごろから現在にかけて、ウミガメの上陸・産卵頭数の減少に影響を与えているのは、海岸環境の変化による砂浜の流失が最も大きな問題である。沿岸部の人々は、ウミガメをはじめとする海岸の自然と、さ

まざまな形でかかわってきた。松葉かきのように、利用することで保全する、という思想があった。砂丘上の松林の場合は、自家用としての利用度も高く、収益にもなったため、集落ごとに区域が設定され、維持管理をおこなっていた。ところが、砂浜の場合は、流木・海藻・魚・貝、そしてカメの卵などを利用し、遊び場として使っていたものの、集落ごとに維持管理していたとはいいがたい。所有者・所有権が明確ではなかったために、ウミガメの卵は外部からの自由な「盗掘」にあい、悲劇に見舞われたということもできる。しかし、管理主体が明確であった砂丘の松林でさえ、燃料革命や大規模開発などにより、維持管理できなくなってきた。砂浜の場合は、管理の主体が隣接する集落ではなかったため、また、より広域な河川環境の変化、空港や港の大規模開発などにより大きな影響を受けている。地域住民が有していた資源管理の方法や民俗知識、自然とのかかわりを見つめなおすことで、ウミガメの保護のみならず、海岸環境の保全に結び付けていくことも重要であろう。

(注)

(1) 竹下完氏など、宮崎県においてウミガメの調査・保護活動を牽引してきた方はウミガメの卵を採ることを一貫して「盗掘」と表現している。厳密に言えば、昭和五〇年（一九七五）の宮崎市指定天然記念物になる以前は、「盗掘」とはいえないが、宮崎県のウミガメ保護活動に尽力されてきた方々の表現は貴重である。したがって、本稿では竹下氏などの表現を尊重して、そのまま引用させていただく。ただし、筆者は民俗学の立場から、各地の民俗事例と合わせて、卵の採取と表現しておく。

(2) たとえば、宮崎県椎葉村では、神楽や狩猟・焼畑などだけではなく、山の幸を食べつくす食文化も注目されているが〔飯田　二〇〇五〕、沿岸部の食文化に関してはあまり研究は進んでいないようである。

(3) 実際には、大分県佐伯市には、沖黒島のカワウの糞を肥料として採取する習俗を確認するために調査に行っ

た。その際に、ウミガメの民俗についても聞き取りをおこなった。沖黒島におけるカワウの糞採取については、本紀要に掲載している。

(4) たとえば、『宮崎の動物』には、「アカウミガメ（赤海亀）」という項目に、「宮崎市の日向灘に接する海岸の砂浜に、ウミガメが毎年上陸することは古くから知られている。」と記されている〔清水　一九七八〕。

(5) 宮崎県の郷土資料のなかで、ウミガメ関連の記述がある文献については、宮崎県立図書館からのご教示によるところが大きい。旧檍村、旧住吉村のほか、旧赤江町に関する郷土資料も確認いただいたが、旧赤江町ではウミガメに関する記述は見当たらないという。

(6) 中島茂氏は長野県出身で、昭和初期から宮崎に居住している。また、清水薫氏は昭和一二年（一九三七）の宮崎農林専門学校農学科の卒業生で、昭和一八年（一九四三）より宮崎農林専門学校動物学教室に着任している〔中島・清水　一九四八〕。中島氏、清水氏とも、のちに宮崎大学農学部教授となっている。

(7) こどものくに海岸では、昭和四四年（一九六九）から正確な上陸頭数が記録されているというが（『昭和五二年度　アカウミガメ調査報告書』）、今回の調査ではこの時期の報告書を見つけることはできなかった。

(8) 宮崎県立図書館に問い合わせたところ、昭和四〇年代から五〇年代にかけてのウミガメに関する新聞記事をご教示いただいた。『朝日新聞』、『西日本新聞』、『毎日新聞』、『宮崎日日新聞』、『読売新聞』に合計一〇五件のウミガメ関連記事がみられた。

(9) 竹下氏は、愛知県犬山市の日本モンキーセンターに勤務していたが、宮崎フェニックス自然動物園の建設のために宮崎に来た人物であった。竹下氏がウミガメの足跡を見つけた昭和四六年（一九七一）五月は、動物園の建設がほぼ終了した時期であったという。竹下氏からは平成二七年（二〇一五）一一月、メールにてウミガメ保護の経緯や民俗的な情報について教えていただいた。

(10) 岩本氏からは平成二七年（二〇一五）一二月、メールにてウミガメ保護の経緯や民俗的な情報について教えていただいた。岩本氏によると、宮崎大学の中島義人氏（のちの宮崎野生動物研究会会長）もこの時期から連携していたという。なお、岩本氏自身は昭和五一年（一九七六）からウミガメ調査に加わったという。

(11) 昭和四九年度の報告書については、宮崎野生動物研究会には保管されていないという。また、市指定の天然記念物を管轄する宮崎市教育委員会にも保管されていないという。こどものくに、フェニックス自然動物園、宮崎県立図書館、宮崎大学附属図書館、日本ウミガメ協議会にも所蔵されていない。昭和四九年度の調査報告書は、市指定天然記念物の根拠になった資料であり、天然記念物指定直前の新聞記事にも、宮崎市は文化財審議会（田中熊雄会長）に報告書を提出したことが書かれている（『宮崎日日新聞』昭和四九年一〇月二二日）。しかし、今回の調査では昭和四九年の報告書を見つけることができなかった。

(12) 徳島県日和佐海岸では、昭和二五年（一九五〇）からウミガメ調査が開始され、昭和三三年（一九五八）に徳島県指定の天然記念物、昭和四二年（一九六七）には国指定の天然記念物に指定されている。静岡県御前崎海岸などにおいても、昭和四〇年代からウミガメの調査が始まっている。御前崎のウミガメが静岡県指定の天然記念物になるのは昭和五二年（一九七七）、国指定の天然記念物になるのは昭和五五年（一九八〇）のことであった。

(13) その後、平成一六年（二〇〇四）には、宮崎野生動物研究会はＮＰＯ法人となっている。

(14) 明神山海岸は旧佐土原町になるため、宮崎市指定の天然記念物の範囲ではない。しかし、昭和五〇年（一九七五）六月の調査区設定の段階から明神山海岸も調査がおこなわれている。

(15) 新聞記事に標柱を建てる写真が掲載されているほか、清水氏・中島氏の文章にも標柱の写真がある〔清水・中島　一九七八〕。

(16) 野生動物研究会では、アカウミガメ保護のための情宣活動として、昭和五〇年代初頭から、「アカウミガメの産卵を見る会」や、「アカウミガメの稚ガメを送る会」などを開催している。『西日本新聞』昭和五四年一二月二三日には、石井正敏氏撮影の「アカウミガメを見る会」の写真が掲載されている。昭和五六年（一九八一）には、「アカウミガメの稚ガメを送る会」に一〇〇〇人もの参加者があったという（『昭和五六年度　アカウミガメ調査報告書』）。しかし、放流会において放流された子ガメは、帰海行動に悪影響が出ると指摘されるようになったため、野生動物研究会では平成の初頭ごろから、会独自の放流会を中止するようになった。また、同じころから、卵の移植も必要最小限にとどめるようになった（『宮崎野生動物研究会二〇〇一年度会報』）。

(17) 宮崎県立図書館によると、昭和五九年（一九八四）一二月～昭和六〇年（一九八五）一月の『宮崎日日新聞』には、この成果を発表した記事は見当たらないという。したがって、この調査結果がいつマスコミに発表されたのかは分からなかった。

(18)『平成八年度　宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』では、「盗掘」は二件となっている。しかし、同報告書の「平成八年度の各調査地域に於ける月別上陸・産卵調査のまとめ」には、「盗掘数」・「盗掘率」ともに〇となっている。しかし、『平成九年度　宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』には、平成八年度は「盗掘」が〇であったので、二年連続で「盗掘」はなかったとしている。また、『平成一〇年度宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』および、『宮崎野生動物研究会　一九九八年度会報』によると、平成八年度から三年間、「盗掘」は確認されていないという。

(19) 延岡市長浜海岸では、地元の寺田九平氏が、昭和四六年ごろからウミガメの保護を呼びかけていた（『毎日新聞』昭和五一年九月一日）。

(20) 昭和四九年の報告書が残っていないことは、注(11)にも述べたとおりであるが、正式な報告書は五一年度の成果をまとめた『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』が最初のようである〔宮崎野生動物研究会　一九七七〕。この報告書は、宮崎県立図書館をはじめ、各地の大学図書館にも所蔵されている。昭和五二年度以降の調査報告書は、宮崎市教育委員会で保管されている。情報公開請求によって複写を提供いただくことができた。昭和五二年度の報告書は手書きの報告書であり、宮崎大学の便箋に書かれている。昭和五三年度、五四年度は活字になっているが、五五年度、五六年度、五七年度は再び手書きの報告書となっている。その後は、活字の報告書を出している。昭和五二年度から六〇年度の報告書は『〇〇年度　アカウミガメ調査報告書』、昭和六一年度は『昭和六一年度　宮崎　指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』、昭和六二年度から平成一〇年度にかけて、『〇〇年度　宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』となっている。いずれも、宮崎野生動物研究会がまとめたものである。野生動物研究会では、平成一〇年度(一九九八)より、『宮崎野生動物研究会　一九九八年度会報』という冊子を作っている。平成一〇年度のみ、『平成一〇年度　宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』というものと、別の冊子になっている。内容はほぼ同じであるが、『宮崎野生動物研究会　一九九八年度会報』のほうには「宮崎海岸の形状変化について」や、毛皮調査報告なども掲載されている。平成一一年度(一九九九)から平成一五年度(二〇〇三)にかけては、『宮崎野生動物研究会会報』と『宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書』は同一冊子となっている。表紙をめくった扉に「宮崎県指定天然記念物アカウミガメ調査報告書」と記載されている。平成一六年度(二〇〇四)以降は『宮崎野生動物研究会会報』となり、扉には「アカウミガメ調査」とのみ記載されるようになる。現在、二〇一二年度の会報まで刊行されている。

(21) ただし、『宮崎日日新聞』昭和五一年一〇月一六日によると、昭和五一年の「盗掘率」は一三・九%と紹介さ

れている。

(22)「県指定文化財指定申請書」は昭和五四年（一九七九）七月三日に、宮崎市教育委員会から宮崎県教育委員会に対して、ウミガメ繁殖地を県指定にするよう求めた文書である。宮崎市に対する情報公開請求により、宮崎市教育委員会から提供いただいた。

(23) 平成二〇年（二〇〇八）、長年のウミガメ調査・保護活動が評価され、宮崎野生動物研究会に対して、朝日新聞社主催の「明日への環境賞」が贈られた。その記事に、「当初、卵の盗掘は産卵数の85％にも及んだ」と出ている（『朝日新聞』平成二〇年五月六日宮崎版）。八五％という数字は、竹下完氏から教えていただいた最も早い段階の「盗掘率」、および竹下氏の文章〔竹下　二〇〇九〕と合致する。

(24) 宮崎野生動物研究会から提供いただいた報告書と、宮崎市に対する情報公開請求により宮崎市教育委員会から提供いただいた報告書による。

(25) 新富町の場合、ウミガメ調査が開始されたのは昭和五五年（一九八〇）に県指定の天然記念物になってからであった。したがって、保護が早くからおこなわれたから「盗掘」がなくなったという説明は妥当ではないと思われる。むしろ、四章で述べるように、新富町はウミガメの肉のほうが好まれた地域であり、昭和二〇～三〇年代においても卵の採取は盛んではなく、販売についてはほとんどなかったようである。

(26) 内田氏からは、平成二八年（二〇一六）二月から三月にかけて、メールにてウミガメ保護の経緯や民俗的な情報について教えていただいた。

(27) 環境庁（現、環境省）が実施してきた海棲動物調査は、ウミガメなどの大型海棲動物を対象に、分布・繁殖状況や生息域の現状等を調査することにより、調査対象種の生息域である沿岸環境保全の為の基礎的資料を整備することを目的としたもので、平成九年（一九九七）以降に、上陸・産卵する砂浜の既存資料収集、現

地調査、環境調査をおこなっている。大分県の報告書である「海棲動物調査（ウミガメ生息調査）平成一〇年度（一九九八）大分県」については、うみたまごの星野和夫氏より提供いただいた。大分県の報告を含め、全国的な情報をまとめた報告書として平成一四年（二〇〇二）の「浅海域生態系調査（ウミガメ調査）報告書」(http://www.biodic.go.jp/reports2/5th/umigame/5_umigame.pdf) がある。「浅海域生態系調査（ウミガメ調査）報告書」については、環境省自然環境局生物多様性センターのホームページにて公開されている。

(28) 注（26）に同じ。

(29) 平成二七年（二〇一五）八月、筆者は現地を訪れ、センターの中井真理子氏に話をうかがった。

(30) 根岸幹雄氏は、日本近海で多くみられるウミガメはアオウミガメとアカウミガメであるとしたうえで、長浜海岸に上陸してきたのはアオウミガメであるとしている。根岸氏はその後の記述においても、宮崎県沿岸に来るのはアオウミガメとしている。しかし、その後の、ウミガメ研究で明らかになっているように、延岡市に上陸しているウミガメもアカウミガメであるため、根岸氏の出会ったウミガメもアカウミガメであろうと思われる。

(31) 檍地区の調査において、小戸町の風習などを記した文献を教えていただいた。しかし、ウミガメのことはいずれの文献にも出ていなかった〔岩切　一九九七・一九九九・二〇〇二〕。

(32) 斉田健氏からの聞き取りは、平成二八年（二〇一六）三月、筆者からの問い合わせにより、宮崎県教育庁の黒木秀一氏が実施してくれたものである。その後、筆者が斉田氏に電話にて確認をした。二章に掲載した部分は、筆者の聞き取りである。

(33) 古くから、「亀石」に向かって、賽銭を投げるという風習があった。昭和二九年ごろ、鵜戸の小学生たちが賽

銭を拾って遅刻するということが続いたため、神社と学校が協議し、粘土を丸めて作った玉に「運」の文字を刻んだ「運玉」を作って投げるようになった〔本部　二〇一二〕。

(34) 早吸日女神社の境内に立つ説明板（佐賀関町教育委員会、一九九三年）によると、本殿・拝殿ともに宝暦一三年（一七六三）に、熊本藩主・細川重賢によって再建され、その後、屋根替・改修を経ているという。

(35) http://hachimannkamado.sub.jp/

(36)『大分合同新聞』二〇〇四年一一月二八日朝刊には、「開運、健康お願いします　拝殿前に御神亀　八幡竈門神社で除幕式」という記事が出ている。神社創建一二八〇年の記念事業の一環として、なで亀が設置されたという。この記事については、大分県立図書館からご教示いただいた。

(37) 田中熊雄氏は、宮崎大学学芸学部（のちの教育学部）の日本史研究室の教授であった〔宮崎県　一九九九〕。

(38) 注（9）に同じ。なお、竹下氏からの「盗掘」に関する情報は、報告書の数字をまとめた一章一節fの結果とは若干異なっている。しかし、長年、ウミガメの調査・保護にかかわった竹下氏の経験から語られたものであるため、赤江地区で最後まで「盗掘」がおこなわれていたという語りには意味があると判断した。

(39) 注（10）に同じ。

(40) 前田博仁氏は小学校の教員や県教育委員会などに勤務した経験があり、宮崎県の民俗を研究している。また、地元の赤江地区の歴史や民俗にも詳しい方である。しかし、ウミガメのことは意識して調べたことはなかったという。

(41) 井野氏からの聞き取りは、平成二八年（二〇一六）三月、筆者からの問い合わせにより、宮崎県教育庁の黒木秀一氏が実施してくれたものである。

(42) 井野豊子氏からの聞き取りは、平成二八年（二〇一六）三月、筆者からの問い合わせにより、宮崎県教育庁

の黒木秀一氏が実施してくれたものである。

(43) 注(32)に同じ。四章に掲載した部分は、黒木氏が聞き取りをした内容に、筆者の聞き取り内容を合わせたものとなっている。

(44) 宮崎県教育庁の黒木秀一氏が職場の方に聞いてくださった情報による。

(45) 新富町教育委員会の樋渡氏によると、日置の読み方は、地籍や郵便では「ひおき」であるが、地元では「へき」と呼ぶ方が多いという。なお、日置の中の上日置は、「うわべき」と呼ばれている。

(46) 横山芳武氏からの聞き取りは、平成二八年(二〇一六)三月、筆者からの問い合わせにより、宮崎県教育庁の黒木秀一氏が実施してくれたものである。

(47) 根井幸恵氏からの聞き取りは、平成二七年(二〇一五)一二月におこなったが、平成二八年(二〇一六)三月に、新富町教育委員会の樋渡氏から補足の情報を得た。

(48) 注(26)に同じ。

(49) 冨髙氏からカメの話が出たのは、カワウの卵を食べることを聞いていたときであった。沖黒島のカワウの卵を食べた、という語りに続いてカメの卵も食べた、という語りが出てきた。それを受けて、ウミガメの民俗知識や放流などの質問をしていった。

(50) 大双津と表記する場合もある〔蒲江町教育委員会　一九七七〕。大騒津の地名には、以下のような由来がある。①神武天皇が日向より大和へ行く途中に入津湾へ立ち寄った際、波が大きく騒動していたから、②逃げてきた平家が源氏と戦い大騒動したから、③オオカミが多く、騒々しかったから、などといわれている〔北九州大学民俗研究会　一九七四〕。

(51) 奄美大島宇検村におけるウミガメの食習俗については、現地調査をしてまとめたことがある〔藤井

二〇一〇〕。

(52) たとえば、鹿児島県奄美大島の宇検村では、半島の先端に近い屋鈍という集落においてウミガメを盛んに食べていた〔藤井　二〇一〇〕。長崎県対馬市の南端に位置する豆酘という集落においては、潜水してウミガメの捕獲技術を有する漁民がいた〔藤井　二〇〇八〕。

(53) 注(44)に同じ。

(54) 根岸氏はここでも、アオウミガメとしている。網に入るウミガメとしては、アオウミガメの可能性もある。

(55)「こどものくに」では、現在は、まったくウミガメ調査・保護とは関係していないといい、ウミガメにかかわった経緯も分からないという。ただ、カメを放流していた当時の写真などは残っているという。現在の園長によると、カメを放流するイベントをしていたのは、昭和五〇年代までであろうという。

(56) 注(32)に同じ。六章に掲載した部分は、黒木氏が聞き取りをした内容に、筆者の聞き取り内容を合わせたものとなっている。

(57)『大分合同新聞』二〇一三年八月五日夕刊に「佐賀関に〝竜宮伝説〟　カメは長〜い友達」による。大分市教育委員会が佐賀関の古文書の会などに問い合わせてくれたが、ウミガメに関する記述がある文書は分からなかった。教育委員会がこの記事を書いた記者に問い合わせてくれたところ、江戸時代の帆足万里が書いた文章に出ている可能性があるという。その後、本論文の校正段階において、大分市教育委員会の植木和美氏より、『帆足万里全集一』に、ウミガメに関する記述があることを教えていただいた。ただし、その内容は、新聞記事に出ているようなものではなく、佐賀関におけるウミガメのことがらでもなかった〔帆足記念図書館　一九八八〕。

(58) 本田健二氏は大分県立水産高校の教員であった。斉藤行雄氏は臼杵市において、歴史や民俗を調査しながら、

臼杵の街並みの保全や妖怪文化の活用などを試みている。

(59) 松崎かおり氏・猿渡士貫氏の一九九五年二月七日の調査データによる、としている。

(60)〔藤井　二〇一四a〕では、地上高を一〇九cmとしたが、一五四cmに訂正する。

(61)〔藤井　二〇一四a〕では、地上高を五九cmとしたが、五四cmと訂正する。

(62) 筆者は、成城大学民俗学研究所が実施した研究プロジェクト「沿海諸地域の文化変化の研究―柳田国男主導『海村調査』『離島調査』の追跡調査」の研究会において、プロジェクトのメンバーから、佐賀関のウミガメ供養塔の存在をご教示いただいた。

(63)『大分合同新聞』二〇一三年八月五日夕刊に「佐賀関に〝竜宮伝説〟　カメは長～い友達」という記事が出ている。そこには、「社務所の向かいには一九六七年に建立された「大亀碑」がある。当時、海岸に打ち上がった大ガメを弔うために建てた石碑だ。「カメは畳1枚ほどの大きさがあり、誰もがたまげた」と小野宮司(82)。」と書かれている。

(64)〔藤井　二〇一四a〕では、地上高を二三七cmとしたが、三三〇cmと訂正する。池の中からの高さは計測していないが、本体などの高さから全体の高さを推測した。

(65) 大分うみがめネットワーク活動レポートのブログ（二〇一二年九月一〇日）に「日出町糸ヶ浜海岸でウミガメ漂着」というタイトルで、漂着したウミガメの写真とともに、記事が出ている。
http://blog.goo.ne.jp/kei_uchida/e/e65a0d2d86c5e9d45b6e6c8fc344a013
（二〇一六年二月二九日閲覧）

(66) 大分うみがめネットワーク活動レポートのブログ（二〇一二年一一月三日）に「日出町、城下海岸でアオウミガメの漂着」というタイトルで、漂着したアオウミガメの写真、僧侶の読経のもとで埋葬される様子の写

真とともに、記事が出ている。

http://blog.goo.ne.jp/kei_uchida/e/92ea607586935f7c61d876535 95e6eb6

（二〇一六年二月二九日閲覧）

(67) 大分うみがめネットワーク活動レポートのブログ（二〇一五年四月二二日）に「漂着！　ウミガメ&イノシシ？」というタイトルで、アカウミガメとイノシシの写真が出ている。

https://ja-jp.facebook.com/ooita.seaturtle

（二〇一六年二月二九日閲覧）

(68) 大分うみがめ・ネットワーク活動レポートのブログ（二〇一三年二月四日）に「国東市海亀神社にお参り」というタイトルで、「海亀神社」の写真と記事が出ている。

http://blog.goo.ne.jp/kei_uchida/e/5c26ab3ce2b69ae47ece38b786b6222d

（二〇一六年二月二九日閲覧）

(69) 平成二八年（二〇一六）二月一八日に問い合わせた。当日のうちに現地確認をしてくださり、その後もメールにて問い合わせに対する回答をしてくださった。

(70) 筆者の調査によると、屋久島の永田ではカメの卵を採る権利を入札して、地区ごとに採取していた。屋久島の永田や栗生では、子どもたちがカメの卵を採って、集落内を売り歩き、学用品の費用にすることもあった。

(71)「日本列島のウミガメ供養習俗」において、二三二か所、三一六事例を把握していたが〔藤井　二〇一四a〕、その後、現地調査により、静岡県七か所と青森県二か所の事例を新たに確認した〔藤井　二〇一四b・二〇一五〕。今回の調査では、大分県で新たに三か所の事例を追加したため、さらに合計数は増加している。

(72) 臼杵市では、明治四年（一八七一）に建立された、臼杵市大泊の「大鯨魚宝塔」が最も古い。ただし、臼杵市板知屋の「鯨地蔵」は、幕末のころに打ちあがったクジラを供養するために建てられたという言い伝えがある。このほか、中津浦の恵比須神社境内には、二基のウミガメ供養塔と並んで、明治一五年（一八八二）の「鯨神社」がある。臼杵市大浜には明治二七年（一八九四）と昭和一九年（一九四四）、臼杵市佐志生には明治一九年（一八八六）のクジラの供養塔がある。また、臼杵市津留には、昭和六三年（一九八八）に建立された「鯨之墓」もある。このように、臼杵市には幕末から昭和時代にかけて建てられた鯨の供養塔が七基存在している。松崎憲三氏は、九州沿岸のクジラ供養塔について、寄りクジラを何らかの形で処理して鯨肉や大金を得たという事例と、クジラは神の使いとして食べずに埋葬だけしたという事例の両方が存在すると指摘している〔松崎　一九九六〕。臼杵市のクジラ供養も、両者の場合がみられる。

(73) 調査・保護活動を昭和五〇年ごろからおこなってきた宮崎野生動物研究会の会員でも、保護活動を開始したころにはすでに卵の採取は減少してきていたと語る人もいた。

(74) 松沢慶将氏には、平成二八年（二〇一六）四月にメールにてご教示いただいた。

(75) 注（74）に同じ。

(76) 注（9）に同じ。

(77) 宮崎県でサーフィンが始まったのは昭和四五年（一九七〇）で、昭和五五年（一九八〇）になると、サーフィンブームが到来し、宮崎市の赤江から木崎浜にかけて増え始めた。昭和五九年（一九八四）に、宮崎で初めてサーフィンのコンテストが開催されている〔上村　二〇〇六〕。また、『昭和五四年度　アカウミガメ調査報告書』によると、「最近の釣り客の増加には目を見張るものがあり」と記していることから、昭和五〇年代には釣り客も大幅に増加していることがうかがえる。

(78) 昭和三二年（一九五七）に導流堤が建設されて大淀川の河口が固定され、昭和四一年（一九六六）に宮崎港の岸壁工事が開始された。しかし、一九七〇年代にはまだ広い砂浜があったという。昭和五六年（一九八一）に宮崎港の防波堤建設が始まり、平成二年（一九九〇）には宮崎空港の滑走路が二五〇〇mに延長された。宮崎市の砂浜の浸食が始まったのは、一九八〇年代であったという〔林　二〇〇七〕。

(79) 自治体によって、かつての利用習俗に対する態度は異なっている。新富町の場合は、保護活動をおこなうなかで、食習俗の記憶が語られることが多いようである。少なくとも、かつての食習俗は決して否定される存在ではないようである。

(80) ショウロなどのキノコは、松葉をかいて松林をきれいにしておかないと生えないという。したがって、松葉かきがあまりおこなわれなくなった現在では、宮崎県の海岸ではショウロなどはほとんど生えなくなっている。なお、宮崎市山崎町では昭和三七年ごろからプロパンガスが入って松葉かきが必要なくなったという。また、昭和四〇年ごろまではショウロは販売されていた〔黒木　二〇一五〕。松葉かきがなくなった時期、ショウロの販売がなくなったのは、海岸近くの集落が浜辺の資源を利用しなくなった時期でもあった。この点からも、ウミガメの卵を採らなくなった時期は、昭和四〇年ごろと思われる。

（参考文献）

檍郷土史編さん委員会編　一九九〇　『檍郷土史』　檍振興会
檍小学校　一九三〇　『阿をき史』　檍小学校
飯田辰彦　二〇〇五　『生きている日本のスローフード　宮崎県椎葉村　究極の郷土食』　鉱脈社
石井正敏　一九八四　『ウミガメ　海から来たお客さん』　平凡社

石井正敏　一九九四　「宮崎のウミガメ調査に参加して」亀崎直樹ほか編『日本のウミガメの産卵地』日本ウミガメ協議会
石原孝　二〇一二　「生活史　成長と生活場所」亀崎直樹編『ウミガメの自然誌』東京大学出版会
今井謙介　二〇一四　「大分県でまれにみられる両生類爬虫類」『九州両生爬虫類研究会誌』五
岩切恒雄　一九九七　『小戸町の歩み』　私家版
岩切恒雄　一九九九　『小戸町の思い出』　私家版
岩切恒雄　二〇〇二　『小戸町の習俗』　私家版
岩本俊孝　一九九四　「アカウミガメの生態」『宮崎県地方史研究紀要』一九
上村貴志　二〇〇六　「赤江浜人工リーフ問題　宮崎の砂浜の行方」『日向時間』創刊号
臼杵市史編さん室編　一九九二　『臼杵市史　下』　臼杵市
臼杵妖怪共存地区管理委員会・臼杵ミワリークラブ編　二〇〇九　『亀城下異談』　臼杵妖怪共存地区管理委員会・臼杵ミワリークラブ
大分放送大分百科事典刊行本部編　一九八〇　『大分百科事典』　大分放送
小野西渓　一九三一　「臼杵七島」『臼杵史談』三
甲斐亮典　二〇〇七　『宮崎の神話伝承　その舞台55ガイド』　鉱脈社
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八六　『角川日本地名大辞典　四五　宮崎県』　角川書店
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編　一九八〇　『角川日本地名大辞典　四四　大分県』　角川書店
蒲江町教育委員会編　一九七七　『蒲江町史』　蒲江町
蒲江町史編さん委員会編　二〇〇五　『蒲江町史』　蒲江町

亀崎直樹・通事裕子・松沢慶将編　二〇〇二『日本のアカウミガメの産卵と砂浜環境の現状』　日本ウミガメ協議会
川崎晃稔　一九八五「海亀の民俗」『鹿児島民具』六
川崎晃稔　一九九〇「海亀の民俗」大林太良ほか編『海と列島文化　五　隼人世界の島々』小学館
紀伊半島ウミガメ情報交換会・日本ウミガメ協議会編　一九九四『ウミガメは減っているか　～その保護と未来～』　紀伊半島ウミガメ情報交換会
北九州大学民俗研究会編　一九七四『入津湾の民俗　大分県南海部郡蒲江町旧上・下入津村』　北九州大学民俗研究会
国見町史編集委員会編　一九九三『国見町史』　国見町
黒木秀一・崎田一郎　二〇一〇「宮崎平野における海岸クロマツ林のキノコ民俗」『宮崎県総合博物館研究紀要』三〇
黒木秀一　二〇一五『宮崎のきのこ』　鉱脈社
河野憲一　一九八一「国東・姫島村の漁民伝承」『伝承文学研究』二五
小島孝夫　二〇〇三「漁業の近代化と漁撈儀礼の変容　―千葉県銚子市川口神社ウミガメ埋葬習俗を事例に―」『日本常民文化紀要』二三
小島孝夫編　二〇〇五『海の民俗文化』　明石書店
酒井富三　一九四〇『臼杵町誌』　臼杵図書館
坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注　一九九四『日本書紀　一』　岩波書店
坂本正夫　一九九四「海亀の民俗」『土佐民俗』六一

佐野武夫　一九六八　「大鯨魚宝塔」『臼杵史談』六〇
佐土原町編　一九九八　『佐土原町合併四〇周年記念誌』　佐土原町
佐土原町閉町記念誌編集委員会編　二〇〇五　『佐土原町閉町記念誌』　佐土原町
清水薫氏編　一九七八　『宮崎の動物』　宮崎日日新聞社
清水薫氏・中島義人氏　一九七八　「生きた化石　一ウミガメの産卵と孵化」西日本新聞社出版部編『九州沖縄の生きものたち　四』西日本新聞社
新富町編　一九九二　『新富町史　通史編』　新富町
杉本つとむ編　一九七四　『小野蘭山　本草綱目啓蒙』　早稲田大学出版部
住吉尋常高等小学校編　一九三五　『住吉郷土誌』　住吉尋常高等小学校
田口理恵・関いずみ・加藤登　二〇一一　「魚類の供養に関する研究」『東海大学海洋研究所研究報告』三二
竹下完　二〇〇九　「宮崎のウミガメ保護の取り組み」日本ウミガメ協議会編『日本ウミガメ誌二〇〇九』日本ウミガメ協議会
田中熊雄　一九八一　『宮崎県庶民生活誌』　日向民俗学会
中島茂・清水薫　一九四八　『暖地の動物学』　文華堂
中島義人　一九八九　「宮崎のアカウミガメについて　一　上陸・産卵行動」『みやざきの自然』二
中島義人　一九九〇　「宮崎のアカウミガメについて　二　回帰・回遊行動」『みやざきの自然』三
長野浩典　二〇一五　『生類供養と日本人』　弦書房
日南市産業活性化協議会編　二〇一五　『日南の神々を訪ねて』　日南市産業活性化協議会
根岸幹雄　一九七九　『延岡とその周辺の動物雑話』「動物雑話」刊行会

萩原浅男校注　一九八三　『完訳日本の古典　一　古事記』　小学館
林裕美子編　二〇〇七　『海岸情報誌　宮崎の海岸』七　私家版
日向市史編さん委員会編　二〇〇六　『日向市史　自然編』　日向市
日向民俗学会編　一九六三　「食物習俗資料（1）」『日向民俗』一六
藤井弘章　一九九八a　「ウミガメの墓　―和歌山県内の事例報告―」『和歌山県立博物館研究紀要』
藤井弘章　一九九八b　「紀伊半島南部におけるウミガメ漁とその食習俗」『日本民俗学』二一五
藤井弘章　一九九九　「ウミガメと流木にまつわる漁撈習俗」『エコソフィア』四
藤井弘章　二〇〇〇　「ふるさとの歳時記　一四　ウミガメと流木」『ニュース和歌山』二〇〇〇年五月一一日
藤井弘章　二〇〇一　「地域差と時代差からみたウミガメの民俗　―海村・離島追跡調査から―」『成城大学民俗学研究所紀要』二五
藤井弘章　二〇〇三　「海洋民研究における環境民俗学的視点」増尾伸一郎ほか編『環境と心性の文化史　下　環境と心性の葛藤』勉誠出版
藤井弘章　二〇〇四　「沖縄のウミガメ捕獲儀礼と食習俗」国学院大学日本文化研究所編『東アジアにみる食とこころ』おうふう
藤井弘章　二〇〇五　「知多半島のウミガメ埋葬・供養習俗」『名古屋民俗叢書　四　生活環境の変化と民俗』
藤井弘章　二〇〇八　「対馬・壱岐におけるウミガメの民俗　―亀卜の里とウミガメ―」『民俗文化』二〇
藤井弘章　二〇〇九　「動物食と動物供養」『人と動物の日本史　四　信仰のなかの動物たち』吉川弘文館
藤井弘章　二〇〇九　「種子島のウミガメ漁」『民俗文化』二一
藤井弘章　二〇一〇　「奄美のウミガメ漁　―島の民俗知識と琉球・ヤマト文化圏との交流―」『民俗文化』二二

藤井弘章　二〇一一　「隠岐・山陰沿岸のウミガメの民俗」『民俗文化』二三
藤井弘章　二〇一二a　「山口県のウミガメの民俗　―長門地方の祭祀・供養習俗を中心に―」『民俗文化』二四
藤井弘章　二〇一二b　「民俗　ヒトとウミガメの関係史」亀崎直樹編『ウミガメの自然誌』東京大学出版会
藤井弘章　二〇一二c　「ウミガメにまつわる報恩説話と禁忌伝承」『万葉古代学研究所年報』一〇
藤井弘章　二〇一三a　「江戸時代におけるウミガメ祭祀の成立過程　―宮城県七ヶ浜町の伝承と新出資料の比較を通して―」『近畿大学大学院文芸学研究科紀要混沌』一〇
藤井弘章　二〇一三b　「愛知県のウミガメの民俗」『名古屋民俗』五九
藤井弘章　二〇一三c　「東北地方太平洋沿岸のウミガメの民俗　―東日本大震災後の追跡調査を踏まえて―」『民俗文化』二五
藤井弘章　二〇一四a　「日本列島のウミガメ供養習俗」『動物考古学』三一
藤井弘章　二〇一四b　「静岡県のウミガメの民俗　―御前崎市・伊東市における一五・六年前の調査をふまえて―」『民俗文化』二六
藤井弘章　二〇一五　「青森県のウミガメの民俗　―江戸時代の流木と現在の甲羅・剥製祭祀習俗を中心に―」『民俗文化』二七
藤井弘章　二〇一六　「ウミガメの民俗　一四　大分県のウミガメの民俗」『マリンタートラー』二一
帆足記念図書館編　一九八八　『帆足万里全集一』　ぺりかん社
本田健二・斉藤行雄　一九八三　「臼杵市の魚鱗塔等について」『臼杵史談』七四
本部雅裕　二〇一二　『鵜戸さん　その信仰と伝承』　鉱脈社
別府市編　一九八五　『別府市誌』　別府市

松崎憲三　一九九六　「寄り鯨の処理をめぐって」『日本常民文化紀要』一九（松崎憲三　二〇〇四　『現代供養論考　ヒト・モノ・動植物の慰霊』　慶友社、に再録）
宮崎県編　一九九九　『宮崎県史　別編　民俗』　宮崎県
宮崎日日新聞社宮崎県大百科事典刊行委員会編　一九八三　『宮崎県大百科事典』　宮崎日日新聞社
宮崎野生動物研究会編　一九七七　『市指定天然記念物調査報告書　四　アカウミガメ』　宮崎市教育委員会
宮崎野生動物研究会編　一九九八　『宮崎県指定天然記念物　アカウミガメ』　宮崎県教育委員会
宮崎野生動物研究会編　二〇一〇　『宮崎県の海岸の状況とアカウミガメの産卵場報告書』　宮崎野生動物研究会
宮脇和人・細川隆雄　二〇〇八　『鯨塚からみえてくる日本人の心　―豊後水道海域の鯨の記憶をたどって―』　農林統計出版
村上あや　一九八三　「現代の記録　―臼杵公園の今昔―」『臼杵史談』七四
村上あや　一九八四ａ　「うすきの花びら35　道4　〝首切り〟お断りの儀式」『大分合同新聞』昭和五九年七月一一日付
村上あや　一九八四ｂ　「うすきの花びら36　道5　「甚吉坂」のおと先生」『大分合同新聞』昭和五九年七月一二日付
本部雅裕　二〇一二　『鵜戸さん　その信仰と伝承』　鉱脈社
森山善蔵・小林晶・鈴木章・生野喜和人　一九八五　「日豊海岸国定公園の景観　―自然現象、地形・地質、植生、野生動物、自然・文化景観―」『日豊海岸国定公園学術調査報告書』大分県環境保健部
柳田国男校訂　一九七九　『日本紀行文集成　一』　日本図書センター
山内清・竹下完・出口智久・韓志朗・芳賀聖一・大橋登美男　一九八四　「アカウミガメ（Correta caretta）の卵

の化学的成分について」『宮崎大学農学部研究報告』三一
山田平之丞　一九六六　『米水津村誌』　米水津村
吉井正治　一九八〇　「臼杵市内の鯨の墓について」『臼杵史談』七一
吉原友吉　一九七七　「鯨の墓」『東京水産大学論集』一二
米水津村誌編さん委員会編　一九九〇　『米水津村誌』　米水津村

（付記）

宮崎県宮崎市では、大西敏夫氏・金丸文章氏・金丸正広氏・川崎好氏・菊池喜継氏・黒木健史氏・児玉輝夫氏・斉田健氏・日髙章氏・前田博仁氏に話をうかがい、檍地域事務所・黒木秀一氏（宮崎県教育庁文化財課）・宮崎県教育庁文化財課・宮崎市教育委員会文化財課・宮崎市福祉部長寿支援課のお世話になった。宮崎県新富町では、大木隆幸氏・太田功氏・梶原憲明氏・瀧口紘二氏・瀧口幸子氏・瀧口初美氏・出口弘敏氏・根井武俊氏・根井幸恵氏に話をうかがい、新富町教育委員会生涯学習課・樋渡将太郎氏（新富町教育委員会生涯学習課）・民宿初音のお世話になった。このほか、宮崎県では、岩切康二氏（宮崎野生動物研究会）・岩本俊孝氏（宮崎野生動物研究会会長）・小山博氏（宮崎県総合博物館）・亀崎直樹氏（日本ウミガメ協議会前会長）・こどものくに・竹下完氏（元宮崎野生動物研究会会長）・フェニックス自然動物園・松沢慶将氏（日本ウミガメ協議会会長）・宮崎県立図書館・宮崎大学附属図書館・宮崎野生動物研究会のお世話になった。

大分県佐伯市では、中井真理子氏（ＮＰＯ法人おおいた環境保全フォーラム）・久寿米木大作氏・清水聡氏・冨高晃氏・冨高丈夫氏・成松多哲氏・鳴海吉三郎氏・鳴海勝子氏・濱田平士氏・山田朝子氏・山田周平氏に話をうかがい、清水マリン・清家隆仁氏（佐伯市歴史資料館館長）・福田聡氏（佐伯市教育委員会）・民宿先の家・民宿白鷺

のお世話になった。大分県臼杵市では、板井覚氏・板井秀次氏・久保田修太郎氏・斎藤行雄氏・平松豊彦氏・三重野利幸氏・三重野君子氏に話をうかがい、岡村一幸氏（臼杵市文化財管理センター）・古谷美和氏のお世話になった。大分県大分市では、清水いつお氏・清水進正氏・日名子和代氏・早吸日女神社宮司に話をうかがった。日出町では、阿部大蔵氏・森本信幸氏に話をうかがい、厚田健太氏（日出町農林水産課）のお世話になった。このほか、大分県では、植木和美氏（大分市教育委員会文化財課）・臼杵市図書館・内田桂氏（ＮＰＯ法人おおいた環境保全フォーラム理事長）・大分市教育委員会文化財課・生活環境部生活環境企画課自然保護温泉班・大分県立図書館・光蓮寺・星野和夫氏（大分マリーンパレス水族館「うみたまご」飼育部企画開発室）・松本啓子氏（国東市教育委員会）のお世話になった。

宮崎県宮崎市の調査は平成二七年（二〇一五）一二月・二八年（二〇一六）三月、新富町の調査は平成二七年（二〇一五）一二月、大分県佐伯市の調査は平成二七年（二〇一五）八月・一一月、大分県大分市（浜町）の調査は平成二八年（二〇一六）三月、大分県日出町の調査は平成二八年（二〇一六）三月におこなった。なお、大分県臼杵市・大分市（佐賀関）の調査は、平成一七年（二〇〇五）三月に、科学研究費補助金若手研究（B）「ウミガメをめぐる食と祭祀についての民俗学的研究」（研究代表者：藤井弘章）においておこなったものである。

なお、本稿で掲載した写真は、注記したもの以外はすべて筆者の撮影である。